

菅江真澄資料センター

真 澄 研 究

22号

出羽庄内の信仰風土……………	春 山 進	1
講演記録		
菅江真澄と内田ハチ―科学・教育・図絵―……………	石 井 正 己	9
白井秀超手沢本『榊葉日記』の紹介……………	羽 柴 亜 弥 嵯 峨 彩 子	35
大館市指定文化財「真崎文庫」に おける真澄自筆資料……………	松 山 修	69

平成30年3月

秋田県立博物館

出羽庄内の信仰風土

山形県民俗研究協議会会長 春 山 進

一 はじめに

天明四（一七八四）年に出羽庄内を訪れた菅江真澄の足跡は「罫田濃刈寝」に詳らかである。その足跡をこのたび辿り直してみたところ、二、三の興味深いことがあった。

一つは、真澄が書き留めてくれた貴重な民俗資料である大波渡の「さえの神の森」の信仰が現在では全く失われており、国道の拡幅工事などでその場所も定かではないこと。二つ目は、真澄全集ではさすがに注が施されているが、栃屋での宿所が「常林寺」ではなく「禪林寺」であったことは真澄の記憶違いであったのかも知れない。が、三つ目はそう単純な事情ではなさそうである。羽黒参詣の記事が『三山雅集』を下敷きにしていることは早くから指摘されているが、特に「兎堂」が「西行戻」の次に紹介されている点は、参詣の道順からしても不自然である。真澄が強く抱いた関心事を列記したのであると思うしかない筆致である。

ともあれ、真澄の見聞に入らず、講演時にも触れずじまいであった、庄内の信仰風土の概略について次に紹介したい。

二 「モリ」について

付図「庄内信仰風土」（方位など恣意的な模式図である）の左下、鳥海山にある山名《鍋森・扇子森・月山森》は、鳥海山の火口を囲む外輪山であり、それぞれに「森」と名付けられているが森林限界を超えていて森を形成していない。

森にあらざる山をなぜ「森」と称するのか。この疑問について、つとに、清少納言が『枕草子』のなかで言及している。曰く「ようたての森といふが耳にとまるこそ、あやしけれ。森などいふべくもあらず、ただ一木あるを、なにごとにつけけむ」（三巻本一九三段「森は」）と。一本の木しかないのになぜ森と呼ぶのかという不審は、一千年前にはすでに「モリ」は「森」しか意味しなくなっていた、という事情を明らかにしている。

「モリ」の語源について谷有二は次のように述べている。

古代人は、墓場は山そのものだとする観念を持っていたから、葬列の出発を「ヤマ行き」、棺桶を「ヤマ桶」と

呼んだり、寺には必ず〇〇山と山号がつくのも、そのせいである。そして、船の帆柱の付け根を「モリ」と呼ぶのも、船霊様ふねだまを祭った場所だからである。神や祖霊が、天と地を往復する接点にほかならない。現代の日本人は、もう、その感覚を忘れてしまったが、信仰の共同文化圏にある、お隣の朝鮮半島では、今でも墓をモイと呼び、山もモイと呼んで、完全に墓＝山の思想を持ち続けている。「森」の字は漢音ではシンとしか読めない。和訓でモリと発音するのは、朝鮮語の影響ではないのか……。

(平凡社『山名の不思議』「なぜ山を森と呼ぶのか」)
この「山＝モリ＝墓」を実証する民間信仰行事が庄内に残る『モリ供養』である。平成十二年に文化庁より「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択され、現在までに調査報告書と映像記録がまとめられている。

この行事は報告書によれば「庄内地方を中心に、盆の時期にモリと呼ばれる特別な場所に於いて行われる有縁無縁供養」と規定され、ホトケと呼ばれる死者の霊魂は子孫による三十三年の供養を受けることで清浄化し、モリの山↓金峯山↓月山へとたどり着き地域共同体のカミとなる、と柳田国男「山中他界観」ふうの解釈もなされている。

この『モリ供養』における「ホトケ」と「カミ」の関係性

が、庄内と隣接する地域の、「仏壇」の上部に「神棚」を設える祀りの形態となっている。「カミ」となつて月山や鳥海山に鎮座します「祖霊」が盆などに帰り依りつく場としての「神棚」であり、「ホトケ」は「仏壇」の固有名詞である戒名が記された位牌に依りつくのである。

菅江真澄は小岩川の西光寺に四日間滞在しているが、その間に、当寺で一七七三年に始められたという「モリ供養」については、話題に上ることはなかったようである。

三 「祖霊信仰」のいふ

柳田国男は「先祖の話」のなかで次のように述べている。

第一に死してもこの国の中に霊は留まり遠くへは行かぬとおもつたこと、第二に顕幽二界の交通が繁く、単に春秋の定期の祭だけで無しに、何れか一方の心ざしによつて、招き招かることがさまで困難で無いように思つていたこと、第三には生人のいまわの時の念願が、死後には必ず達成するものと思つていたことで、是によつて子孫のためにいろいろの計画を立てたのみか、更に再び三たび生まれかわつて、同じ事業を続けられるもののごとく、思った者が多かったというのが第四である。

柳田が提示したこの「祖霊信仰」が日本人の信仰基盤を形

成していることは明らかである。「第一」は「山中他界観」として『モリ供養』の淵源となっている。先祖霊が死後も子孫の傍らにいて「草葉の陰から見守って」くれるように、その死者霊が祟りを及ぼすことのないように、鄭重に年忌を重ねる。三十三年のトイキリ（トムライアゲ）まで供養を受けた死霊は月山頂上の祖霊社（現在は霊祭殿となっている）にカミとして鎮座していると考えられている。

「第二」の「顕幽二界の交通が繁」きことは、春秋の彼岸に墓参する習俗が日本だけのものであることからもうなずける。年神でもある祖霊が太陽信仰に基づく農事暦の節目である彼岸にも訪れると信仰されているわけである。

さらに「第四」の「再び三たび生まれかわ」ることこそは、庄内信仰風土の根幹をなしているものと思われる。平成二十八年に文化庁は「出羽三山」を日本遺産に認定した。そのテーマの概要を地元新聞は次のように紹介している。

県内初認定となった出羽三山の「生まれかわりの旅」は、現世利益をかなえる羽黒山が現在、祖霊が鎮まる月山が過去、生命誕生の湯殿山が未来をそれぞれ表すとされ、この三山を巡ることは江戸時代に庶民の間で「生まれかわりの旅」として広がり、地域の人々に支えられながら、自然と信仰が結び付き時代を超えて今に伝えられて

いる。（平成二十八年四月二十七日付「荘内日報」）

四 なぜ「生まれかわり」か。

出羽三山修験の基幹にあるものは、いまさら言うまでもなく、やはり月山への信仰であったと思われる。冬期間の積雪によって羽黒に三神合祭殿が設けられそこで祭祀が執り行われることは現実的であり、国つ神としての信仰を集めていた羽黒が中心となることは誰しもが納得することではあるが、羽黒修験の「擬死再生」の基盤となったものは、縄文時代から信仰され続けられてきた、月をシンボルとする「よみがえり」の思想であったのではないか。

そもそも「月」とはいかなるものとして古代人の目に映っていたか、という問題から考えてみたい。

古代において、いや現代でも、「死」にどのように対処するか、は最重要課題であった。死は必ず訪れる。誰しもが死ななければならない。そのことは否応なしに認めざるを得ない。とするならば認めるにしても、もう一度「よみがえり」ことができるならば、その一回目の「死」を受け容れよう、と考えたのではないか。これは日本のみならず地球上のどの民族も考えついたことであった。

「死とよみがえり」を観想したどの民族にとっても「月」

がそのシンボルとして選ばれた。二九・五三日の周期で必ず満ち欠けを繰り返す、月の朔望こそが「死と再生」のシンボルとして選ばれたのであった。言い換えれば、人間は避けて通ることのできない「死」から逃れるために「再生」を強く希求し、次々に「死なないもの」をイメーজし、シンボルとして選ばれたものが「月」であった、ということになるのではないか。

さらに、朔望の周期が女性の月々のものに近似することから、月は女性のシンボル、になることも日本のみならずどの民族にも共通する。大島直行は「潮の満ち干をはじめ、世界中のあらゆる水を司る天体として月が崇められた」「人間だけでなく、生きるものすべてが月の水によって生かされるのであり、その水を月からもたらすのが蛇だと考えられた」と紹介している（『縄文人の世界観』）。このことは、月が女性性とすれば、蛇が男性性のシンボルになることを教えてくれている。縄文の昔から石棒を男根の象徴として「再生」のための必要欠くべからざるものと崇めてきた。

再生のシンボルとして見立てられたものが「月と蛇」。月の朔望の場合と同じように、縄文人は蛇の生きたをよく観察していた。ハブなどはオスとメスの交合が二十六時間にも及ぶことが、民俗学者・吉野裕子の『蛇』に紹介されている。そ

の時間を恐懼のうちに凝視している縄文人の様子がまざまざと想像される。まさに再生のシンボルとしてふさわしいものだったわけである（安田嘉憲『縄文文明の環境』など）。

新しい生命の誕生、再生のシンボルとしての交合の形は、実は日常生活で目にしている造形として現在まで継承されている。この蛇の絡みついた形をシンボリックに表すと、これが神社に必ずある注連縄であり紙垂であるという。蛇が交わっている姿態を再生のシンボルとして神社に飾ってある、という説明に今はいっばん得心している。

ここで「月の水」に関して興味深いのは、山形県で六番目の国宝に指定された土偶である。あの土偶には頭部に穴が開けられている。あの穴については博物館では、花などを髪飾りにするためのものという説明がされてもいる。しかし、そうではなく、月の水を受け止めるための穴ではなかったか。

万葉集の中に「変若水おちみづ」を詠み込んだ歌がある。変若水というのは、例えば、奈良東大寺二月堂の行事として知られる「お水取り」にみられるように、年の初めにあの水を汲むことによって、新しい生命力を身につけることができる、若返ることができるという水のことである。この変若水が月にはあるのだ、という和歌が万葉集には散見する。集中三三四五番の歌に、

天橋も長くも高山も高くも月読の持てる変若水あまはし
い取り来て君に奉りて変若しめはもつぐよみ

(天上への橋も長くあつてほしい。高山も高くあつてほしい。月の神の持つている若返りの水をとつてきて、あなたにさしあげて、若返らせたいなあ)

のように詠われていることから、あの月からの変若水を受け止めるのがこの穴ではなかったのかと考えられる。「月の水」を受け入れることにより再生が可能となるという考えが縄文時代以来、受け継がれてきたのではないか。

さらに、なぜ一万五千年もの長い期間、飽くことなく壺に縄文の文様をこすりつけていたか、の謎はいまもって考古学者からの明確な回答が示されていない。縄文模様をデコレーションした意味は何だったのか。

蛇の絡み合った姿態をシンボライズしたものが、縄文模様と考えれば、まぎれもない「再生」を願った模様だと言えるのではないだろうか。現代人にもまして死ぬことそして甦ることに過敏であつただろう古代人の、この縄文に込めた再生への願いの計り知れない強靱さが今に伝わってくる。

五 月に従う行事

いまさらながらではあるが、日本における伝統的行事はた

いがい陰暦に基づいて営まれていた。例えば、羽黒修験最大の行事、松例祭。明治になって欧米列強に追いつくために太陽暦を採用したわけであるが陰暦の師走晦日の行事であつた。松例祭においての新年は、新月の朔を迎えることであつた。文字通りの「再生」を意味する行事だったのである。大松明を焼却することによって火は穢れる。火の打ち替え神事は、神聖な火が朔日によって再生するという意味合いがあつたわけである。ところが太陽暦ではただ十二月三十一日の次の日が一月一日というだけの話であり、陰暦では師走の晦日に月は死に、一日に新月・朔として再生するのであつた。

八朔祭も同義である。八朔とは陰暦の八月一日。ところが現在の八朔祭は八月三十一日から九月一日にかけての行事になつている。陰暦の八月一日であればこそ、月が甦ると同様に、胎内修行(秋の峯)を終えて再生することになるわけである。「八朔」の名称が残つただけでもよしとすべきか。

さらには、現在も八月十三日に月山の頂上で柴灯祭が行われているが、祖霊送りの火が九合目、八合目と降りてくるのを見て、麓では子孫が門火を付けて祖霊を迎えるわけである。十五日は旧暦では望・満月の日である。再生のいちばん充実した時に子孫の家に帰ってきて、交歓するという意味が盆行事にも込められていたわけである。日本の伝統行事がいかに

月の満ち欠けに従ってプログラムされていたかということに、今一度思いを致してもいいのではないか。出羽三山の修験において《擬死再生》のテーマが考えられていることは、その中心に月の思想・月の満ち欠けが置かれているからである。

月光に浮かび上がる秀麗な山容が神と崇められ、死と再生のシンボルと観想された月山は、やがて羽黒山・湯殿山とともに構成されて修験道が形成されることになる。

六 甕りの聖地・湯殿山

羽黒山の秋峰の行は「籠りを主体にしたもので、籠堂や山中の洞窟を母の胎内に見たてて胎内修行をする」（戸川安章『出羽修験の修行と生活』）のであるが、見立てられた「母の胎内」こそは甕りのメッカと考えられている。

山田康弘は、縄文人の「死に対する基本的な考え方」を、次のようにその著『つくられた縄文時代』で解説する。

縄文時代に存在したと考えられる死生観の一つは、再生・循環の死生観である。この死生観はアイヌなどにみることのできる「もの送り」の思想ともリンクするものである。この世のものはすべて、あの世とこの世を循環すると考える「もの送り」の思想は、縄文時代における根本的な死生観であった。これは生命・霊が大きく円環状に

回帰・循環するという意味から、「円環的死生観」と呼ぶこともできるだろう。

さらに、土器^{どき}棺^{かん}墓^ぼは「生命を生み出す女性と土器が精神的な面で強いつながりを有しており、土器が母胎の象徴として存在していたこと」と推察し「回帰・再生・循環」という基本的な死生観が縄文時代にはあったとしている。

この「回帰・再生・循環」をキーワードとして湯殿山の甕りの装置を読み解いてみることにする。

「回帰」は、当然ながら、単なる自然回帰といったものではなく、まさしく母なる大地への回帰を意味する。湯殿山の御神体は溪谷に湧出する霊泉であるが、水酸化鉄分が沈殿重積して巨岩を赤褐色に覆っている。下部には亀裂がみられ、女性性のシンボルとして胎内への入り口とされる。

次なる「再生」は、絶え間ないエネルギーの湧き出す《湯》であることに起因する。いかなる宗教においても聖水・聖火の存在は知られるところであるが、日本では《湯》に特別のmana（霊力・呪力）を認めているのである。「湯立て神事」が証左であるように、単なるホットウオーターではない。聖なる湯は第一義には薬湯として不死・再生の変若水として信仰の対象となっているのである。

さらに「循環」の装置も準備されている。御神体に隣接す

る靈祭祀養所には「岩供養」の風習を今に残し、湯水したたる岩肌に貼った「先祖代々靈位」の御札が剥がれ落ちると、死者靈は祖靈となる、もしくは生まれかわると信仰されている。モリ供養と同じ祖靈信仰のかたちとしての、甦りの装置が設えられているのである。

そして、究極の、生と死の「循環」の象徴ともいべきは、『即身仏』である。亡骸を今生に留め魂再生の循環をひたすら待ち続けている祖靈が即身仏なのである。天台羽黒修験との確執から真言宗教義によって作り出されたかはいざ知らず、この庄内が、全国にも希有な即身仏を生み出す、生死循環の信仰風土であつたことは厳然たる事実なのではないか。

七 おわりに

真澄は鳥海山を越えるにあたり、山麓の劔竈山永泉寺（遊佐町落伏）にまつわる由緒・伝承にかなりの筆を費やしている。最後に、生の山・鳥海山に触れて筆を置きたい。

八七一年、鳥海山噴火。史書は伝える。「冢墓骸骨が山水を汚すにより、神が怒りを発し山を焼く」と。大和朝廷は、穢れを嫌って噴火し物忌みを強要する神「大物忌神」と命名した。山に遺棄された死体が穢れの元凶、というのであるが、縄文人の末裔たる里人は、おそらく、魂なき亡骸を山へ帰し

ただけであつただろう。魂はどこから来てどこへ帰るのか。

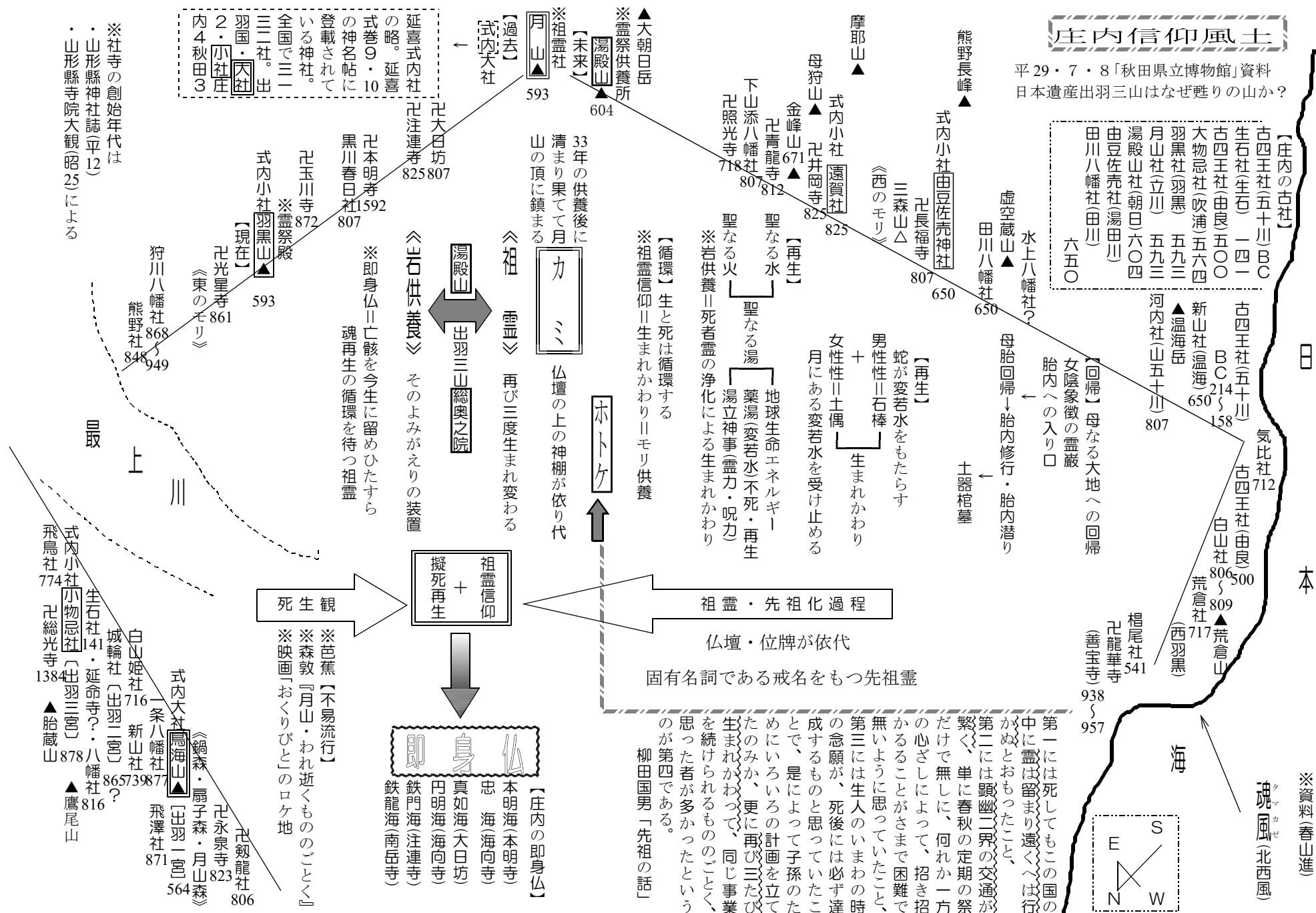
山から来て山へ帰るのである。いつ魂が帰還してもいいように亡骸を山へ納めたのである。この古代信仰が、西からの侵略者による、「穢れ」観念に屈服したのであつた。古代信仰からすれば、噴火は溢れ出る永遠のエネルギーであり、よみがえる生命そのものであつた。だからこそ鳥海山は「生の山」なのである。古代信仰は、しかし、モリ供養となつて現代まで底流していた。「ほら、ほら、ご先祖さま、見でつぞ……」この子だば、祖父はんの生まれかわりだもんだ……。今でも耳にするこれらの物言いは、柳田国男が唱えた祖靈信仰をみごとに反映している。つまり、人は死して、十億億方にある西方浄土に赴くのではなく身近な里山に籠もつて子孫を見守り、盆・正月・彼岸などには定期的に訪れ、さらには再び三度生まれかわるものであつた。生まれかわりのシンボルである月を主峰に冠し、「擬死再生」の胎内修行を編み出し、甦りの装置「岩供養」を設けた湯殿山を奥の院とするのである。

この日本特有の靈魂観・死生観が今なお色濃く残る庄内の信仰風土から、昔日には芭蕉が「不易流行」を説きだし、近くは映画「おくりびと」が製作され、森敦によつて『月山』『われ逝くものごとく』が紡ぎ出されたのであつた。

平 29・7・8「秋田県立博物館」資料
日本遺産出羽三山はなぜ甦りの山か？

平 29・7・8「秋田県立博物館」資料
日本遺産出羽三山はなぜ甦りの山か？

魂風（北西風）



菅江真澄と内田八チ―科学・教育・図絵―

東京学芸大学教授 石井 正 己

一 内田武志と内田八チの写真から

ただいま山口多加志館長さんから過分な紹介をいただきました。秋田県立博物館とのご縁が続いて、今日もここでお話しできることを大変光栄に思います。しかし、何度も申し上げておりますように、秋田県人に菅江真澄のことを話すとするのは、本末転倒な感じがします。でも、外から来た人間が、真澄はこういうすばらしい側面を持っているということをお話することで、秋田県の方々の刺激になれば、それは大変よいことではないかと思えます。

たとえば今、日本は急速に国際化していますけれども、外国人が見たときに、「日本人はこういうところがすばらしい」という発言があります。日本人がごく当たり前だと思っていることでも、他者の目から見ると、それは意外な価値を持っていることに気がつきます。おそらく真澄の場合もそういう側面を持っていると思いますので、繰り返し東京から来て、ずうずうしくお話し申し上げる次第です。

今ちょうど、秋田は稲刈りの最中で、実りの秋を迎えた豊

かな自然を実感しますが、一方、博物館では「鳥海山の自然史」の展示が行われています。かつて噴火した鳥海山について知るために、一昨年（二〇一五）、今日来ています妻と一緒に象潟の方をまわりました。松尾芭蕉が訪ねた島々は、鳥海山の地震に伴って土地が隆起して、今は田んぼの中に転々と塚のようになっている風景をまざまざと見ました。そんなこともあつて、今回の展示はなるほど納得されることが多いわけです。

それとともに、近年はジオパークの視点が加わって、大自然に対する評価が大きく変わってきています。ジオパークが文化資源として、観光資源として評価されていることは、日本のみならず、世界的な動向であると思います。男鹿半島のジオパークの振興に尽力されている永井登志樹さんのお力によって、真澄の描いた風景の見方もずいぶん変わってきていて、それは研究の上でも大きな刺激を与えています。

館長さんからお話がありましたように、昨年（二〇一六）までの「内田武志の足跡」四回については、東京の勉強出版

で本にしてくれるということですので、来年の春には一冊になると思います。そして、最後に申し上げますように、来年は真澄が亡くなって百九十年祭の記念すべき年でもありますので、そんな年に、講演の記録が出版できれば、博物館と秋田県のみなさまに恩返しができると思っています。

今日のお話は、「内田武志の足跡」の続編と言ってもよい内容で、妹のハチさんについてお話をします。内田武志の業績について考えてみると、妹のハチさんのことがとても重要であると思わざるをえなくなりました。ハチさんは兄の研究を支えただけではなく、さらに本格的な真澄研究者になってゆきます。兄の研究を支えながらも、それだけに終わらず、自立した研究者になってゆくのです。ハチさんの足跡が重要であるのは、真澄研究の未来を考える時の一つの道標が、ハチさんの仕事の中にあるのではないかと思うからです。

私は、人生の多くの時間を身近に暮らした兄と妹は、どんな関係だったのだろうと、いつも想像します。言うまでもなく、内田武志は血友病でありながら、方言研究と真澄研究を大成させました。岡崎市立図書館編の『菅江真澄顕彰記念誌』（岡崎市立図書館、一九八七年）に載った、内田ハチ「菅江真澄への歩み 付 内田武志著作年譜」には二点の写真が載っています。

一点には「内田武志氏（左）と内田ハチ氏 昭和22年頃」という説明があります。昭和二十二年（一九四七）は、秋田へやって来て暮らすようになって、『真澄遊覧記総索引 歳時篇』（菅江真澄研究会、一九四六年）というガリ版刷りの本が出た翌年です。机に座って筆を執る武志と、そばに寄り添うハチさんの様子が写っています。しかし、この姿は長くは続きませんでした。

もう一点には「病床中の内田武志氏 昭和50年9月」という説明があります。昭和五十年（一九七五）は『菅江真澄全集』（未来社、一九七二年）が刊行されている時期でした。武志は座って筆を執ることができず、ベッドの布団の上に箱を置き、眼鏡をかけて、寝たまま筆を執っています。前の写真から二十八年の間に、彼の病状はこのような悪化しましたけれども、生涯が尽きるまでこういう生活を続けたのです。

さらに載せた一点は、須藤功編『写真でつづる宮本常一』（未来社、二〇〇四年）に載ったものです。先の二点の写真の間の昭和四十三年（一九六八）、『菅江真澄全集』の編集作業に入っていくときの打ち合わせの時に撮ったものです。共編者の宮本常一、未来社の西谷能雄、小箕俊介の三人が訪ねて、奈良環之助と内田ハチを交えて写っています。全集に向かう時の、記念すべき一点です。これについては前回お話ししま

したし、『真澄研究』第二一号に載っていますので、詳細はそちらに譲ります。座って仕事ができた時期から、寝て仕事をしなければいけなくなった時期まで、こうした内田武志の生活と研究を支えたのはハチさんでした。

二 内田ハチの年譜に見られる課題

内田武志は明治四十二年（一九〇九）に生まれて、昭和五十五年（一九八〇）に亡くなっています。七十年を超える生涯だったわけですが、その間に、方言研究から真澄研究に展開し、平凡社の『菅江真澄遊覧記』の現代語訳、未社の『菅江真澄全集』の緻密な作業、これらをほぼ完成して亡くなります。「ほぼ」というのは、全集別巻二に「索引」が予定されているが、「（次回配本）」のまま出せなかったからです。全集はまだ刊行中ということになりますが、本文を完成し、別巻一に「菅江真澄研究」の評伝までまとめたというだけで言えば、人生をまっとうしたと考えることができます。

一方、妹のハチさんは、大正二年（一九一三）に生まれて、平成十年（一九九八）に亡くなっています。ですから、お兄さんが亡くなってから十八年長生きしたことになります。内田武志は七十一歳で亡くなりましたが、ハチさんは八十五歳

ですから、長寿をまっとうしたと言えるかと思います。ハチさんの人生はなんだったのだろうと考えると、確かに、兄に捧げた献身的な人生だったことは間違いありませんが、私はそれだけではなかったと思っています。

ハチさんの年譜を検討しましょう。松山修さんの資料と野呂昭さんの資料を参考にしましたが、実はよくわからないことが多いのです。昭和九年（一九三四）に東京女子高等師範学校、現在のお茶の水女子大学を卒業しています。その後おそらく東京で女学校の先生をなさっていたと思うのですが、女子師範を出てから秋田に来るまでの足跡がほとんど把握できていません。今は個人情報が保護されていますので、ガードが堅くて、資料が見られないことが障碍になっています。戦後、疎開先から移動して、昭和二十年（一九四五）九月三十日、秋田県立女子医学専門学校の助教授になったことが確認されています。秋田での生活は内田家を支えるという使命感があつたにちがいありません。

最近、寺島俊雄さんの「追憶 秋田県立女子医学専門学校」（『秋田大学医学部同窓会誌 本道』第二九号、二〇一七年）という論文が出ました。これを拝見しますと、秋田女子医専の先生・学生の人生が詳しく調べられています。私もはじめに知ったのですが、戦中の混乱の中で医師不足になり、戦後

それを女性の力で補おうと考えて女子医専が各地に創られ、その一つが秋田でした。しかし、秋田女子医専は二年で廃校になり、卒業生を出せなかったのです。廃校後、三分の二はほかの学校に進み、三分の一は退いて別の道を歩いたようだと述べられています。ハチさんは廃校後、秋田師範学校の女子部に赴任し、さらに秋田大学の学芸学部講師になります。

この論文にはハチさんも挙げられ、写真が二点入っています。一点は、昭和二十九年（一九五四）十一月三日の文化の日に、第四回の秋田市文化章を兄妹で受章した時の写真です。武志は病床にあったので、妹のハチさんだけが式典に出ています。「秋田大学学芸学部自然教育研究室に勤務する内田ハチ先生」、「ハチ先生の共同受賞者の内田武志氏は、病床のため受賞式を欠席している」と説明しています。

もう一点の写真は、遡って、「秋田女子医専の教員」という説明のある記念写真です。後列右端にいるのがハチさんで、「助教授（生物）」とあります。隣の久保田教授（解剖）、斉藤先生（体練）を加えた三人が女性ですが、ほかは男性です。廃校になりましたので、この先生方もそれぞれ散っていった、新たな活躍の場所を見いだしたことになります。そのような歩みの中で、後に秋田大学医学部が生まれますが、ハチさんは秋田大学の医学部ではなく学芸学部へ赴任し、後に教育学

部に改組され、理科教育を担当しています。

年譜を見ますと、受賞のほかに、昭和五十年（一九七五）七月十九日、秋田県立博物館の第一回博物館教室で講演しています。その講演は、『菅江真澄と秋田』（秋田県立博物館、一九七九年）に「菅江真澄の故郷と学問について」として入っています。この年の八月二十三日には、鹿角文化財保護協会設立記念総会でも講演しています。その講演は、『上津野』1（一九七六年）に「菅江真澄と鹿角」として入っています。昭和五十四年（一九七九）に秋田大学を退官し、昭和五十五年（一九八〇）に兄の武志が亡くなった後ですが、昭和五十九年（一九八四）の十一月一日には、秋田市文化会館開館五周年記念の菅江真澄資料展で講演しています。

昭和六十一年（一九八六）九月二十五日には、岡崎市立図書館に内田武志研究資料を寄贈するということが、全集に関わった研究資料を寄贈しています。翌昭和六十二年（一九八七）十月三十一日には、岡崎市立図書館編『菅江真澄資料内田文庫目録』（岡崎市立図書館、一九八七年）を発行しました。この日、ハチさんは顕彰記念講演で、兄の武志のことを語っています。この講演の内容は、「菅江真澄への歩み 付 内田武志著作年譜」と題して、岡崎市立図書館編『菅江真澄顕彰記念誌』（岡崎市立図書館、一九八七年）に収

録され、『岡崎市史研究』第一〇号（一九八八年）に転載されました。従って、内田武志の資料は、現在、秋田県立博物館の内田文庫にあるほかに、菅江真澄誕生の地と目される岡崎市立中央図書館の内田文庫にもあることとなります。先般岡崎へ寄って文庫の様子を見ましたが、全集に使った資料が今も大切に保管されています。

こうして見ますと、兄の武志が亡くなる前から、ハチさんは講演活動を始め、亡くなった後も講演したことがわかります。武志は人前に立つて話すことができませんでしたので、妹のハチさんがその役を買ったこととなります。真澄研究を広く伝えるというメッセンジャーの役割を果たしたことがわかります。

ハチさんの歩みができるだけ知りたいと思います。秋田大学を退官なさったのが昭和五十四年ですから、教えを受けた方々が県内にいらつしやると思います。今ならばハチさんの人柄や教育をさまざまに聞き取ることもできますので、そういう声を寄せていただきたいと思います。

三 『春のだいち』発刊と内田ハチの出版

実は昨年講演を終えた後、ハチさんのゆかりの一人である野呂昭さんが、内田ハチの遺稿集をまとめたというご意向

を持つているということを聞きました。私もちょうど内田武志の講演を進めてきたところなので、序文を書くことになりました。『菅江真澄に見られる科学的記録―内田ハチ遺稿集―』（私家版、二〇一七年）という本が出ましたので、ここに持つてきました。ハチさんの仕事のかんりの部分が収められていますので、手に取ってお読みくださることを願います。

内田ハチさんの書いたものを書誌として整理してみました。最初は昭和三十三年（一九五八）で、「心のふるさと」（『文化と教育』第九巻第二号）です。さらに、昭和三十四年（一九五九）には「人間性へのめざめ（日本）―むじゅんの愛情が生む悲しみから―」（『ニューエイジ』第一二巻第二号）が出ています。この二編は『内田ハチ遺稿集』には収録されていませんが、真澄研究ではないからかと推測されます。

実は、それに先立って内田武志は、昭和二十九年に目の見えない須藤春代さんの詩集『春のだいち』（岩崎書店）を出していました。この詩集は、春代さんが点字で書いた詩を武志が文字に起こして、それでかわいらしい本を作ったのです。二人の出会いが結実して、『春のだいち』という詩集が生まれました。このことも前の講演でお話ししましたし、『真澄研究』第二〇号に記録が載っていますので、今は詳しく触れないことにします。

この詩集が出ると、世間の話題になって、特に目の不自由な方々からいろいろな感想が寄せられたようです。それに応えるような文章として書かれたのが、「心のふるさと」と「人間性へのめざめ」です。内田武志自身はそのことについて書かず、その後、真澄研究は中断して、十年間ほどの空白期を過ごすことになります。やがて真澄研究は再開されますが、このことは話題にならなくなります。しかし、中断の原因が障碍を背負って生きる須藤春代さんの境遇と自身の苦悩にあったことは確かでしょう。そうした兄の武志の空白期を埋めるように、代わりに書かれたのが先の二編だったように思われます。

少し話題が逸れますが、大事なことで、お話ししておきたいと思います。内田武志は血友病で臥せていましたし、須藤春代さんは目が見えなくて盲学校に通っていました。二人は、そうした障碍を克服するようにして、詩集を出すという共同作業を行いました。前にも後にもないような奇跡が実現したのです。

現在では、障碍のことがさまざまに話題になり、二〇二〇年の東京オリンピックは、その後でパラリンピックを開催し、二つはセットのようになっていきます。障碍を持ちながらもスポーツで活躍することが社会的認知を受けつつあります。

ここへ来てずいぶん変わってきたと感じるのは、障碍を抱えている選手を使ったコマースシャルが増えたことでしょう。かつてだったら、こうしたことは考えられませんでした。が、人間の生き方として我々が見本にすべきことがあると考えるようになったからでしょう。それと同時に、障碍を持った人がそれでもがんばっている姿は、高い商品価値を持つてきているのだと思います。中にはプロスポーツの選手になって活躍したいという名乗りを上げている方もいます。

昭和三十九年（一九六四）に東京で開催されたオリンピックとパラリンピックを比べてみれば、大きく変わったのはパラリンピックでしょう。実は、前回の東京オリンピックの後で行われたパラリンピックは第二回でした。オリンピックが終わった後のパラリンピックは、国立競技場ではなく、代々木競技場の練習場に仮設のスタンドを作って、運動会のようにして開かれたのです。皇太子時代の天皇皇后両陛下が開会式に臨んで挨拶をしています。しかし、テレビでは放映されず、新聞の報道もわずかでしたので、私たちはそれをほとんど知りません。

私は『一九六四年の東京オリンピック―「世紀の祭典」はいかに書かれ、語られたか―河出書房新社、二〇一四年〕という本を編集して、パラリンピックを一から勉強しました。

驚くべきことに、代々木のオリンピック選手村は、オリンピックが終わった後、大改造が必要でした。選手村は車椅子が使えるような施設になっていなかったのです。二日間の突貫工事、スロープを作って車椅子で入れるようにし、トイレを使えるように直します。まったくパラリンピックに対する理解は欠けていました。

しかし、二〇二〇年は、施設の作り方をはじめ、さまざまなどころで、障碍を持つている方々にやさしい選手村や競技場が作られてゆくはずでした。これはこの間五十年の大きな社会的変化でしたが、それと同時に、高齢化社会を迎えることになる日本の社会のインフラ整備を考える機会になるだろうと期待しています。

内田武志とハチは、障碍を持ちながらも研究をしたり、障碍を持ちながらも詩を作ったりすることの意義について、真摯に向き合ったことになります。昭和二十九年の『春のだいち』の発行は、先のパラリンピックよりも十年早いことは注意されます。日本に福祉という言葉さえなかった時代に、この詩集は生まれたからです。内田武志の業績として方言研究と真澄研究は高い評価を得ていますが、この詩集はまだ評価されていません。日本に福祉の思想がなかったことを考えるならば、この詩集は先駆的な業績としてもっと高く評価され

るべきでしょう。そして、この詩集の刊行を陰ながら支えて、その評価を受け止めたハチさんの役割は注目に値すると考えられます。

四 兄内田武志の支援と研究者としての自立

ハチさんの業績については、『内田ハチ遺稿集』に寄せた序文「菅江真澄と内田ハチー科学・教育・図絵ー」にまとめました。今日の講演のタイトルは意識して合わせましたので、これに沿って補足しつつお話しします。

まず、兄内田武志の支援と研究者としての自立という問題です。内田武志が後半生をかけた真澄研究は、『菅江真澄遊覧記』と『菅江真澄全集』によって集大成されました。宮本常一との共編『菅江真澄遊覧記』全五巻は、読みやすい現代語訳を提供し、多くの人が真澄に触れる契機を作りました。秋田県人だけでなく、日本中の人が「菅江真澄はおもしろい」「こんな魅力的な旅人がいたんだ」と知ったのは、この現代語訳によります。さらに宮本常一との共編『菅江真澄全集』全十二巻別巻二冊（別巻二の「索引」は未刊です）で、真澄が書き残した文献の全貌を明らかにし、今日の研究の基礎を築きました。

内田武志と四歳違いのハチさんは、血友病で動けなかった

兄の手足になって、研究を献身的に支えました。『日本星座方言資料』（日本常民文化研究所、一九四九年）に、渋沢敬三が「歩けぬ採訪者」という序文を書いています。敬三は渋沢栄一の孫にあたり、大蔵大臣などの要職を務めました。アチック・ミューゼウムという屋根裏の博物館を作って、民具研究などを熱心に進めました。その序文でハチさんのことをこう紹介しています。

真澄については早く柳田国男氏の研究あり、真価も認められたが、尚その生涯につき幾多の疑点があり、又未刊の紀行文もあるらしかった。内田君は之れ等の疑点や未知のものを異常な努力で次々と解き且つ発見しつつある。病弱横臥の身であり乍ら、之の労作の出来たのは全く令妹ハチ女史等の努力の賜で未刊本の中にも大館の栗盛家にある資料調査の如きは何十回となく令妹たちが通ひとほして完成迄持つて行つたので、之の一家挙げての追求力と学問への帰依の態度は全く涙ぐましいものであった。

渋沢は、「内田君は之れ等の疑点や未知のものを異常な努力で次々と解き且つ発見しつつある」と評価し、これがやがて『菅江真澄未刊文献集』（日本常民文化研究所、一九五三、五四年）二冊に發展します。この「異常な努力」

を支えたのがハチさんでした。「病弱横臥の身であり乍ら、之の労作の出来たのは全く令妹ハチ女史等の努力の賜で」と述べています。武志だけでなく、内田家を挙げた取り組みだったと思います。

大館の栗盛家でなかなか資料を見せてくれませんでしたので、柳田国男は著書の『菅江真澄』にサインして、ハチさんに渡します。ハチさんが栗盛家に持つて行くと、資料の閲覧が可能になりました。しかし、その作業は想像を絶するものでした。栗盛家では写真を撮らせてくれなかったもので、三時間かけて大館まで行き、また三時間かけて戻ってきました。ハチさんは、「薄紙にやわらかい鉛筆で書き写してくる。それを読み、不明の箇所印をつけるとまた持つてゆき写し直してくる。附箋のついた写本を持つて三時間余もかかる大館まで幾度往復したことであろうか」と、『菅江真澄への歩み』で回想しています。この作業の間に、秋田女子医専は廃校になって、秋田師範学校に勤めるようになり、間借りしていた下宿から女子寮に移ります。

やがて未刊の著作が『菅江真澄未刊文献集』二冊で出されます。この『未刊文献集』は、昭和の初めに深澤多市が出した『秋田叢書』『秋田叢書別集 菅江真澄集』で「未刊」だった資料を集めたもので、補遺と言っていいものでした。従っ

て、『未刊文献集』だけ見ても、真澄の全貌はわかりません。そうした課題は残りましたが、『秋田叢書』『秋田叢書別集 菅江真澄集』に収録されなかった資料に新たな資料を加えて、真澄の全貌に迫ろうとしたと言っていると思います。

内田武志は、自分の体が大変だということは繰り返し書いていますが、家族の支援については書いていません。今だったら、「妹がこんなに助けてくれた」ということを、かなり丁寧に書くと思いますけれども、ほとんどハチの功績について触れることはありません。ハチさんが武志の文章に登場してくるのは、『菅江真澄遊覧記』1の「あとがき」からだと思っています。「注解は共編著者宮本常一が当たったが、なお自然方面に関する注解には妹内田ハチもたずさわった」とある一節です。注記をつけるのは宮本常一の担当でしたが、生物を専門とするハチさんは自然に関わる注記に関わりました。武志は妹の専門を生かす機会を選んで注記を書かせ、そうした作業を通して、ハチさんは成長したのです。

さらに『菅江真澄遊覧記』3の「あとがき」では、「本草関係の注記には、地質鉱物を加賀谷文治郎（秋田大学名誉教授）、動植物を妹の内田ハチ（秋田大学助教授）が受け持っている」と、肩書きまで入れて紹介しています。ハチさんは、そこで学んだ知識を教育の場にも生かすようになっていきます。

すけれども、それにはしばらく時間がかかります。兄を助けるだけではなく、こうした作業を通して、徐々に自立した研究者になっていったようです。

五 「岳茶・岳あられ」に示された苦勞と喜び

この注記の作業に関連するものですが、今度の『内田ハチ遺稿集』に入っていない文章を引いてみましょう。昭和四十一年（一九六六）の『あきた』第五四号に載ったエッセイに、「岳茶・岳あられ」があります。これを見ると、その注記をつける難しさとその喜びがよく表れています（末尾の資料参照）。

『菅江真澄遊覧記』の刊行にあたって、私に課せられたのは、動植物に関する真澄の記録を読者にわかるような注付けをする仕事である」と述べています。地質鉱物に関する注記は加賀谷文治郎先生が担当したが、動植物に関する注記を読者にわかるようにやさしくつけることがハチさんの担当でした。しかし、「この粗末な私の注をふみ台としてそれを完全なものにしようとする人々の協力を得ようとねがう切なる思いからである」とします。私の注記は踏み台に過ぎないので、これをもとに「完全なもの」にしてほしいと望みます。この「完全なもの」にしたいという考えは、内田武志の物言いに見ら

れます。妹のハチにも、それが口写しのように出てくるのです。

さらに、菅江真澄がどういう人かということを、読者である秋田の人々に説明しています。真澄は生涯の約五十年間旅をしますので、「彼を随一の旅人と呼ぶことに異論はなからう」と述べます。江戸時代の旅人としては松尾芭蕉が有名で、最初にお話ししましたように、『奥の細道』で象潟に来ていますから、旅の範囲は秋田領に及びます。「日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり」という一節は、我々も暗唱しましたが、毎日の生活が旅そのものであるという漂泊の人生を意味します。

芭蕉の『奥の細道』では、弥生も末の七日に出発し、「行く春や鳥鳴き魚の目は涙」と詠みます。時計と反対回りに、中尊寺から象潟へと旅して、北陸を通って大垣までやって来ます。「蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ」が最後の句です。『奥の細道』が春の終わりにから秋の終わりの半年の旅であることは、「行く春」と「行く秋」という言葉によく表れています。芭蕉は南東北を夏の暖かい時期に旅したのであって、冬の北東北は知りません。しかし、真澄は北東北と南北北海道を旅して、冬の寒いときに滝を見に行ったりしています。こう言つては失礼になるかもしれませんが、芭蕉とは比較する

ことができないほど、真澄の旅は本質的だったと言わねばなりません。「日々旅にして旅を栖とす」という言葉は、真澄にこそ贈られるべきではないかと思えます。

真澄の旅は五十年近くにわたるわけですが、前半は北東北と南北北海道を旅して、後半は秋田領に留まります。ですから秋田の人たちは、「おらほの真澄」と意識するわけです。しかし、ハチさんはそれだけに終わらず、「彼の記録を整理して驚かされるのはこの広い旅の領域にわたる観察眼がまことに緻密かつ正確であることである」と指摘します。観察眼が緻密かつ正確であるというのは、真澄の記録は極めて高い科学性を持つということになります。

その一例として取り上げたのが、表題にある「岳茶・岳あられ」でした。『雪の出羽路雄勝郡』の河原毛温泉の項に、「岳茶、九月花咲く、その花を岳丸雪だけあられといひ、また玉柴たましばといふ。松前の恵山、また内浦山、白が岳しろがけなどにて山茶といひこれを茶つくり飲て疝氣の治ゆといへり。」という記述があります。雄勝郡の「岳茶」は、花を「岳丸雪だけあられ」「玉柴たましば」とも言うが、松前の恵山・内浦山・白が岳などでは「山茶」と呼び、茶を作つて飲むと疝氣（腹の痛み）が治るということです。真澄は雄勝郡と松前を比較して、そのつながりを探っていたことになりま

一方、松前の記録『えぞのでぶり』には、「山茶といふものあり、疝氣をいやすといふ。臭氣あり。其莖は〔ひろめかり〕^(マ)という冊子にいたせり」とあることを指摘しています。「山茶」の薬効を同じように説明しますが、臭みがあると書き添えています。これに注記をつけなければいけないのですが、現存する『ひろめかり』には写生図が載っていないので、どういう植物かわかりません。

さらに調べてゆくと、恐山の記録『牧の冬枯』に、「高野つゝじ」《松前夷山にあり、山茶といふ》という一節が見つかりました。下北半島では「高野つゝじ」と呼ぶので、ツツジ科の植物ではないかと検討をつけて、知里真志保の『分類アイヌ語辞典』を見ると、「イソツツジ、幌別では、この葉をお茶にして飲んだり、粥に入れて味をつけたりした」という記述が見つかりました。アイヌは「イソツツジ」と呼び、お茶にして飲んだり粥に入れて味をつけたりしたというのですから、『えぞのでぶり』と一致します。村松七郎の『秋田県植物誌』を見ると、この植物は駒ヶ岳や八幡平などに分布することがわかりました。

そこで、東北林木育種場の村井三郎に尋ねると、「恐山をよく知っている者にとつて、たくさん群生しているイソツツジに気付かないはずがないと考えて読んだら、高野つゝじ

イソツツジでした。イソツツジの葉にはビタミンCが多く、樺太、シベリアの露人は茶として飲用しビタミン欠乏を防いでいると戦時中の北方の報告にありました。イソツツジをだけあられと呼ぶとすれば、花が白色小花の集まりであり、果実は小楕円形で集まるので、どちらかをあられと見たたのでしょう」と教えられました。イソツツジは恐山のどこにでも咲き、樺太やシベリアのロシア人はお茶として飲むのです。和人やアイヌだけでなく、ロシア人も飲むのですから、北東アジアで広くお茶として飲まれていたことになります。村井は、イソツツジを「だけあられ」と呼ぶのは、花が白色小花の集まりであり、果実は小楕円形で集まるので、どちらかをあられに見たてたのだろうと推測しています。

こうして「岳茶・岳あられ」の正体がイソツツジであるということが解明されます。『菅江真澄遊覧記』3の「牧の冬枯」の「高野つゝじ」の注記には、「高野つゝじは北海道、本州北部の湿原または湿った傾斜地にはえる常緑、小低木のイソツツジのことではないかと思われる。この植物は、恐山には多く群生している。また、夏、枝の先端に多数の白色の小さな花をこんもりと密につけるから、これをあられとみたてた地方もあったのだろう。／北海道ではアイヌ人も、イソツツジの葉をお茶として飲むそうである」とまとめました。疑問

としていた「九月花咲く」については、「九月（内田注、六月か）花咲く」としています。

注記を付けるのが大変であることが、この文章を読むとよくわかりました。でも、これこそが研究のおもしろみであるはずで、大変であればあるほど、わかった喜びは何物にも代えられません。たった一つのことでも、このことを明らかにしたのは私だ、という喜びとプライドが感じられます。このようにして、動植物に注記をつけながら、ハチさんは成長していったのです。

六 「菅江真澄に見られる科学的記録」の価値

話を先へ進めましょう。柳田国男は「菅江真澄は民俗学の恩人である」と評価しました。兄の武志はずっとそのことに束縛されて、真澄の価値は庶民の生活を明らかにするところにあると考えていましたが、ハチさんが展開した真澄研究はずいぶん違うものでした。兄と妹は同じ方向に向かって進んでいましたが、この点では違ったと思います。

ハチさんは、『菅江真澄遊覧記』の注記をつけながら、一方で大学の研究紀要に「菅江真澄に見られる科学的記録」という論文を四回ほど書いています。昭和四十年（一九六五）の『秋田大学学芸学部研究紀要 教育科学』第一五集の「一

その一 恙虫病」、昭和四十一年の第一六集の「一その二 博物学的教養の背景と旅」、昭和四十二年（一九六七）の第一七集の「一その三 アイヌの「ヌベ」考」、昭和四十三年の『秋田大学教育学部研究紀要 教育科学』第一八集の「一その四 伊吹山採集のこと」です。

「その一」は「恙虫病」を取り上げました。「菅江真澄の記録の科学性」という一節で、「彼の各所で採録した膨大な旅行記から、まず自然科学方面の記録に着目し、抽出した。それらを項目別にまとめ、そこに見られる地方性、並に歴史的裏づけをもって、彼の記録の科学性を証明したい」と述べてました。「科学性を証明したい」というのは、柳田国男にはない視点であり、兄の内田武志にもない発想です。人文科学の視点で真澄を研究するのではなく、自然科学から真澄を評価しようとするのです。このことをはっきり述べたのは、内田ハチが初めてだと思えますし、真澄の読み方としてとても重要ではないかと思えます。真澄を一面的に捉えることは発想を窮屈にしてしまうだけです。真澄の価値を開いてゆく視点として新たな方向を示す一歩になります。

真澄の方法について、「いたずらに書籍の上だけの知識で論ずる時代はもうすぎた。学問は、実物を観察し、採集し、記録して、これらと比較検討する方法によらねばならぬ。人

文方面にも自然方面にもこの方法は必要である。自分は奥州、松前の未見の地でおこなってみたい。彼のこの決意は前述した日本本草学のすうせいであり、ここに近代科学への萌芽がみられる」とまとめています。江戸時代の終わりに、本草学という学問が近代化してゆく流れにあつて、それを北東北・南北海道の地で、現場に即して考えようとしたのが真澄の生き方だったと見ているわけです。

その具体的な事例として取り上げた風土病の原因がケダニと呼ばれた恙虫にあることを、『雪の出羽路雄勝郡』『雪の出羽路平鹿郡』『月の出羽路仙北郡』から拾っていきます。そして、同時代の文献である『兼葭堂雜錄』『黒甜瑣語』『計太仁治驗』と比較して、次のような結論を導き出します。

一、記録の方法はあくまでも客観的である。批判的な私見私情をのべることをしない。

一、彼の問題とするのは、事実現象そのものであり、比較検討もいたずらに古書にとらわれない。比較検討の素材は旅によつて得られた。彼の頭脳はこの素材を鮮明におさめ続けた。旅を採集の旅とも名づけられよう。まさに科学的方法である。

一、採録の態度は常民の生活をおしておこなわれ、医療についても自分の側からはしるさなかった。常民の生活

にふれるとき、当然口承伝説ならびに民間信仰もまた記録の対象となる。

一、彼は現象の全般にわたる詳細な記載の後に解釈のあることを、換言すれば記載が科学の第一歩であることをすでに知っていた。大友玄圭の記録を照合してもわかるように、真澄の記録は恙虫病の全般にわたって、単に治療法のみをしるそうとしたのではない。ここに彼の旅立つ以前の教育がおしはかられる。すなわち彼は科学的記載方法をすでに学んでいた。

一、出羽国の地誌に彼が「恙虫病」をあげた理由は、これまでも風土的な病気であると認めたからである。彼は一度旅で見た事象を他の場所では発見できるか否か注意していた。そして彼の旅の範囲では出羽国および越後国においてのみ、この病気のあることを知った。

ハチさんは、真澄の記録が客観的であり、比較検討の素材を旅によつて得たとします。実地の記録を得るためには、机上の学問では駄目で、どうしても旅をしなければならぬと考えたのです。その結果、松前にあったのと同じような事実が秋田領にもあるというように結びつけてゆくのですね。

さらに、真澄の方法について、「旅を採集の旅とも名づけられよう。まさに科学的方法である」と言い、「彼は現象の

全般にわたる詳細な記録の後に解釈のあることを、換言すれば記載が科学の第一歩である」と指摘しました。「記載が科学の第一歩である」というのは、実験ならば実験ノートをちゃんと作るということが科学研究の第一歩です。実験ノートがなくなったり、残されていなかったりしたことが話題になったことは、覚えていらつしやる方もあると思いますけれども、ハチさんの見方からすれば、真澄の遊覧記はまさに実験ノートに相当すると見ることはできるはずです。

ここに見える大友玄圭は真澄と同時代の医者です。現在の大仙市角間川の出身ですけれども、この人が風土病の原因は恙虫にあることを発見して、『計太仁治験』を著しました。その記録と照合しても、真澄の記録は恙虫病の全般にわたっていて、単なる治療法だけでなく、広く生活の中で書いたことが特色であると言えます。そして、「ここに彼の旅立つ以前の教育がおしはかられる。すなわち彼は科学的記載方法をすでに学んでいた」とするのは、尾張の本草学の教養を念頭に置いていたにちがいありません。このことは「その四」で改めて検討されます。

また、「出羽国の地誌に彼が「恙虫病」をあげた理由は、これがもつとも風土的な病気であると認めたからである」というのは重要です。恙虫病の記述はいわゆる日記や紀行では

なく、地誌の中に出てきます。「彼は一度旅で見た事象を他の場所では発見できるか否か注意していた。そして彼の旅の範囲では出羽国および、越後国においてのみ、この病気のあつたことを知った」とします。これはむしろ、地誌が風土病を発見させたと見るべきでしょう。現在では恙虫病の範囲はもつと広く、北海道と沖縄を除く日本全国をはじめ、アジア各地にあるとされています。

そうしたことはあるにしても、真澄の記録の科学性というところに光を当てる読み方は、まったく新しいものだったと思います。「その二」では「博物学的教養の背景と旅」として、真澄は江戸時代の書物を広く見て、本草学や博物学を身につけて旅をしていたことを証明しています。あるいは「その三」の「アイヌの『ヌベ』考」では、松前のアイヌは「ヌベ」という植物の根を食べていたが、秋田領の男鹿でも同じものを食べていたことを述べます。それらを比較して、シユロソウという植物であろうとつなげています。これも典型的な読み方です。「その四」では「伊吹山採薬のこと」を取り上げて、真澄の学問の淵源を探ります。真澄は幼いころ、薬草の宝庫である伊吹山に登って採薬を実践していたことに触れます。新資料の丹羽嘉言の『胆吹遊草』の全文を翻刻して、真澄の博物学的教養が若いころ学んだ尾張の本草学にあることを明

らかにします。

七 理科教育の実践と世界科学史上の評価

ハチさんは科学性を研究するだけではなく、大学では理科教育に携わりました。ここに述べたような真澄に対する評価を、理科教育の実践に持ち込もうと考えました。昭和五十二年（一九七七）、『日本理科教育学会研究紀要』一八に「理科教員養成における科学史教材の役割―菅江真澄と彼の科学的業績―」を発表しました。科学史の中に菅江真澄が出てくるのですから、理科教育者はびつくりしたと思います。真澄の記録は科学的記録なので、その方法を理科教育の実践に応用しようと、ハチさんは堂々と提言したのです。単なる研究ではなく、その研究を教育の現場に生かしてゆくというのは、とても重要です。

長崎の出島で博物館すなわちなチュラル・ヒストリーを広めたシーボルト（一七九六―一八六六）の事例を引きながら、「真澄の旅の記録をみると、私は彼の業績は、日本人が日本を誌した自然誌、博物誌であると認める」とします。菅江真澄はシーボルトより半世紀も早くこうした分野に携わっていたことになりました。しかも、シーボルトが『江戸参府紀行』で感動を記した尾張の学問は、真澄が若いときに学んだもの

でした。

そして、「真澄には遊歴文人を装うべき理由がありながらも、自己本然の記録を着実に書き留める努力をなし続けたのである」とし、その事例として、次の場合を挙げます。

一七八五（天明五）年、岩手県三戸郡の末の松山に到り、古歌に詠まれる末の松山とはここであろうかと記しているが、同時に、この山の土の中から掘り出したという貝化石に着目している。しかもこの着目は一度で終わらず、その三年後も再びこの地を訪れ、貝化石の採集もさらに多く、「筆貝、松の皮貝、はまかづらなどのくだけたるを、人々ひろひもて、つとにぞしける。うべ波のうちよりしあとあり。さりければ山坂の名におへり。はた末の松山とはもはらにはいはじなど語りつれて、」と記しているのは、最初の途すがらきかされた末の松山の印象から脱して次第に、自己の眼で見とどけた現象に関心をよせ、この峠の名が浪打峠と呼ばれているのは、この露出部にあらわれている「波のうちよりしあと」の如き層をさしているとしているが、この層は現今、国指定の天然記念物とされる美しい偽層（交叉層）である。真澄はさらに後年、一八二三（文政六）年ごろの《筆のまにまに》に、福本興正として、「浪打峠のみならず、ここから福

岡の里堺までさまざまの貝あまた埋れてあるなり。いにしへの末の松山かそれかあらぬかはしらねど、かかる高き処まで、海ありしかとあきれて福本興正が語れり」と記して、自らの探求のありかたを、正直に誌してくれる。

二戸の末の松山に行くと、貝化石が出てきたので、また同じ場所に行つて貝化石の採集を行い、筆貝・松の皮貝・はまかずなどの破片を拾つて土産にしました。山の中から貝が出てくるわけですから、かつて波の打ち寄つた跡であり、浪打峠とも呼ばれました。末の松山・浪打峠という地名と、実際に出てくる貝化石・遺物との関係を考えています。

真澄は、この辺りはさまざま貝が出土するので、歌枕の末の松山かどうかはわからないけれども、こんな高いところまで海があつたと、福本興正という人が語つたということも記しています。こういう小さな発見が大きなテーマにつながつてゆきます。

末の松山という歌枕は、ご存じのとおり、『百人一首』に、『枕草子』を書いた清少納言の父の清原元輔の歌があります。「ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」という歌は、暗記したり、カルタで楽しんだりしたことがあるでしょう。これは『後拾遺和歌集』に載る歌で、心変わりした女性に対して、それを恨む男性の代わりに元輔が代作し

た歌です。心変わりしたのは男性ではなく女性なので、未練がましい男性の思いを詠んだ歌になっています。

この歌では恋の喩えになっていますが、眼目は「末の松山を波が越さない」というイメージです。そこで真澄は、「末の松山を波が越さない」とことと、貝の遺物がたくさん出土することとの関係を探り、ここが伝承の場所ではないかと考えたのです。末の松山は一般には宮城県多賀城市が比定されていますが、真澄は固定的には見ていませんでした。

私は東日本大震災の翌年に多賀城に講演に行きました。大学院生の頃、『奥の細道』を訪ねて、末の松山の跡地にも行きましたので、改めて訪ねました。博物館の方に、「今回の東日本大震災の津波で、津波が末の松山を越えたかどうか」と尋ねました。すると、「先生、今回の東日本大震災の津波でも、末の松山まで波は越えませんでした」と話してくれて、いたく納得しました。

研究の中では、末の松山を波が越えなかったという伝承は、平安時代初めの貞観地震のときの大きな津波が起源になったのではないかという説があります。「末の松山を波が越さない」と、あの辺りの人たちが言つたのです。末の松山は波が越えなかったので、避難した人が助かったことを意味します。「末の松山波越さじ」というのは、大事な命を救うため

の標語だったはずで。地震があつたら、末の松山に逃げれば命が助かる」という認識は今も生きていて、今回も避難して助かった人が大勢いました。しかし、都では津波のリアリティーはありませんので、「末の松山を波越さじ」は男女の恋のやりとりで、心変わりをしない、浮気をしないという比喩になってしまったのだろーと思ひます。

ハチさんはこういった真澄の記録について、秋田大学の学生たちに話したようです。その学生が卒業して八幡平の小学校の先生になり、「五年生の子どもたちが貝の化石を持ってきて見せてくれました。放課後に子どもたちの案内で山に行ってみました。それから貝の化石とのつきあいはじまりました」と報告する者がいました。ハチさんの教えを受けて、教育の現場でこういう実践的な理科教育を行う先生たちが現れたのです。ハチさんは、「学生たちが教師となつて、真澄を教育の場に生かし、自らもまた教え子と共になまの自然に裸でぶつかった報告はいたく私を喜ばせた」と述べています。真澄の研究を今の時代に生かす実践であり、秋田県の高校や中学校・小学校の先生方に話したいことです。身近に教材があつて、真澄から理科教育を行うというのは、秋田県ならできるとは思ひます。「真澄は教育の中に生きている」と書いています。

やはり昭和五十二年には、『科学史研究』第Ⅱ期第一六卷（二二四）に「日本科学史における菅江真澄」という文章を書いてあります。「真澄は科学的着眼を持ち、あくなき探求の旅をつづけた人である」としました。平成九年（一九九七）に書かれたまま未発表になった文章ですけども、「科学史上における菅江真澄の業績（Ⅱ）」が今度の『内田ハチ遺稿集』に入っています。真澄の普遍性を探るいい文章です。

この文章では西欧科学と比較をすると、同時代を生きた人物として菅江真澄と比べられるのは、ドイツの地理学者フンボルト（一七六九―一八五九）であると言ひます。フンボルトはだいたい真澄と同じ時代を生きています。このドイツの地理学者を引き合いに出しながら、世界の科学史の中に真澄の記録を位置づけて、理科教育の実践に生かすことができるという大胆な提案を述べています。これはもう兄の内田武志から自立して、単なる手足ではありません。

理科教育の実践に生かすということは興味深い指摘ですけども、一方で、たいへん注目されるのは世界の科学史の中でフンボルトと比べていることです。先ほど松尾芭蕉と比較してみましたけれども、真澄は芭蕉とはずいぶん違ふ旅をしていて、「日々旅にして旅を栖とす」という人生は真澄にこそあてはまると述べました。しかし、この視点はまだ日本人

の範疇を出ていません。芭蕉と真澄を比較するのは大事な視点ですが、真澄が日本でまだ評価されていません。『奥の細道』は中学校や高校の国語教科書に必ず出てきますので、日本人は誰もが知っています。真澄が知られないのは、教科書に出てこないからです。すでに述べたように、『奥の細道』を書いた芭蕉を越える旅人として評価してもいいと思います。

でも、それではまだ日本の中でしか真澄を位置づけることができないと思います。おそらく、ハチさんは、真澄を世界史の中に位置づけてみたいと考えたのではないかと思われるようになります。フンボルトを引き合いに出してくるのは、そのためでしょう。真澄を日本の財産に留めるのではなく、その業績を世界の科学史の中に置いて評価してみる必要があると考えたと思います。

八 「図絵を読む楽しさ」とカラー公開

ハチさんがこうして科学史の中で真澄を評価し、教育に生かそうと取り組んでいた時期、兄の内田武志は『菅江真澄遊覧記』全五巻と昭和四十四年（一九六九）に『菅江真澄随筆集』を出し、『菅江真澄全集』の編集に専念していました。その時期には自宅に菅江真澄研究所を置き、タイプ刷りで『菅江真澄研究所報告』四冊を出していました。

その中でハチさんは、昭和四十五年（一九七〇）の1に「図絵を読む楽しさ」、昭和四十六年（一九七二）の3に「河北文化賞 受賞のこと」、昭和四十七年（一九七二）の4に「白井秀超について」を寄せました。「図絵を読む楽しさ」は昭和四十七年の『菅江真澄全集月報』3に転載されています。「河北文化賞 受賞のこと」と「白井秀超について」は、今度の『内田ハチ遺稿集』に入っています。

「河北文化賞 受賞のこと」は、仙台の河北新報社が出している河北文化賞を受賞した報告です。昭和四十六年一月十八日、第二十回河北文化賞の贈呈式が仙台のホテルで行われました。内田武志は学術部門で受賞しましたけれども、出席できないので、代わりにハチさんが行きました。秋田からは教育長が臨席して挨拶し、記念茶話会では仙台の民俗学者三原良吉、東北大学の民俗学者竹内利美に会いました。この推薦の口火をきったのは奈良環之助でした。全集と一緒に編集するはずだった奈良の逝去は惜しんでもなお余りあるものがあると述べています。

引用された説明によれば、内田武志の受賞は、「菅江真澄の業績を中心とする東北庶民文化の研究」の功績によるものでした。柳田国男が昭和三十七年（一九六二）に亡くなり、その後、柳田ブームと民俗学ブームが起こっていました。そ

こで、「この研究に巨火を灯し、民俗学の聖典視されている菅江真澄の百数十冊におよぶ日記、紀行文、隨筆などの研究解明に、内田氏は不起の病床にありながら一生を捧げている」とします。真澄の記録を「民俗学の聖典」と呼んだことが注意されます。内田はそれらを『真澄遊覧記』全五巻にまとめましたが、それは「柳田国男の研究の誤りを補訂する貴重なもの」であり、「伝記考証、年譜まで添えて、読解困難な原文を現代文に解説した労作である」と評価しています。確かに、それまでは民俗学者と秋田県人しか知らなかった真澄を、全国の人が知るようになったわけですから、その功績を讃えたということになります。

近く刊行される『菅江真澄全集』にも触れて、「全集には三千八百枚の真澄の描いた絵が写真版となつてそう入される予定だ」とあります。まさにその通りで、真澄の描いた図絵が白黒の写真版で収録されました。「その陰には妹内田ハチ女史（秋田大学助教授）が一生を犠牲にして探訪の足となつて兄の研究を助けた功績が光っている」とまとめます。兄の功績を助けたのが内田ハチだという評価です。私たちもそう見てきたわけですが、今日お話ししていることはやや違って、単なる兄を助けたやさしい妹というだけではないと考えられます。

もう一つの「白井秀超について」は、柳田国男は吉田宿の植田家の資料から紹介したけれども、いろいろ違いがあつて正確に伝わっていませんでした。ここで、この白井秀超というのは、真澄自身の名前ではないかとはつきり言っています。柳田は父と子の関係ではないかと述べていましたけれども、真澄本人のことだと断言しました。三河から旅立つ前の菅江真澄への関心が高まつている時期の文章ということになるうかと思ひます。

そして、「図絵を読む楽しさ」です。図絵を「見る」ではなく、「読む」という点が重要です。その冒頭で、「菅江真澄のかきのこした図絵のすべてを、全集にいれようということになつて、同時に、この図絵に真澄が書いている説明文もすべて活字にしてのせることになり、その原稿作りの役は私に負わされた。なにしろ、三千枚にもあまる写真が、つぎつぎと未来社から送られてくるに及んでは、まるで重いつづらを背負わされている感があつた。けれども、このつづらはあけてみてはじめて、その宝の真価を知ることができた」と述べます。ハチは、全集の口絵に載せた図絵の説明文を翻刻する作業を通して、図絵の世界に魅了されていたのです。

新たに図絵の説明を翻刻する作業によつて、図絵を丁寧に見て読まされたはずで、甲乙丙と書かれている説明が図絵とど

のように対応するのかわ、一つ一つ読んでゆかなければなりません。もちろん、『秋田叢書』『秋田叢書別集 菅江真澄集』が先行してありましたので、それを参考にすることは間違いないと思いますが、それに加えてすべてを行うのは大変です。『菅江真澄遊覧記』で注記をつけて動植物を正確に知ることの難しさとおもしろさを知りましたが、今度は図絵の説明を翻刻することによって、図絵を読むことのおもしろさに魅了されていったのです。

やがてそれは『菅江真澄民俗図絵』全三巻（岩崎美術社、一九八九年）のカラー版になります。内容見本によれば、これは「没後160年記念」の出版でした。三千枚の中から二五七点を選択して、原色・原寸大で収録しました。全体の十分の一にもなりませんけれども、全集では縮小した白黒版でしたから、カラー版ではありませんでした。柳田国男は彩色画を再現することが出版を困難にさせると考えましたが、すべてではなかったにしても、厳選してカラー版で見せることができました。

また、先ほども申し上げましたように、ハチさんは兄の内田武志ができなかった菅江真澄に関する講演を引き受けるようになります。昭和五十年には、鹿角で「菅江真澄と鹿角」という講演を行っています。これも講演録がありますけれど

も、鹿角はもちろん内田兄妹の出身地であり、内田武志が伊藤良三から『秋田叢書』『秋田叢書別集 菅江真澄集』を譲られて、本格的に真澄研究を始めた場所でした。ふるさとの鹿角は、真澄研究に先立って民俗学に目ざめ、方言や昔話を記録した大事な場所でもありました。

ハチさんは、全集の資料を駆使しながら、真澄は鹿角を三回訪ねたと指摘しています。これは大きなことで、真澄ゆかりの秋田県の各地で真澄を読むことが行われはじめたことになります。そして、「真澄を鹿角では単なるゆきずりの旅人として遇してはならないと思う」とまとめます。鹿角が例に挙がっていますが、真澄とその土地との因縁を探る読み方を提案しているのだらうと思います。

九 真澄没後百五十年祭と没後百六十年祭

昭和五十三年（一九七八）は、菅江真澄没後百五十年祭の年にあたりました。内田武志は健在でしたが、この年はむしろハチさんの活躍が目立ちます。

一つ目は、『秋田魁新報』に「菅江真澄の旅」という文章が十回にわたって載りました。連載の副題を引きますと、「第一回 ドヤジサとへあきたのかりね」「第二回 小野小町と浄瑠璃姫」「第三回 くくり姫神」「第四回 ふるさとの幼時」

「第五回 ふるさとでの修業」「第六回 故郷を出発」「第七回 常冠り」「第八回 久保田のくらし」「第九回 雪月花の出羽路」「第十回 真澄の滝好き」となります。伝記ばかりでなく、「真澄の滝好き」のようなユニークな分析も含まれています。没後五十年祭に会わせて、新聞社が連載を依頼したのだろうと思います。

二つ目は、菅江真澄百五十年祭実行委員会が組織され、『菅江真澄と秋田』（加賀谷書店、一九七八年）が出されています。ハチさんは「多可茂助の『覚書』による真澄の学問の源流」を巻頭に書きました。真澄が岩野の人参畑で働くのを見たという記録から、尾張藩の薬園に勤めて、藩の下屋敷の人参畑で朝鮮人参や甲州甘草を栽培したらしいということを論じています。彼の本草学の源流とその実践が秋田で行われたと考えるのです。

三つ目は、秋田県立博物館が遺墨展を開き、翌年、『菅江真澄と秋田』（秋田県立博物館、一九七九年）を出しています。そこに載った「菅江真澄の故郷と学問について」は講演の記録集です。「真澄は、尾張におきまして本草にいたしましたが、考古にいたしましたが、その萌芽期の学問を身につけた。本当に日本の科学の黎明期の一番もともになる教養を身につけることができたのだ」と述べます。私たちは西洋から科学が入

るまで日本には科学は誕生しなかったと考えがちですが、そうした常識に変更を迫ります。

四つ目の動きは、一年後になりますけれども、秋田県文化保護協会で『出羽路』第六八・六九合併号に真澄特集を組んで、百五十年祭記念座談会を開いています。高橋富雄・長沢詠子・佐藤久治・奈良修介・工藤茂美の文章が並び、五人の発言を受けて、ハチさんは「自由を最上の喜びとす」という趣旨の発言をしています。

『菅江真澄遊覧記』の刊行あたりから再び菅江真澄が脚光を浴びるようになり、百五十年祭、百六十年祭に触れましたが、遡れば百四十一年祭には、内田武志・内田ハチ・奈良環之助・畠山重悦・鷺谷良一編『菅江真澄翁墓前祭記録』（私家版、一九六九年）が出て、ハチさんの発言は「座談会記録」に残っています。こうして十年ごとに真澄の功績を顕彰することが、秋田で行われてきたのです。兄の武志が亡くなった後、全集に関する資料は真澄ゆかりの地の岡崎市立図書館に寄贈されます。全集原本の複製ファイル一四四冊と焼付写真約四千枚の目録が出たことは既に述べました。

その時、商工会議所で記念の講演会が行われて、ハチさんは「菅江真澄への歩み」という講演を行いました。これは兄の武志を偲ぶ追悼講演で、内田武志の菅江真澄研究の歩みを

たどったものです。岡崎に全集の資料を寄贈して、兄の人生を回顧するのが晩年の一番大きな仕事になりました。

その付録に入った「内田武志著作年譜」は、内田武志が昭和五年（一九三〇）から没後の昭和五十九年まで発表した文章を整理しています。これは現在で言う「内田武志データベース」ということになります。著作はかなり網羅されていますので、今度の本ではこの書誌を補訂したいと考えています。残念ながら、この「著作年譜」では「年譜」がよくわかりません。内田武志が生まれてから亡くなるまでの人生を少しでも明らかにして、次の時代へつなげたいと思います。おそろくハチさんは、内田武志の研究を行って、内田武志の伝記を書きたかったのだろうと思います。兄のことを最もよく知る妹が一代記を書きたいと思うのは自然なことです。しかし、ハチさんの仕事はその前に幕を下ろしました。

最後に申し上げたいことが一つあります。内田ハチさんは百四十一年祭、百五十年祭、百六十年祭に関わって、お兄さんの思いをつなぎました。来年は真澄没後百九十年祭にあたります。私はこの博物館と二十年來のおつきあいをしてきましたので、東京にいて何かできないかと考えています。

まず、『菅江真澄が見た日本』（仮称）という本を東京の三弥井書店から刊行しようと計画しています。秋田県の人とは

ちろん、全国の方々三十人以上に原稿を依頼して、来春、菅江真澄の魅力を伝えるような本を出して、百九十年祭の動きを作りたいと考えています。

思えば、昭和三年（一九二八）の百年祭のときに、柳田国男は秋田に来て墓前祭に参加し、秋田図書館で講演を行いました。すごくいい講演です。それによって、昭和のはじめの第一回の菅江真澄のブームが起きました。深澤多市もそれに刺激されて、『秋田叢書』を『秋田叢書別集 菅江真澄集』に拡張しました。百年祭はそんな雰囲気の中にあつたのです。

それから九十年が経ちますので、私は柳田国男ができなかったことをやってみたいと思っています。来年は博物館で企画展が開かれるようですけれども、来春、私の大学で菅江真澄の講演とシンポジウムを開きたいと考えています。秋田県人会の方々が参加してくださればうれしいのですが、むしろ秋田県と関わりのなかった方々に菅江真澄の魅力を伝えたいと考えています。

百九十年の記念すべき年なので、菅江真澄ゆかりの場所でも何かやってくれないかと相談しています。『菅江真澄遊覧記』と『菅江真澄全集』を一緒に作った宮本常一は山口県周防大島の出身です。そこにセンターがありますので、稀代の旅人の宮本常一と菅江真澄が比べられそうです。そして、岡

崎市立中央図書館は内田文庫を持っていますので、岡崎でも講演とシンポジウムを考えてくれるようです。他に、真澄が旅を始めて滞在したのは信濃の洗馬にある釜井庵でした。長野県塩尻市にも真澄を顕彰する施設があり、私も十年前ぐらいに講演に行きました。今は柳田国男の書簡が発見されて展示されていますけれども、洗馬でも何かしようという話が起っています。近いところでは、岩手県の平泉にも真澄は行っていますので、平泉の郷土館でも考えてくれるようです。百九十年は、秋田のみならず、真澄ゆかりの地で菅江真澄を顕彰する機会ができそうだという感触を持っています。

もう終わりにしますが、私はさらに先のことを考えています。百九十年祭で日本全国に改めて菅江真澄を認知してもらうことができれば、二百年祭は世界に菅江真澄を押し出したと思います。外国人に「真澄っておもしろいよね」と、インターネットで発信してもらうような時代が二百年祭なのではないかと思いますが、どうでしょう。もちろん私一人ではできませんが、外国人観光客が二十万人を超えて、二〇二〇年は四千万人になると言っていますから、そんな国際化の時代であれば、これを利用しない手はありません。

十一年後には、外国人が菅江真澄の記録を見て、「菅江真澄っておもしろいよね」「二百年前のナマハゲはこんな感じ

だったんだ」とつぶやく時代が、もうそこまでやって来ているように思います。そんな時代を秋田県のみならず一緒に過ごせれば、私が東京から来ている意味もあらうかと思えます。そのためにも、できたばかりの『内田ハチ遺稿集』を読んでくださればありがたいと思います。私の国際化への視点は、内田ハチさんから学んだと言ってもいいからです。拙い講演になりましたが、これで終わりにします。ありがとうございました。

『あきた』第五四号所収、一九六六年十一月

『菅江真澄遊覧記』の刊行にあたって、私に課せられたのは、動物や植物に関する真澄の記録を読者にわかるような注付けをする仕事である。勇敢に取組んでみたものの、身のほどしらずとはこのことを言うのであろうか。地質鉱物に関する注付けの責を受持つてくださる秋大名誉教授の加賀谷文治郎先生によれば「注付けをする者には、記録者と同等かそれ以上の学力がなければならない」とのことであるから、私はまさに失格者である。にもかかわらずあえてこの重責に耐えぬこうとするのは、この粗末な私の注をふみ台としてそれを完全なものにしようとする人々の協力を得ようとねがう切なる思いからである。

菅江真澄は旅行者として名高い。徳川時代の藩制のきびしさをくぐりぬけ、もっとも食糧事情の悪かった天明三年（一七八三）から文政十二年（一八二九）に至るまで七十六歳の生涯が旅ではたのであるから、彼を随一の旅人と呼ぶことには異論がなからう。

また足跡の広さにおいても、生地三河（愛知県）を発足し、信濃、越後、出羽、南部、松前、津軽をへて、秋田領にはいつ

てからのおよそ三十年間是他領におもむかなかった。今にして秋田県のわれわれは、“秋田の菅江真澄”と思いこんでいるゆえんである。

さて、彼の記録を整理して驚かされるのはこの広い旅の領域にわたる観察眼がまことに緻密かつ正確であることである。それは、とりもなおさず彼の記録には最初から方法が考案され、それによる着眼が生涯貫徹されたからであろう。ある山ではからずとも見た一草木は、彼の頭脳のなかの区切られた一劃のなかにしまいこまれる。幾年か経て、遠くはなれた他の山でまたその草木と同一のものを、すばやくそのボックスの中にしまいこむ。こうしたつみかさねによって、しだいに彼の知識は成熟してゆく。なんとというすばらしい旅であつたことか。いまここにその一例を紹介してみよう。

題にかかげた「岳茶・岳あられ」は、文化十年（一八一三）から十二年までの雄勝郡の地誌調査によって記録した（雪の出羽路・雄勝郡）の高松村河原毛温泉（湯沢市高松）の項に次のように述べられている。

「岳茶、九月花咲く、その花を岳丸雪^{だけあられ}といひ、また玉柴^{たましば}といふ。松前の恵山、また内浦山、白が岳などにて山茶といひこれを茶つくり飲て疝氣の治ゆといへり。」

松前の旅の記録「えぞのでぶり」（寛政三年、一七九一）

には「山茶」について次のようにしるされている。

「この山を涌山、夷山などさたかならねば、疎山と、こたひ書たり。(中略)山茶といふものあり、疝氣をいやすといふ臭氣あり。其莖は「ひろめかり」といふ冊子にいたせり」

以上の記録の注付けをしようとする時、誠に残念なことに、現存する「ひろめかり」には真澄の写生図が載っていないことである。このように真澄の原本は完全な形でないものがあり、今にして未発見なものが多い。そこで植物学上からは、花の咲く時期、およびその花の形状から推察するのであるが、旧暦の九月といえば、川原毛温泉ではもう雪が程なく降るかと考えられる時期で、花の咲くころとは思われない。九月が六月ではなかるうか、と、印刷のさいの誤字の問題も考えてみるのであるが、この原本はついに佐竹家に献上されず、今は所有者があきらかではないので、確かめる手段がない。もしや花ではなく果実をしるしているとすれば、あられのような果実だったら、白くまるいはずだ。玉がつくので玉柴。そうなれば、小低木だろうか。暗中模索とはこのこと。

真澄は草葉の陰から私のこの様子を見て、「哀れにもほどがある。お前は歩いてもみずわしの記録をほじくるつもりだから苦しむのだ。旅をしる、目を見ひらき、人から物を聞く耳を持つて」と叱っているだろうと思うと、冷汗がしたたる。

「誰かたすけて！」と叫びたくなって、彼の記録をさぐると、いま一カ所、下北半島の恐山をしるす「牧の冬枯」(寛政四年、一七九二)に次の記録がある。

「湖の高岸のひんかしはたかき岡にて、檜、石楠花の生ひましり、雪浅きかたには、つげ、ゆづる葉、高野つゞじ(前夷山にあり、山茶といふ)真壁葛しげう生ひ茂りたり」

高野つゞじというからにはつゞじ科であろうか。恐山のような信仰の場と関連した名づけかたで高野と呼ばれるのかもしれない。と思ったが、ころろみに、つゞじ科の植物を、北海道と秋田県ですでに刊行された文献でさぐってみた。「分類アイヌ語辞典」(知里真志保著)によると「イツツツジ、幌別では、この葉をお茶にして飲んだり、粥に入れて味をつけたりした……」とあり、「秋田県植物誌」(村松七郎著)によると、この植物は駒ヶ岳、八幡平などに分布している。そこで私は村井三郎氏(農林省、東北林木育種場勤務)に問い合わせたところ次のような御教示をいただいた。

「恐山をよく知っている者にとつて、たくさん群生しているイツツツジに気付かないはずがないと考えて読んだら、高野つゞじ=イツツツジでした。イツツツジの葉にはビタミンCが多く、樺太、シベリアの露人は茶として飲用しビタミン欠乏を防いでいると戦時中の北方の報告にありました。イツ

ツツジをだ、け、あ、れ、と、呼、ぶ、と、す、れ、ば、花が白色小花の集まりであり、果実ミナは小楕円形で集まるので、どちらかをあ、れ、と見たてたのでしょうか」

これで、やっとあんどして、注、付、け、を、し、た、次、第、で、あ、る。こゝんな裏話を皆さまに申上げるのも、微力の私に今後ともご存知のことをおしらせ頂きたいばかりに書くわけである。

注「菅江真澄遊覧記」は、平凡社の「東洋文庫」シリーズとして刊行中の内田武志・宮本常一共訳の全五巻本で、筆者は病床にある尊父マサ武志氏の訳業を助けているものである。

二〇一七年一〇月一四日、秋田県立博物館にて行った講演に修正を加えた）

白井秀超手沢本『榊葉日記』の紹介

羽柴 亜弥
嵯峨 彩子

『榊葉日記』は、平安中期の歌人、大中臣能宣おおなかとみのよしのぶの作と伝わっている。『神道大辞典』（平凡社・昭和十二年刊）の本書の項では、天照大神が伊勢に鎮座した由緒や斎王の起源等を記している」と解説されている。また一方で、大中臣能宣が作者であるとは考えがたく、後世の偽作とする説もある。写本がいくつか伝来しているようで、本稿では国文学研究資料館がウェブ上のデータベースで公開している、大和文華館所蔵の『榊葉日記』を比較・検討の対象とした。二書を区別するために、本稿では便宜上、大和文華館所蔵『榊葉日記』を大和文華館本、本稿で紹介する『榊葉日記』を白井秀超手沢本と呼ぶことにする。

白井秀超手沢本『榊葉日記』は、八事・枡中歴史研究会（名古屋市内）会員である前田栄作氏の所蔵である。前田氏は、菅江真澄が若年の頃「白井秀超」と名乗っていたことを研究会の研修会で知り、蔵書を確認したところ、奥書にその署名を発見して、八事・枡中歴史研究会に報告された。そして、そ

の八事・枡中歴史研究会から本書についての情報を頂き、この度資料紹介させていただける運びとなった。

菅江真澄が「白井秀超」と同一人物であるということは、昭和四十二（一九六七）年、愛知県西枇杷島町（現清須市）の水谷源二郎が見出し、秋田県で真澄研究をしていた内田武志・ハチ兄妹によつて論証・発表がなされた。真澄は尾張・三河にいた若年の頃、「白井秀超」を名乗っていたことが判明したのである。この事実は、尾張・三河における真澄の足跡を追う手がかりとして、真澄研究において大いに注目されている。

白井秀超手沢本『榊葉日記』の所蔵者である前田氏は、本書を所蔵するに至った経緯について、祖父または曾祖父が手に入れたのではないかと推測されている。前田氏の祖父は名古屋市内で小学校の教師をしていた。その傍ら、郷土の歴史の研究をされており、多くの書物を購入していたようだ。また、曾祖父は江戸時代の尾張藩校・明倫堂で書生をしていた。

青松葉事件にも同席していたと伝わっているようである。このどちらかの時代に、本書が前田家に廻ってきたと考えられるという。いずれにしても、名古屋で「白井秀超」の署名入りの本書を手に入れたことになる。現在の所蔵者・所蔵にいたった経緯も、真澄の足跡をたどる重要な手がかりとなるだろう。尾張時代の真澄を知ることのできる貴重な一冊といえよう。

白井秀超手沢本は、縦二十七・四cm、横十九・一cmのいわゆる大本の朝鮮綴（五針眼訂法）で、丁数は十二である。表紙に葉の絵が描かれ、題簽に「榊葉日記」とある。表紙と裏表紙は反故紙を再利用しており、確認できる文字で推測すると、伊勢神宮に関連した事項を内容とした文書と思われる。

白井秀超手沢本の本文は、翻刻で示す通りの和文で、「榊葉日記上」と「榊葉日記下」が収録されている。余白や行間に小さい文字で異筆による書込みが多くなされている。その書込みは、かなで書かれている語句を漢字に改め、異本との異同を指摘するなど、校正をおこなっている。この書込みは大和文華館本にはなく、本書の持ち主、つまり真澄による書込みと考えられる。

十一丁裏に「榊葉日記終」とあり本文が終わる。その下に、大中臣能宣の卒年から明和九（一七七二）年までの年数

が七百八十一年であるとの書込みがある。明和九年という年から判断すると、真澄が記入したと考えられる。このように、過去のある時点から現在までの年数を数える記述は、真澄の著作によくみられる。確定は出来ないが、おそらく明和九年は、真澄が本書を校合した年なのであろう。明和九年に書込みがなされたとすると、宝暦四（一七五四）年生まれとする定説では真澄は当時十八歳で、尾張藩の薬草園につとめていたとされる時期である。当時「白井秀超」と名乗り、本書のような古い文献を読み、異本と校合するような研究を行っていたことがわかる。

十二丁表からは奥書が書かれている。①応永十年三月十日付藤原経豊の署名にて、卜部兼有が伝えたものを書写したという記録。②青蓮院の門主が所蔵していた本を、藤原行季が書写したという記録。奥書からはこの二つの情報を読み取れる。原本を応永年間に卜部兼有・藤原経豊が書写、その写本を青蓮院門主が所蔵、さらに青蓮院本を藤原行季が書写したことがわかる。本書は多くの人の手で何度も書写され伝来してきたのである。ここまでの奥書は、大和文華館本にもあるため、藤原行季が書写したものが、あちこちで書き写され流布したと考えられる。

最終丁表で奥書は終了しており、最終丁裏に貼紙がある。

ここからは、大和文華館本にはなく、本書の独自な部分となる。貼紙の横に「白井秀超」と署名がある。貼紙の筆跡と本文中にある書込みの筆跡が似ているため、他筆によって書かれた本に真澄が書込みをしたものと推定される。貼紙の内容から、真澄が多くの書込みをした理由の一端についてうかがい知ることができる。翻刻文を参照していただきたい。

貼紙冒頭で本書について、「写しを数回経ているため、脱字・重複が多く、読みにくい文章がある」と評価している。確かに内容を見ると、大和文華館本と少なからず異なる点を見い出すことができる。真澄の評価の通りである。

そこで真澄は、伊勢の度会光隆神主を頼り、神主が長を務めていた文庫に、校合するのに善い本があるかどうかを尋ねた。十八歳の時点で、真澄がすでに伊勢の度会光隆神主と交流があったという事実がここで判明する。

度会神主が文庫を搜索すると、「同名異籍」の著作が発見された。それは、二条良基作の『榊葉日記』であった。貼紙に書かれている通り、この日記には、貞治三（一三六四）年におきた、興福寺衆徒による傲訴によって春日大社の御神木が入洛した事件が記録されている。また、二条良基の『榊葉日記』は、徳川光圀編の『扶桑拾葉集』にも確かに収録されている。真澄はこの同名の書籍についても内容を確認し、詳

細に調べていたことがわかる。

最後に再び本書『榊葉日記』についての記述となり、体裁が古雅なものなので、もし類似した書物があれば、さらに校正を進めたいと綴っている。結びに「諸君校考あらかし」とあることから、真澄は納得ゆくまで十分な校合を行えなかったことがわかる。よって、最後は多くの人達による校正を願っているのである。

本書は、真澄による著作ではないが、その書込み・最後の貼紙によって、尾張時代の真澄の研究姿勢や考え方、交流関係などが読み取れる興味深い資料である。本解題では、特に奥書や貼紙から判明することを紹介するにとどまったが、「脱關重複少なからず」、「古雅」な文章に、真澄がいかに訂正を加えているか、どのような注釈を加えているのかを精査することは、尾張時代の若年の真澄を知る上で、重要な手がかりとなるであろう。また、管見によれば、『榊葉日記』自体の研究も、まだ十分にはなされていないようである。本稿が真澄研究・神道研究の発展に少しでも寄与できれば幸いである。

凡例

ア、変体仮名については、平仮名に換えた。
イ、漢字は常用漢字を使用した。

ウ、解釈を試みながら、適宜、句読点を加えた。

エ、本文（他筆）の文字と、真澄（白井秀超）による註釈の文字ポイントを变えた。註釈の位置や配置を原本に近づけたが、詳細は本稿末に付した写真を参考にしたい。

オ、参考として、大和文華館本『榊葉日記』（国文学研究資料館データベースにて公開）を使用し、適宜比較検討を行った。

翻刻と解題：羽柴垂弥（愛知大学大学院文学研究科博士課程）

本文語釈……嵯峨彩子（秋田県立博物館非常勤職員）

榊葉日記

崇神天皇、古事記、御真木入日子印恵命、日本記、御間城入彦五十瓊殖天皇
みまきいりひこいそにえのすべらき

天
のあめが下、しろしみそなはしおはして

のむは、しろの春秋を、つとめをくらせおは

してなんあり、あらかねのつち、たひらにし

て、もゝしぎのやいくらところを、うたつ

百石城

崇神記七年春二月云々、是夜夢有_二貴人_一対立_二殿中_一
しりうたへり、しかるに、きさらきの中_二のころ_一
自称_二大物主神_一曰云々、古事記大物主大神頭_二於御夢_一曰云々

畏

恐

恭

ほひ、御夢のかしこまり、をそれみも、う

思 法 有職
やくしうおもひ、てうと法あるゆうそく

尋 宣 給
に、たつねのりしたまはれ、ちはやふる神

御真木入日子印恵命・御間城入彦五十瓊殖天皇・みまきいりひこ
いそにえのすべらき↓崇神天皇の名。崇神天皇は記紀の伝承にみ
える第十代天皇。大和政権を最初に確立した天皇と考えられている。
しろし↓しろす（知す）の連用形。お治めになる。天皇が統治な
さる。

みそなはす【見そなはす】↓ご覧になる。

のむ【祈】↓祈る。頭を下げてこいねがう。

しろの春秋↓田地の一年間。

新撰万葉↓新撰万葉集。平安前期の私撰集。菅原道真撰か。

あらかねの【粗金の】↓粗金が土の中にあるところから「土（つち）」にかかる枕詞。

ももしぎ【百磯城】↓多くの石や木で造った「大宮」の意で、こ

こでは「やいくらところ」にかかる序詞。また、崇神天皇の皇居

だった磯城瑞籬宮（しきのみずがきのみや）の「磯城」のイメー

ジも含んでいるものであろう。

やいくら↓弥・居座。弥（いや）は、大きい意。広大な御殿。座

（くら）はひとの座る場所。

うたつしりうたへり↓異本（奈良県・大和文華館所蔵↓以後

文華館本と略す）には、この直前に「得ちよの」という文言があ

る。それを補つて前の部分から読むと、「もゝしぎのやいくらと

ころを得ちよのうたつしりうたへり」となる。後半部分は「千

代の歌、慎み歌へり」の意か。千代は千年、また非常に長い年月。

慎みは物忌みや物忌みの祈禱、潔斎のこと。

きさらきの中_二のころほひ、御夢_一↓このくだりに連想される日本

書紀と古事記の記述について、真澄が傍注に書き入れている。国

中で災害が多かったころ、日本書紀・崇神紀では大物主神（おお

ものぬしのかみ）が百襲姫（ももそひめ）に神憑り、古事記・上

では崇神天皇の夢の中に大物主神が現れ、神意を告げたという。

うやうやし【恭し】↓礼儀正しい。

てうと↓異本（文華館本）の「どうて」を探ると、問うての意か。

ゆうそく【有職】↓学問に精通した人。

ちはやふる【千早振】↓勢いの強力で恐ろしい神の意で、「神」

およびこれに類する語にかかる枕詞。

の御代の、御おきてのくさはひ、ありかたき

にも、かしこみ、うやまふべきにも、あま

照てらす御神の、瓊々杵のみことに、とよあ

しはらの、なかつくにつたへこちてなむ、

左の御手には、やたのかゝみをもちたつさへ、

みきんの御たなこのうちに、くさなきのむ

らくものつるきもたしおはし、御肝

やとりには、やさかにのまか玉を、あまのかく

山の、はやりの柴つとにひめて、やすら

かに、めつらかに、とゝのへおはしておはし

くさはひ【種】↓物事の原因。種。種類。品々。

瓊々杵のみこと↓瓊々杵尊（にぎのみこと）。日本神話で、天照大神の孫。天照大神の命令で、葦原の中つ国を統治するため、高天原から日向高千穂峰に天降ったとされる。

とよあしはらのなかつくに【豊葦原の中つ国】↓日本国の美称。つたへこちて↓伝えて言つて。

やたのかゝみ【八咫鏡】↓三種の神器の一つ。天照大神が岩戸に隠れた時、石凝姥命（いしよりだめのみこと）が作ったとされる鏡。天照大神の靈魂の依代（よりしろ）として天孫降臨後、宮中に安置され、垂仁天皇の時代に伊勢に移されたと伝えられる。伊勢神宮の御神体。

くさなきのむらくものつるき↓草薙剣（天叢雲剣）。三種の神器の一つ。日本武尊（やまとたけるのみこと）が倭姫命（やまとひめのみこと）から賜り、のち熱田神宮に祭られたという。

たなこのうち↓たなごころの中（うち）⇨手のひらの中の略。

御肝やとり↓語義不詳。左手に八咫鏡、右手に草薙剣を持つたとあり、さらに八咫瓊勾玉を説明している部分にみえることから、体の正面部分、胸のことを指しているのではないか。そう考えると、「肝（きも⇨内臓の主要部分）が宿るところ」という意味ととらえてよい。

やさかにのまか玉【八咫瓊勾玉】↓三種の神器の一つ。天照大神が岩戸隠れた時、神々が立てた真神につけて飾ったという曲玉。あまのかく山【天香具山】↓高天原にあったという山。神事に深い由縁のある霊山で、神祭の具などが多くこの山から取られた。また、大和国の天香具山は、奈良県橿原市にある小丘で、大和三山の一つであり、歌枕でもある。

はやり↓語義不詳。「はやし（林）」に通じるか。

つと【色】↓わらなどを束ねて、その中に魚・果実などの食品を包んだものの意。

やすらか【安らか】↓平安なさま。無事なさま。

めづらか【珍か】↓すばらしいさま。また、めづらしいさま。ふつとと違っているさま。

ととのふ【調ふ】↓不足なくそろ。完備する。

御国　倭姫世記、左物不_レ移_二右_一物不_レ移_二左_一右_二右_一
のみに、しろめいたんには、ひだんのものをもて

右 豊
ちものをなんみぎんにして、とよらかに、

大津 辺
まくらを、おほつのへに、うつろふゆすらし

給 天（石座）覆槽置（ウケト、ロカシ）
めたいまふへよと、あまのやくらのふみつゝ

みにしてなん、御くにゆづりまうちて神国讓申し通フ

御代 五 国
の御代に七みよをうけはりて、いつくのくに

ふゝきて「古事記」上に「天真名井に灌（ふりすす）ぎて、（中略）吹（ふ）き棄（う）つる氣噴（いふき）の狹霧（さざぎり）」とみえる。本文の「ふゝく」に対しても真澄はそれを想起し、傍注に「氣噴」と書き入れたか。

倭姫命世記(やまとひめのみことしき)。神道五部
外書の一。天地開闢から、皇太神宮の各地御遷幸、雄略天皇の代の
書宮鎮座に至る経緯を記す。文中に「左の物を右に移さず、右の
物を左に移さずして、左を左とし、右を右とし、左に帰り、右に
廻る事も、万事遂う事なく、太神に仕えまつれ」という記述がある。
ゆえに「物事けし」↓豊かである。栄えている。
ものす【物す】↓...である。...にいる。

やそ【八十】↓数の八〇。また、数の多いこと。
まくら【臣等】↓汝が臣。われら。天皇に呼びよ

のことば。

おほつへの【大津の辺】↓大きな港のあたり。
うつろふゆすらしめたいまふへ↓うつろふ（移ろふ）ゆすらしめ
（譲らしめ）たまへ（給へ）の意か。

あまのやぐらのふみつゝみにしてゐたのやぐらは天磐座（あまのいわくら）に「皇孫、乃ち天磐座を離（おしはな）ち」という記述がある。皇孫とは瓊々杵尊のこと。「ふみつゝみにして」は語義不詳だが、皇座の「くら」が物を据える台の意味もあることから「踏繼（ふみづぎ）踏み台の意」にしてゐるの意と読んではどうか。

槽(うけ)↓語義不詳。口の広い桶か。真澄は古事記・上「天の石屋戸にウケ伏せて踏みとどろこし神懸りして」の部分連想し、傍注に書き入れたか。

御くにゆづりまうちて↓国譲。大国主神（おおくにぬしのかみ）が神勅によつて国土を瓊々杵尊に奉つて退隠したこと。

神の御代に七みよを↓神世七代（かみよななよ）。記紀の神話で神代の中でも初期にあたる、国之常立神（くにのとこたちのかみ）からイザナギ、イザナミの神に至るまでの七代十一神の時代。うけはりて↓うく（承く）⇨受けつぐ。授かる）に関連した語か。

十 樛 柱 太 厚 平

つとをつぎのはしらふとくあつた

其造宮之制者則高ヲ太ヲ版則ハ厚

続

万葉 冬薯蕷葛 (ニサキツラ)

ひらにつけ、いままろに、まさきの

まかつらすち、ゆらにつゝきたまふはりぬ、

夫 主 平 奴儼等母由羅爾ノユラトハイカ、

それ神は、ぬしある家のかふ事あたはせ

給 伝 種

たまふはねばなんつたはらせおはす、く

は一本

さくの、かんだからをうつしあらため

床 同 御殿 別

て、ゆかをおなしふし、みあらかをことに

御舎

せじの神のみことのりにものしてぬも

畏 姫

のから、御夢のくさはひもかしこみて、ひめ

とをつぎのはしら↓つぎはツガ(樛) Ⅱマツ科の常緑高木。ツガはツギを導き、天皇の御代がどこまでも続くことを願望する表現に用いられることが多い。また、伊勢神宮内宮の五丈殿は俗に十柱殿(とはしらとの)とも呼ばれるとの記載が、喜早清在編の『毎時間・中』の中にみえる。それに関連した表現が、大主神を祀る社について「其の宮を造る制(のり)は、柱は高く大(ふと)し。板は広く厚くせむ」とある。

たひらにつけ↓異本(文華館本)ではこの後に「らんに」とあることから、「平穩につづいていであらう」との意。

まる【円・丸】↓欠けたところのないさま。

冬薯蕷葛【どころづら】↓ヤマノイモ科の蔓性多年草。万葉集では「皇祖神の神の宮人冬薯蕷葛いや常しくわれかへり見む」などにみられる。真澄は本文中の「かつら」からこれを連想したか。まさきのまかつら↓真拆の葛(まさきのかづら。植物の名。古代、つるを割いて鬘とし、神事に用いた。

すち↓筋(すぢ)。髪の毛など細長い線状のもの。

ゆらに↓玉や鈴の触れ合つて鳴るさま。からからと。

それ神は、ぬしある家の↓異本(文華館本)には「それ神はぬしある家の」と「かふ事あたはせたまふ」の間にさらに文があり、それを補うと「それ神はぬしある家のおとなり、うつしきたまにはゆきかふ事あたはせたまふ」となる。「そもそも神は主人のある家の中心となり、現実はこの世においてなる魂におかれましては、行き来することがお出来になる」の意か。

くさく【種種】↓物事の種類や品数の多いこと。そのさま。

かんだから【神宝】↓神の持つ宝物。神の所有物。

みあらか【御殿】↓宮殿をうやまつていう語。

ゆかをおなしふし、みあらかをことにせじ↓天照大神の御神体とされる八咫鏡は、初代神武天皇より、歴代天皇の御殿と床を共にして祭られていた。これを「同床共殿」という。

ものしてぬ↓ものし・てむ(あるにちがいない)の意か。

ものから↓逆説をあらわす。けれども。ものの。

ひめおほんみこ↓天皇の娘。皇女。

大 御子 豊鍬入姫命

おほんみこの、とひさきいりひめの、おほんに

崇神皇女齋王ノ姫

給 倭 笠

おほせことたまふりて、やまあとの国かき

仍立磯堅城神籬（ヒモロキ）

邑 庫

ぬいのみさとに、神ほくらたつなん、八重

柴籬 太 ぬ 具 御杖

ふしがきふとくいたゐて、くれ竹のみつえ

神代巻下柴此云二府爾ト

代 辰 一本 傍

しろこちぬ、や事はたつうみの御かたへ

無動 立 香

に、うこきなくたちて、あらしのかく山の

其所

しるしゆへつきたり、そこになん真櫛の

枝 薨

えだは、いらかにそゝろきて、そよさや

枝折折 持

けきみさ枝とよを枝千々えをりもて、

豊鍬入姫命「とよさきいりひめのみこと」↓崇神天皇の皇女。最初の齋宮（いつきのみや）と伝えられる。

おほせこと「仰せ言」↓天皇や貴人のご命令やおことは。

かなぬいのみさと↓笠籬邑（かきぬいむら）。崇神天皇はその殿内にて天照大神をまつることを畏れ、豊鍬入姫命に大神を託して、

宮中から倭（やまと）の笠籬邑に遷祭させたと日本書紀・崇神紀にある。その場所については諸説ある。

神ほくら↓神をまつる社殿。

八重「やえ」↓数多く重なっていること。

ふしがき↓柴垣。柴で結った垣。

いたゐて↓抱く（いだく）。取り囲む。保護する。

くれ竹の「具竹の」↓齋宮があった場所の地名（多気郡）から、齋宮の里には「竹の宮」という別称があった。「具竹の」は、この齋宮の御所と御杖代の「杖」のイメージをみちびくものか。

みつえしろ「御杖代」↓神の御杖となつて仕える者。

こちぬ↓こちらで寝るの意。

や事は↓異本（文華館本）を採り、「やまは」と読む。たつうみ「辰巳」↓東南。京から見伊勢が東南に位置することを指すか。『徒然草』の中にも「太神宮の通拝は異（たつみ）に向かはせ給ふ」という記述がみえる。

かたへ「片方」↓かたわら。そば。

うこきなく↓しつかりとしていてゆるがないさまを表す。

あらしのかく山↓異本（文華館本）「あまの」を採る。天香具山。

しるしゆへつきたり↓神の霊妙な験のため、到着したの意か。

いらか「薨」↓屋根のいちばん高い所。

そゝろきて↓そぞろか（背だけのすらり高いさま）が変化したものか、あるいはそぞろく（格別とりたてたりこだわることなくのびのびとする）の意か。

そよ↓しづかに風の吹く音、また、物が触れあつてたてるかすかな音などを表わす語。

さやけし↓清らかでさつぱりしている。すがすがしい。

みさ枝とよを枝千々えをりもて↓「小枝、豊かな枝、たくさん枝を折り持つて」の意か。

挿頭

そうしたいくにかさし、みそなふし

て、あなさやけ、あなたうと、あなさやけ、

をけくこうくとのみ、きよらめて、うきい

真人 姓可考

連

祭

のまと、とよすみのむらしなど、まつり

事 奉仕

神宣

のことにつかふまつりぬ、おほむかみのり

わ一本 天 大 御

してしかうくれなみあまつおほんみこ

詔

畏

との、いむさきのみことりのり、かしこきもの

御主

から、八十のおもとのみあるじといへと、

御国

何等

わなみのふところのみにくには、いづら

四 重

磯

よつのしきなみわにたついでを、う

宝 簪 荒金 不呈
けはすたから、そひゆるあらかねのふし

嶺 虚 高津御神 石座
のねそら、たかつみかみのやくらをしめ

平 (タヒラカ) 鎮 頃
す、御かきがいらかにしつめん^{より}は、とみにこ

倭 其所 移
なたより、やまあとのそこになん、うつろは

坐
しまして、こめとてかり、あうれしに

豊嶺入姫ヲ誤歟
えやうれしを、とや入ひめ御杖のみこと

湯津 爪櫛
たち、ゆつのつまぐしうけ、をぎのかう

聞 食
さしたてゝきこしめせせる、あれにかう

公 器 天津神
おほやけのうつは、あまつかみのたまり

人 吾 荒
しかと、神民うとゝなりてをや、あかあら△

△たまのあらきみいきをよそのしつやけきみそたまに

そひゆるあらかねのふしのねそら「簪ゆる粗金の富士の嶺空」↓
たかつみかみのやくら(高御座の意か)の「高」を導く序詞。
御かき↓御垣か。

かいらかにしつめん↓ここでは真澄の傍注を採って、「平らかに
鎮めん」と読む。安らかに神を鎮座させる。
とみにこなたより↓さつそくこちらから。

やまあと↓倭(やまと)。今の奈良県。

こめ↓込む・窺む(特定の場所にずっと居させる)の命令形か。
かりり↓(造作や設備がある場所に)作り設けられる」の意か。

「着手する、とりかかろ」の意か。

あうれしにえやうれしを↓異本(文華館本)を採り、「あなうれ
しにえやうれしを」と読む。「あな「えや」は感嘆をあらわす語。
とや入ひめ御杖のみこと↓豊嶺入姫(とよすきいりひめ)御杖の
命(みつえのみこと)の意。

たち↓立ち。

ゆつのつまぐし【湯津間櫛】↓ユツは神聖なるものの意。ツマ
は手先に持つ意。爪櫛(つまぐし)は、歯の目のこまかい櫛。古
事記・上に「故、左の御美豆良に刺せる湯津津間櫛」とある。

をぎのかうさしたてて↓「荻(おぎ)の挿頭(かざし)たてて」
の意か。『源氏物語』「若菜・下」にも、若い高官が荻の穂を挿頭
して舞ったのを、風情があるとする描写がある。

きこしめせせる↓受納なさる。

あれにかう↓異本(文華館本)の「あれにから」を採る。それか
らの意。

おほやけのうつは↓「天皇が(額や立て札などを)打ちつけて掲
げるのは」の意か。

のたまりしかと↓異本(文華館本)を採って、「宣りしこと」か。
神民うと↓神人(かみひと) 神に仕える人の意であろう。

あかあら△↓この続きに、異本(文華館本)では傍注(△以下の
部分)の文言がある。それを補うと「吾が荒魂の荒き御息をよそ
の静やけき御衣(みそ) 玉にあてらうせす」と読むのだろうか。

荒魂(あらたま・あらみたま)とは荒々しく勇武な神霊の側面を
いう。玉は丸い形の美しい石でできた装飾品の総称。

魂たま誤あや敷して
たににあてらうせず、あかそめたる石心一本

のしをよそらかへさいしとこそめあまの天

真名 清 渚 一本 心はみ
まな井のまよきなきそに、石はけみかミ

きふしき、もすそあらたうめてなん裳

受 新(二) 敷 古
うけつきぬ、にぬしきはふるきをふるく

ものせしとの、おほむ御なればなり、かう〇ことニテ落シカ

しかまうてかためてなん、神さひぬるはつ左備

ら 三種 宝物
こがとうじためる、みくさの御たからもミ

御床 御殿 共
の、みゆかを同しうし、みいらかをもち

あかそめたる石のしをよそらかへさいしとこそめ↓ここでは「石」の部分に異本（文華館本）の「心」を採って「吾が染め煮たる心の醜を寄そらかへさいしとこそ」と読んではどうか（異本には「め」はないため、解釈から外した。「寄そらかへさいし」は「寄そら返さじ」で、（波のように）寄せ返させないの意か。あまのまな井のまよきなきそに↓「天真名井の清き渚に」の意。真名井は井の美称。「清き渚」は、里村昌琢編『類字名所和歌集』伊勢の項にみえる。神宮に仕える人や参拝者の清めの場として「清き渚」といわれた。現在の伊勢市二見浦の辺りの浜を指していると思われる。

石はけみかきふしき↓ここでは「石」の部分に異本（文華館本）の「心」を採って「心励み掻き伏しき」と読んではどうか。「励む」は専心努力する。「掻き伏す」は伏す、うつむくの意。

もすそあらたうめてなんうけつきぬ↓「裳裾改めてなん受け継ぎぬ」の意。伊勢神宮内宮を通る五十鈴川には、倭姫命が御裳の裾の汚れを濯いだという伝説がある。

にぬしきはふるきをふるくものせし↓「新しいものは古いものを古くさせる」の意か。

おほむ【大御】↓接頭語が名詞化したもので、「おほむ」のあとの名詞を省略した表現。ここでは「大御言」の意で、みことのこと。

かうしかまうてかためてなん↓「このように申し上げ固く約束して」の意か。

神さひぬる↓神さびる＝神々しい。おごそかである。

はつこ【裔】↓血すじの末。子孫。

とうじためる↓「閉じ給える」の意か。

みくさの御たからも↓三種の神器。皇位のしるしとして、代々の天皇が伝承する（40ページの語釈参照）。

みゆかを同しうし、みいらかをもちにのし給ふへと↓御床を同じくし、御殿を諸にものし給へと。同床共殿（42ページ語釈「ゆかをおなしふし」の項参照）のこと。もろ（諸）は一緒の意。

姫命

ものし給ふへと、ひめみことのいりのおもと、

試

ひろまゆのすみに、ころみて、かたしく

今日

時のとも、わすれねわすれせし、けふ

誤テ重ル歟

我

を八万よろつよろつをのみかと、あか

うみのみどたちにも、やへしらかかみ

ことヲ誤歟
こと一本

う一本

木綿 襷 (手纏)

のおやあもつたへねと、ゆふたすきとり

御注連

ふして、みしめなわのすそちりを、御そ

はぬためしに、いまそかふり来しをみひ

蘿鬘

長

との、日かけのかつらのなき御代に、かふ

伝

続

今 御門

小

つたはりつゝき侍りて、今のみかどの、を

ひめみことのいりのおもと↓「ひめみことよりのおもと」で豊
敏入姫命の意。

ひろまゆ↓ひろまえ【広前】⇨神の御前の変化か。

かたしく時のとも、わすれねわすれせし↓「たとい片時であつても、決して忘れないだろう」の意か。

八万よろつよろつ↓「八百万」の誤記であろう。無数の意。

あかうみのみとたちにも、やへしらかかみのおやあもつたへねど
↓「吾が生みの子たちにも、八重白髪に親にも伝えねど」の意か。

「生みの子」は子孫のこと。「八重白髪」は「親」にかかる序詞。

ゆふたすき↓神に祈るときに肩にかけるたすき。ゆふ(木綿)は
楮(こうぞ)の皮の繊維を蒸して水にさらし、細かく裂いて糸状
にしたもの。幣(ぬさ)として神などにかけた。とりふしてて↓「取り伏して」の意か、もしくは『万葉集』に「木
綿取り付けて」とみえることから、「取り付(づ)す」と読むものか。しめなわ【注連縄】↓神前や神事の場にめぐらして、神聖な場所
と不浄な外界とを区別するのに用いる。

すそちり↓裾が散ること。

御そはぬ↓「御衣(みそ・おんぞ)跳ぬ」で、御衣が跳ね上がる
の意か。御衣はお召し物。「御添わぬ」ともとれるが、「御」が名
詞以外につくことはまれであらう。

ためし↓先例。

いまそかふり来し↓今ぞ被(かうぶ)り来し。「今被つて来た」
の意で、後ろの「かつら(鬘)」を修飾している。をみひと【小忌人】↓小忌(をみ)の人。小忌とは、大嘗会・新
嘗会などのとき、特に斎戒(さいかい)⇨飲食・行動をつつし、
心身を清めること)を厳重にして、神事に奉仕すること。また、
その役のひとつ。日かけのかつら↓ひかけの蔓(かずら)。大嘗会などの祭礼奉仕
の物忌のしるしとして冠に掛け垂らす。白糸または青糸などを組
んで作ったもの。古くは植物のヒカゲノカズラをそのまま用いた。
ここでは次の「長き御代に」の「長き」にかかる序詞であると考え
られる。

忌

△をば、まきもうくの御代のひのうとの

みの御としに、したをらにせうしたて

尊

五十鈴

たうとみて、いすゝの河のいすをうに宮

と一本

柱 弱

荷

お

檜皮

はしらよはかたに、になひをひて、ひはた

御 薨

の袖のみいらか、たうともいみじうあさま

しきかな、ことし、まさかきの御かむやへくらそ
備

臣等此

奉

なはりて、まくらこゝにしろしたいまつるを

申

畏

衍 敷

が

空

や、玉くしのかしこまごりも、みからぬそら

数 搔

ゝ

是

かすかきほくらに、いひそしなんと、これ

好事 敷 達

契

をすきたちとちきりてなん、柳葉日記巻上終

まきもうく↓巻向（纏向）。今の奈良県桜井市穴師一帯の称で、垂仁・景行兩天皇の皇居の地。

をみの御としに↓異本（文華館本）では、この前の行「今のみかどの」と「をみの御とし」の間に傍注（△以下）の部分がある。したをらにせうしたてたうとみて↓異本（文華館本）の「とうみて」を採る。「とうびて（給びて）」の意。「下男等に小子たて給いて」の意か。小子は子供。斎宮の群行（行装を整えた伊勢への下向）には、戸座（へざ）と呼ばれる七歳以上の男子が随行した。いすゝの河【五十鈴の河】↓五十鈴川。伊勢神宮の神域内を通る。よはかた【弱肩】↓弱々しい肩。自分の肩をへりくだつていう。になひをひて【担い負ひて】↓背負つて。

ひはたの袖のみいらか【檜皮の袖の御薨】↓檜皮葺の屋根。たうともいみじうあさましきかな↓異本（文華館本）の「たうとうも」を採る。「尊くもたいそう驚くようなことだ」の意か。

まさかき【真櫛】↓神事に用いられる木。ここでは御かむやへくらを修辭する序詞として用いられていると考えられる。

御かむやへくら↓御神八重庫で、たくさん神社の意か。

まくら【臣等】↓汝が臣。天皇に呼びかけるときの臣下のことば。しろしたいまつる↓記し奉る。

玉くし↓玉串。神道の行事作法として用いられる献供物の一種で、櫛の枝などに、絹、麻、紙などを付けて神前に供えるもの。

衍↓衍字（えんじ）。誤つて語句の中に入った不要な文字。

みからぬそらかすかき↓異本（文華館本）の「みがかぬ」を採る。（真澄の傍注とは沿わないが）「光を増すことのない空のようにぼんやりとした」の意で、次の「ほくら」にかかる序詞であろう。

ほくら【神庫】↓神宝を納めておく庫。小さな神社。

いひそし【言ひ過し】↓強く言う。

すきたちとちきりて↓（真澄の傍注とは沿わないが）異本（文華館本）に「すぎたち」とあることから、「杉立と契りて」と読むのだろうか。杉は古代から神木として神聖視されたほか、櫛として神事に用いられる地域もある。また、伊勢神宮神域内の杉の巨木は、「神宮杉」として知られる。

柳葉日記下

倭 姫 湯 御櫛 髻 挿
 やまあとひめの、ゆづみくしみつらにさし、

さ か 御門
 あかれませおはひてより、しちくゝ代々のみかど

嘗 祭 問 平
 大なめのまつりごととひ、おはせるをなん、たい

らに生し、たちらふはせて、御杖のしろとこ
 代

九月
 しへて、なかつきに、さまものつかさきよると
 こ言

占一本 年 む一本
 とはみ申て、一とせのむかひのとをのひかひの

彼 処 御坐 賀茂 清
 月早く、かしこにおはし、かもの川のきよき
 上 下 追
 かん津瀬中津瀬はさらにて、しもう津せまで

やまあとひめ↓倭姫命（やまとひめのみこと）。垂仁天皇の皇女。伊勢神宮起源譚の主役で、斎宮として天照大神を身に着け、鎮座地を求めて諸国をめぐった末、伊勢の五十鈴川のほとりに大神の社を建てたと伝えられる。

ゆづみくしみつらにさし、あかれませおはひてより↓湯津御櫛みつらに挿し、別れさせおはしてより、斎宮となった皇女などが、伊勢へ出発するために参内して別れを告げる際、天皇みずから斎宮の髪に櫛をさして与えた。この櫛を「別れの御櫛（みぐし）」という。この儀式は九月上旬の吉日を選んで行われた。

大なめのまつり↓大嘗会。天皇が即位の後、初めて行う新嘗の祭。その年に新たに収穫された穀物を、天皇みずから、祖神天照大神をはじめ天地のよろずの神々にさし上げる、一代一度の大礼。

こととひ、おはせるをなん↓異本（文華館本）では「こととひ」と「おはせる」の間に、傍注の「こととひおはしてより」以下の部分がある。こととひ（言問ひ）は、ことばをかける、尋ねるの意。

ひめつみこのいみしき御よせ↓姫御子の立派な後見、縁故の意か。たちらふはせて↓こは別れの儀礼について書かれているため、本来は「たちわづらふはせて」ではなかったか。立ち去りがたく思わずに、または、進むのにとまどうことはしないでの意。

とこしへて↓「常しく・経て」で、長くつづく意か。

なかつき【長月・九月】↓ながつき。陰暦九月の異称。さまものつかさきよるととはみ申て↓「さまものつかさ」とあるが、文脈からいって、もものつかさ（百官≡多くの役人）のことであろう。後半部分は異本（文華館本）を採り、「きよめごととはら申して」（清めごと祓い申しての意）と読む。斎宮が伊勢に発向する儀礼では、輿に乗った斎宮を百官が奉送した。

一とせのむかひのとをのひかひの↓異本（文華館本）を採り、「一とせのむかひの」と読む。この「一とせ」は皇女が斎宮になるとき、潔斎のため野宮（のみや）にこもる一年を指しているか。かしこにおはし↓そこいらつしやり。

かもの川のきよきかん津瀬中津瀬はさらにて、しもう津せまでも↓賀茂川の清らかな上流、中流、さらに下流までも。斎宮は野宮に移るとき、また伊勢神宮に向かうときに、川でみそぎをした。

も、かんづかさのやつくかたくひまで、よはかた
神司 一本 類 弱肩

にゆうとうてかけて、いくしいかめしう玉
木綿 取 繫 齋串

串 唐敷 戦 く
たヲ誤カ

清 きよめ申し、野の宮のかうくしさ、くろきの
きめ申し一本 鉋 工 斑 黒木

柱とて、かうなのたくみ、またらにそきたる、
細 居 弱 立 茅 苦屋

ほそめける、鳥ゐよろほへたて、かやのとまや
細 居 弱 立 茅 苦屋

檜垣あきましうゆひめくらして、もうく
さを誤敷 結 回 諸

いひしろふにも、仏を中子、御ものいみをすら、
云 ま一本 物 忌

いもいかたしきなどいひあらため、またをき
齋 ぬ 片 食 云 改 又

かんづかさ〔神司〕↓神官。宮司。
 やつくかたくひまで↓「やつしがたぐいまで」で、「真似のよう
 な類まで」の意か。

ゆうとうてかけて↓木綿（ゆう）取り掛けて。木綿は木綿襷（ゆう
 だすき）のこと。祝詞の中に「弱肩に太手襷（ふとだすき）取
 り掛けて」という表現がみられる。

いくし〔齋串〕↓神聖な串。櫛、または篠（しの）でつくり、玉
 と幣とを掛けて神前に供えた。玉串。

いかめし〔唐めく〕↓唐風に見える。唐の様式に従っている。
 そよぐ〔戦ぐ〕↓風が吹いたりして木の葉などがそよそよ音を
 たてる。わずかにゆれ動く。

はらひさまひ↓「祓い給ひ」の意。
 野の宮↓伊勢神宮の齋王（齋宮）の潔齋所。皇女または女王が齋
 王となる時、宮城内の初齋院で潔齋した後、城外においてさらに、

伊勢の齋宮に移るまでの一年間、潔齋のためにこもる宮殿。黒木
 の鳥居を設け、柴垣をめぐらし、質素に作る。

かうくしさ〔神しさ〕↓神聖さ、けだかさ。
 かうなのたくみ↓鉋（かんな）の匠。

またらにそきたる↓斑に削ぎたる。
 鳥ゐよろほへたて↓「鳥居を弱々しく立てて」の意か。

かやのとまや檜垣あきましうゆひめくらして↓異本（文華館本）
 の「あさましう」を採る。「茅の苦屋」苦葺きの粗末な小屋。檜
 皮の垣をみすばらしく結いめぐらして」の意。

いひしろふ〔言ひしろふ〕↓語り合う。
 仏を中子↓齋宮での忌詞（いみことば）忌み慎んで言わないこと
 ばの代わりに用いることば）では、仏を中子（なかご）、齋（い
 もい）僧の食事）を片膳（かたしき）という。

をすら↓さえ。
 をきし↓をき（招き）し（師）で祈禱師＝僧の意か。ちなみに「を
 きびと（招き人）」は加持祈祷をする修験者を指す。

經 染紙 訛
しのふみをそめかみ、なまりこ糸、塔をあら

蠶 或 瓦 屋簷

らき、寺をいらかあるはかはらやぶきの屋、

如捨 聖 優婆塞 髪

よすてたるひしりをうはそくなるをかみ

長 優婆夷 はゝゝゝ 先 天皇

なか、うはいなる○おとて、さきのすめらきの

めかんなかいへるなん、ことはり得せためるとて

一本 御御 御沙汰文敷

御代の、御さんたふみに、男なるをはすそき

手弱女 醜女

より、たをやめなるを、しこめきと、ものしけり、

凶目此シコメキトハ如何

ま○身まかれるをなをとともゆへと、ちはや

又にてた字落シカ
い力

ふる神の御代には、いさなみのみこと、火のかみ○御た

見焦而化去し(カンサリマス)

めに、ほとほりなやみて、はかなきしなにつり

ふみをそめかみ↓經典を染紙(といひ)。以降、九丁目裏の中ほどまでずっと、齋宮での忌詞についての説明がつづく。

なまりこ糸↓訛声。なまった音声。

塔をあらき↓齋宮での忌詞。あらきとはノビルなどの古名だが、『皇太神宮儀式帳』の中に、葱の花に形が似ている擬宝珠を葱台(そうだい)とも呼ぶ類ではないかという記述がみえる。

寺をいらかあるはかはらやぶきの屋↓齋宮での忌詞では、寺を瓦葺(かわらぶき)という。

よすてたるひしりを、うはそくなる↓世捨てたる聖を優婆塞(うばそく)なる。齋宮での忌詞では、僧を髪長(かみなが)という。

優婆塞は仏教の在家信者のことだが、ここでは在家信者ではなく、出家した僧のことを指しているか。

うはい↓優婆夷(うばい)。齋宮の忌詞では、尼を女髪長(めかみなが)という。優婆夷は仏教の女性の在家信者のことだが、ここでは在家信者ではなく、出家した尼のことを指しているか。

さきのすめらきの↓異本(文華館本)では「うはいなる(は)」と「さきのすめらきの」の間に、左の傍注とほぼ同じ文言がある。「こ」とはり得せためる」は「道理を理解させ給う」の意か。

御さんたふみ↓御沙汰文。天皇などの貴顕の指示や命令をいう語。はすそき↓髪を切り揃えた尼僧を削尼(そぎあま)と呼ぶことに

かけて、男性(僧)を斜削(はすそき)と呼んだものか。

たをやめ【手弱女】↓か弱い女性。

しこめき↓しこめし(醜) ↓きたなくみにくい。

もす↓言う。

みまかれるをなをとともゆへ↓みまかる(身罷る) ↓死ぬ。齋宮の忌詞で死ぬことを奈保留(なおる)という。

いさなみのみこと、火のかみ○御ために、ほとほりなやみて、はかなきしな↓古事記・上で伊弉冉尊(いざなみのみこと)は火の神・迦具土神(かぐつちのかみ)を生んだ際、火傷して死んだ。

ほととほる【熱る】↓熱を出す。ほてる。ここでは火傷する意味で使われている。

なやむ【悩】↓患う。

はかなきしな↓死にゆくときに。

みゆきませしなん、火のどこゝかねにかちて、とろ

意 云 不知 尊

けにためりしころはへ、いひしらす、たうとみ、

恐 思 奉

をそれみも、おもふたいまつれりけらし、さるに

金 勝 先

こそ、こかねといへるをまされりと、さきの大

伝 輕 う一本

中臣もつたへ侍りけり、病ふにかららかなるかに

重

なやめるをたゆたふといひ、おもりかなるをや

暇

すみといふなん、つかさのいとまある心ばへ、おかし

総 声 歌

かりぬへし、すへてこ糸になくをうたふともの

(不明) 流 血 汗

し、心になくをしほたるゝと、なかるゝちいをあ

澱 打

せと唱へ、よとめるを露となん奏しぬ、うつを

うつりみゆき↓うつる〓ひとが死ぬ。ゆく〓逝く。

火のどこゝかねにかちて、とろけにためりしころはへ↓火床が黄金に勝つて、蕩けどろどろになるような表現。火床は、箱の中に土を塗りかためて作った火入れ。いろりのようなもの。伊弉冉尊は死の床で金山彦(かなやまびこ)〓鉱物の神も生んでいる。「こかね(黄金)」はここから連想されたか。

いひしらす【言ひ知らず】↓(よい意味にも悪い意味にも用いて)言いようもない。格別である。

たうとみ、をそれみも↓尊み、畏みも。あがめて大切にしたり、おそれおおく思つたりしながらの意。「み」は動詞の連用形に付き、その並列によつて、それが交互に繰り返される意を表す。

おもふたいまつれりけらし↓考え申しあげたのだらう。さるにこそ↓そうであるからこそ。

大中臣【おおなかとみ】↓姓氏。本姓は中臣で、七六九年、中臣清麻呂は信任厚く、その功勞によつて、称徳天皇により大中臣を賜つたことにはじまる。神祇の官人で、代々伊勢祭主を世襲した。病ふにからかなるかたになやめるをたゆたふといひ↓病気で軽く患うことを「たゆたう」と言い。

たゆたふ【揺蕩ふ】↓あちこち揺れ漂う。漂つて定まらない。

おもりか【重りか】↓おもそうなさま。

やすみ【休】↓斎宮の忌詞で、病氣をいう。

つかさのいとまある心ばへ↓官人の、のびのびとした自由な発想。おかしかりぬへし↓氣の利いたものにちがいない。

こ糸になくをうたふとものし、心になくをしほたるゝと↓声をあげて泣くことを「歌う」といい、心に泣く(涙を流す)ことを「潮垂る」と(いう)。

しほたる【潮垂る】↓海水に濡れてしずくが垂れる。また雨や露などに濡れてぐつしりとなる。(涙を海水にたとえて)涙を流す。

なかる【流る】↓流れる。

ちい↓血。

よとめる↓澱む。

撫 草 菓
なつる、きいたつをはかるといひ、くさのこのみ

をあらかねとものし、くさひらをはだへのう
菌

をのしゝむら、はるへのけとりのしゝむらについ
肉

なし、みさゝきをもて、はかあるはつかのかりふり
山陵 以 墓 或 塚 う

とゝしき、またつかさある法の師つのはすゑり
又 角

ながとものし、堂をこりたきといへるなん、けに
長 香 焼 実

ぞごまのけふりのふすみくゆらんは、わか神た
護摩 煙 吾

ちの、いなみたまふはんに、しかゝはしめをはり
辞 給 始 終

ながくしう侍れは、しばらはもらし侍りぬ、
長 し 漏 う 一本

またおもふたいまつより、いやたからを、はい
又 思 宝

きいたつをはかるといひ↓語義不詳。「来立つを別るといひ」、もしくは「木断つをば刈るといひ」などが考えられるか。
くさひら【菌】↓きのこ類。獣の肉を指す齋宮の忌詞である。
はだへ↓皮膚。

うをのしゝむら↓魚肉。
はるへのけとりのしゝむら↓異本（文華館本）の「はたへのけとりのしゝむら」を採る。鳥の肉のことか。

みささき【山陵】↓天皇・皇后などの墓所。御陵。
はかあるはつかのかりふり↓語義不詳。ちなみに齋宮の忌詞では墓を壊（つちくれ）という。

つかさある法の師つのはすゑりなかとものし↓役職のある法師を角筈（つのはず）襟長といい。齋宮の忌詞では優婆塞（在家の仏教信者）のことを角筈というが、ここでは出家した法師を角筈としている。角筈は弓または矢の筈を、牛や鹿の角で作ったもの。

こりたき↓香焼（こりたき）。寺の堂のことをいう齋宮の忌詞。
ふすみ↓ふすぶ（燻ぶ）⇨くすぶるが変化したものか。

くゆらん↓くゆる（燻る）⇨炎を上げないで煙だけ出して燃える。けにぞ↓げにぞ。いかにも。本当に。

ぞごまのけふり↓護摩の煙。護摩は、真言密教の修法の一つ。不動明王または愛染明王の前に護摩壇を設け、護摩木を焚いて、息災増益、降伏などを祈るもの。

わか神たちの、いなみたまふはん↓わが神たちの、辞み給ふはん。我が神たちがいやがり給うの意。仏教のように儀礼で香や煙を用いる慣例がなかったため、神道では、香や煙が仏教をイメーজさせるものとしてとらえられることがあった。

しばらはもらし侍りぬ↓異本（文華館本）の「しばし」を採る。「ひとます省いた」の意。
いやたから↓ここでは弥（いや）ではなく礼（いや）を採る。礼宝。礼は敬いの意味を持つ語。

はいたいまつれる↓「拝（はい）奉れる」の意か。拝はおがむこと。頭を下げて敬礼すること。

たいまつれるななん使申、うらへト部のよこみにこり

ためる声こゑして、いついみみやに、今日ばかり

御行 みゆきおはさん、参道布参道 禊禊ら

饋食

ヒツラ 饌饌ハ食名 尊 習

鰯のそなへ、鰯饌のすがた、たふとみならはせ、

丈夫 サイ男 陪従力 何某

朗詠のますらを才のをのこ、へいすうのなに

鈴鈴一本 ん一本 唐 唐

がし、御すゝの名だいめひと、からめけるから

声

服部

笑

を

こゑして、ほとりの女孀のほほゑむも、おかしく

思 漸 膚 寒 雁 鳴

おもほいたり、やゝはたさむう、かりなき

お音信

の一本

残

籬

立

をとつれて、のこの菊も、まかきにあせたつ

うらへ↓ト部氏（うらべし）は朝廷のト（うらない）を担当した氏族名。神祇官に出仕し、亀トや祓に従事した。

にこりためるこゑして↓しわがれておいでになる声がして。

いついみみや↓稜威（いつ）斎宮（いみみや）。稜威はいみ清め

られていること。神聖な力のあること。

みゆきおはさん↓おいでになる。

さんたう↓さんどう（参道）。

はしへて↓はらへ（祓）てか。

饋食【きしよく】↓神仏に供える食物。貴人にすすめる食事。

鰯饌【ひちら】↓唐菓子の一つ。もち米の粉を水でこね、煎餅の

ように平たくして焼いたもの。ひつら。

ならはせ↓ならふ（習）||するのを常とする。

ますらを【丈夫】↓立派な男子。上代には多く官吏を称した。

オのをのこ↓学識のある男性。

へいすう↓べいじゅう（陪従）か。陪従は天皇の行幸などに供と

してつき従うこと。またその人。供奉。

御すゝ↓すずの奏（そう）||平安時代、行幸に際して、先払いの

ために振り鳴らす鈴の下賜を願う奏上のことか。

名だいめひ↓なだいめん（名対面）。行幸供奉の親王・公卿を点

呼し、それぞれに特定の形式で名のらせること。

からめけるからこゑ【唐めける唐声】↓唐風の美しい声。

はとり【執翳】↓即位、朝賀などの大礼の際、天皇が高御座にある

時、翳（は）をさしかざして天皇の顔を覆う役。女孀が勤める。

女孀【によじゅ】↓宮中に仕える下級の女官。堂上の掃除、灯油

のことなど雑用をつとめた。

おかしくおもほいたり↓風情があると思つた。

をとつれて↓おとづる（訪る）||声をたてる。

のこの菊↓のこの菊。菊の節供（陰暦九月九日）すぎまで咲

き残っている菊。

まがき【籬】↓竹や柴などで目を粗く編んだ垣。

あせたつるへる↓色褪せて立っているの意か。

思連 申
ろへるになん、おもひつらぬへしそ、玉くしの

袂 実 汗 一本
たもと、まことにあせになりぬ、きへにのを

名 今日 不限 毎
かせとなつけぬるなん、けふにかきらす、いつも大

嘗(新嘗(にひなめ) 司 冠 烏帽
なめにぬふめにも、つかさ人の、かうふりゑほ

子葛 上 手自 誤テ重ルカ 弄カ
しかつらとなりて、うへにも御てつかから、ろう

給 同(ヲナシ)歟云 夕顔
したまふ、をほじ草木といへと、ゆふかほの

宿 結 董
はかなきやとにちきりをむすび、野辺のす

方 退 咲
みれの、かゝらぬかたにしそき、さきたるには、

趣 違 対 屋 左 右
おもむきたかひぬかし、たいのやひたりみきい

垣 異 様 結 う
りの櫓かき、ことやうにむすびてうじ、つちさへ

おもひつらぬ(思連) ↓いろいろなことを次から次へと考える。
ぬへし↓ぬべし。…てしまふだろう。きつと…にちがいない。

玉くし【玉串】 ↓神道の行事作法として用いられる献供物の一種
で、榊の枝などに、絹、麻、紙などを付ける。

まことにあせになりぬ ↓「汗になりぬ」の「汗」と、二行前の「ま
かきにあせたつ」の「榎せ」を照応させているか。

きへにのをかせ ↓異本(文華館本)の「きつにの」を採り、「き
つにのをかせ」と読む。キツネノオガセ(狐尾榎)のこと。キツ
ネノオガセは植物のヒカゲノカズラの異名。ヒカゲノカズラにつ
いては、47ページ語釈「日かけのかつら」の項参照のこと。

つかさ人【官人】 ↓朝廷につかえている役人。
かつら ↓かずら(鬘) || 髪飾りの一種。平安時代は主に宮廷の神
事や節会などの際に男性は冠に、女性は髪に鬘をつけた。

うへ【上】 ↓天皇。主上。また、上皇。
てつから【手つから】 ↓みずから。
ろうしたまふ ↓「お手を煩わせ給う」の意か。

をほじ草木といへと、ゆふかほのはかなきやとにちきりをむすび
↓同じ草木といへと、夕顔のはかなき宿にちきりを結び。『源氏
物語』の「夕顔」の巻を連想させる。本書が真実、大中臣能宣の
作とすると、『源氏物語』の成立年代はそれより後のはずだが、
後世の偽作だとすると、『源氏物語』の影響を受けていることも
考えられる。

かゝらぬかたにしそき ↓異本(文華館本)の「たかからぬ」を採
る。「高からぬ方に退き」の意か。
おもむきたかひぬかし ↓趣が違っているだろう。

たいのや【対屋】 ↓平安時代、寝殿造りの建築で、寝殿の左右や
背後につくった別棟の建物。
櫓かき【櫓垣】 ↓櫓の薄板を網代のように編んだ垣。昔、築地な
どよりも簡便な家の外構えとしたもの。

ことやうにむすびてうじ ↓異様に結び調じ。風変りに結びとこの
えて。
つちさへかへみそなはせし ↓(野宮を設ける)場所さえ変えてこ
覧になるの意か。野宮は当初、天皇の代がかわることに、新たに
別の場所に設けられた。

か な落シカ 彼 交 何某
かへみそ○はせしに、かのかた野の、なにかしの神し

ハ落タルカ 榎垣 芦垣 独 此 ち一本
むす○ぬひかきあしかきとなんひとりこの、大津

の皇子、日域有神封とかつゝりしおはいさ 綴 諫

誤テ重ル歟 めるめるも、こゝもとの、あさましきかきり た一本

なるべしかは、まところほひの御ふすま、あ 真床 覆 衾 天

高皇産霊ノ尊乃用テ真牀覆衾ヲ一畧テ二皇孫天津彦根火瓊瓊杵根尊ニ
まのひらかや、あひしはとこぬのまたか木ならば、

不云 さらにいはず、陪從桜人のをみのかけおひ か一本

組系 まさきのくみいとなん、かむのみよいかめしう、ま 神 御代 目前

畏 のあたりなり、かしこまりいみしう申侍りて、

かのかた野の、なにかしの神しむすばぬ↓大阪府枚方・交野市付近の台地。交野は平安時代以降、皇室の狩獵地で、歌枕でもあった。さらに交野を流れる天野川には七夕伝説がある。「なにかしの神しむすばぬ」はこの伝説を指すか。

大津の皇子↓天武天皇の第三皇子。文武にすぐれ、人々の信望を集めたが、叛逆罪に問われて刑死した。古今和歌集の真名序（漢文で書いた序文）には、大津皇子が我が国で初めて詩賦（漢詩）を作ったとある。

日域【じちいき】↓日が照らす域。転じて、天下。日本の異称。神封【じんぽう】↓神社の所領である封戸（ふこ）。しんぶ。封戸とは律令制で貴族・社寺に俸禄として支給した戸。神戸（かんべ）。

つゝりしおはいさめるめるも↓「綴りおわし給えるも」の意か。こゝもと【此処許】↓この辺。こちら。わたくしの方。あさましきかきりなるべしかは↓「驚くばかりだろうか。（いや、そうではない。）」の意か。

まところほひの御ふすま↓真床追衾（まところほうすま）。天孫降臨の時、高皇産霊（たかみむすひ）尊が瓊々杵尊を覆つて降ろした衾。大嘗祭の祭儀で天皇が臥す衾とも関連があるとされる。あまのひらか【天平盆】↓祭器具の一つ。神饌を盛る皿または土器（かわらけ）という。

とこぬ【常井】↓つぎることなく水をたたえている井。またか木↓異本の「まさかき（真櫛）」を採る。さらにいはず↓あらためていうまでもない。

桜人【さくらびと】↓桜の花を見る人。花見をして歩く人。をみのかけおひ【小忌の掛帯】↓平安以降、物忌みのしるしに用いた赤い絹の帯。胸にかけ肩を越えて背後で結ぶ。社寺参詣の女子や巫女が用いた。

まさきのくみいと↓まさきのかずら（真拆の葛）の組系。真拆の葛は、古代、つるを割いて鬘とし、神事に用いた。かむのみよいかめしう、まのあたりなり↓神の御代がおごそかに目の前にある。

かしこまりいみしう申侍りて↓はなはだ畏れ多くも申し上げて。

このふし／＼をしるし、みそなはせ事、かけ

畏 畏

まくもかしこきかしこまりなるへきをや、

醒醐朱雀村上冷泉円融花山一條マデノ人

大中臣のよしのふ内侍の宣によりて

奏し侍りぬ

祭主神祇大副正四位下大中臣能宣

柳葉日記 終

正暦三年八月九日卒七十一
自卒年至明和九年凡七百八十

一年

右一卷自卜部兼有朝臣伝写之畢

応永十年三月十日

勤修寺寺従二位

権大納言藤原朝臣経豊

此歟

大中臣能宣あらはすところ寸柳葉

者歟

日記有青蓮之門主、是を拝借し奉りて

自歟

しはしはかりに、書写の功を終侍りぬ

ふし／＼【節々】↓種々いろいろの事柄。
かけまくもかしこき【懸けまくも異き】↓口に出して言うのも畏れ多い。

かしこまり【畏まり】↓畏れ多いこと。お礼。言いわけ。
なるべきをや↓であるにちがいないことよ。

醒醐朱雀村上冷泉円融花山一條↓大中臣能宣が生きた時代を治めた歴代の天皇の名前を列挙している。

大中臣能宣【おおなかとみのよしのぶ】↓(九二一〜九九一)平安中期の歌人。梨壺の五人および三十八歌仙の一人。伊勢大神宮

祭主。『後撰和歌集』を撰集。なお、国文学者、藤岡作太郎著『国文学全史平安朝篇』（東京開成館・明治三十八年刊）の大中臣能

宣の項には「また柳葉日記と称するものあり。神宮の伊勢に鎮座ましまししことおよびその忌詞など記し、奥書に「大中臣能宣

内侍宣によりて奏す」とあれど、深く信すべからず。蓋し後人の偽作なり」とある。

内侍の宣【ないしのせん】↓平安時代、内侍が勅命を奉じて宣した文書。

祭主【さいしゅ】↓古代、伊勢神宮の神職の長。大中臣氏の世襲とする。

神祇【じんぎ】↓令制で、朝廷の祭祀を執行し、大嘗祭などの神事を取り扱い、官社の祝部・神戸を監督する官司。

卜部兼有【うらべかねあり】↓四位。神祇。兵部大輔。卜部兼豊（吉田家十三代・一三〇五〜一三七七）の孫。

勤修寺【かじゅうじ】↓京都市山科区にある真言宗山科派の大本山。皇室や藤原氏と関係が深い。多数の古文書を所蔵。

権大納言藤原朝臣経豊↓勤修寺経豊（？〜一四一一）。藤原北家勤修寺流の支流の公家。

青蓮↓青蓮院（しょうれんいん）。京都市東山区にある天台宗の寺。多くの皇族が門主をつとめた。貴重な史料を伝存する。

しはしはかりに↓暫しばかりに。少しの間ほどに。

功【こう】↓努力してなしたげた仕事。

あなかしこいみじきはかせふみなるべし

右中将藤原行季朝臣

十二ウ
(貼紙：
署名を
除く)

此記伝写数回を経て、脱闕重複少からず、読かたき文ありと見ゆ
この頃、伊勢度会光隆神主へおくりて、御文庫に善本あらんか校合し
たきと云へは、搜索をしに、同題号の冊子ありて、二條良基公の御作
と記し、春日の事につき、衆徒・禁裏へ嗽訴神輿を振るに相叶、南都へ
御帰轡之鹵簿などのことを書載て、文章是と柄鑿也、又水戸黄門公之
御撰扶桑拾要の中にも、右之書全篇出て、良基公御作のよし、
同名異籍と見へたり、此記は、体裁頗古雅なるに、類書もあらは、
訂正したきものにこそなほ見ん、諸君校考あらかし、

白井 秀超

あなかしこ↓(尊いものに対して) ああおそれ多いことよ。もつ
たいないことよ。

いみじきはかせふみ↓学識のある方のすばらしい文書。

右中将藤原行季朝臣↓世尊寺行季(せそんじゆきすえ・一四七六
～一五三二) 戦国時代の公卿・書家。世尊寺流は平安時代の藤原
行成を始祖とする和様書道の一派。十七代の行季が没して断絶す
るまでの間、最も権威ある書法として宮廷や貴族などに用いら
れた。

脱闕重複↓脱字や文字の重複。

伊勢度会光隆神主↓度会(わたらい) 光隆(一一七二～
一一九二) 伊勢の宮後で生まれ、幼時より和漢の学を修め、詩文
に長じ、神典に通じ、外宮大内人、宮崎文庫講師を務める。宮崎
文庫は伊勢神宮外宮祠官度会氏の文庫。明治末年に神宮文庫に合
併。

善本【ぜんぼん】↓保存状態がよく、本文の系統が原本に近い本。
校合【きようごう】↓写本、刊本などの文字その他の記載事項の
相違を、他の本と照らし合わせなどして記録すること、また、訂
正したり異同を書き記したりすること。

同題号の冊子ありて↓南北朝時代の公卿・歌人二条良基(一一三二
～一一三八)の日記で、貞治三年、興福寺衆徒が坂井郡河口荘
に対する高経の押領停止を訴えて、春日大社の神木を入洛させた
出来事について書かれている。本資料とはまったく別の本である。
扶桑拾葉集(ふそうしゅうようしゅう)↓徳川光圀編の詞文集で、
平安時代から江戸初期までの各種古典三百編余を年代順に集録し
ている)の中には二条良基作の櫛葉日記が収められている。

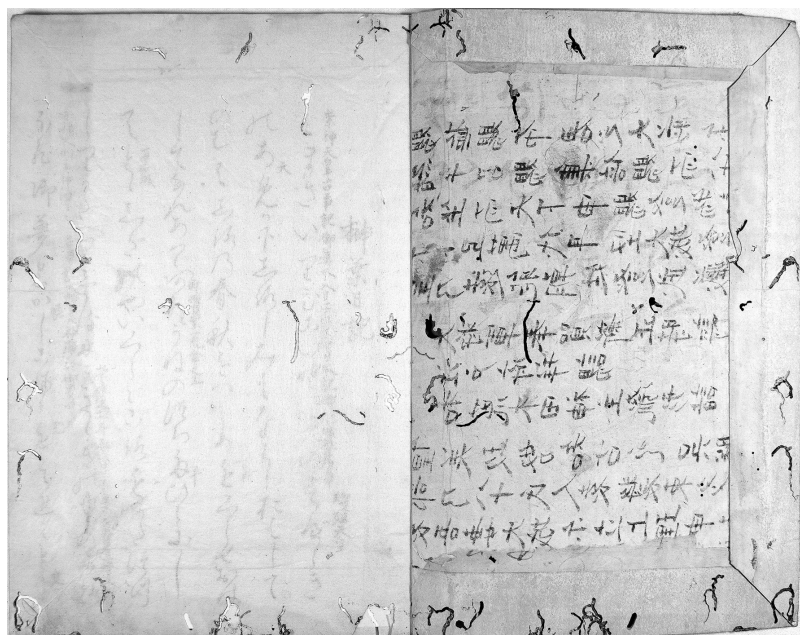
柄鑿【ゼイサク】↓ほぞとほぞを受ける丸い穴。転じて、物事が
たがいにくいちがつていて合わないことの外観。

此記は、体裁頗古雅なるに↓この日記は外観がたいそう古風で
優雅なので、類似の書物があれば訂正したいものだからこそ、さ
らに見ていこう。諸君、校考を願う(校考は異本を比較して文字
などの異同を調べること)。

白井秀超手沢本『榊葉日記』
 (名古屋市・前田栄作氏所蔵)

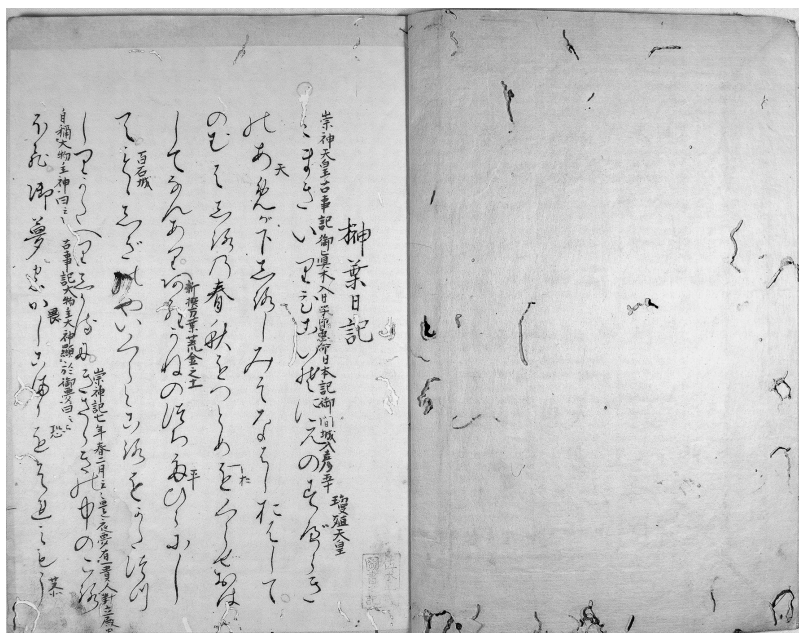


表紙

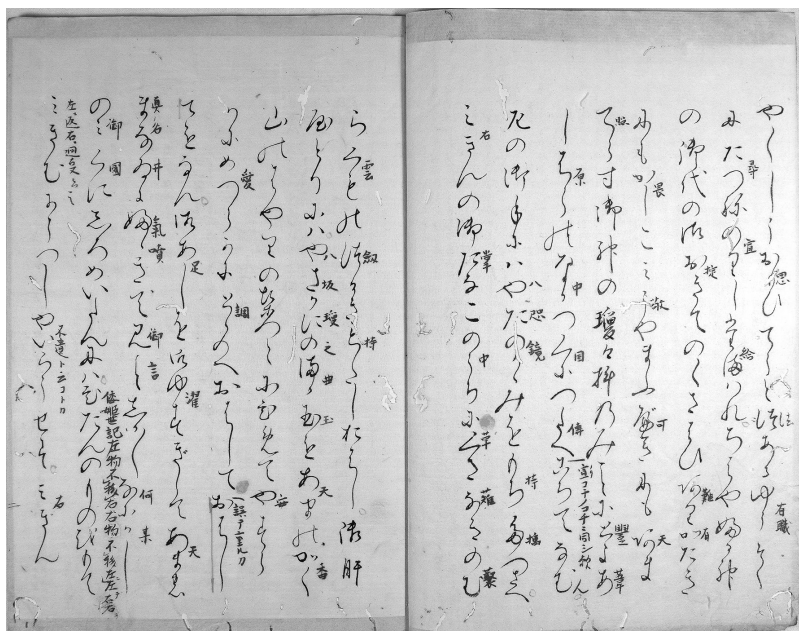


表紙反故紙が見える

表紙見返しハガレ



一才(第二丁表を略記、以下同)



二才

二あふれゆしころりくらに^{御田}に^何ゆ^等
 ころり^{あふ}なり^りに^いれ^いる^を
 け^くそ^なに^てひ^ひま^はけ^け金^のぬ^ぬ
 の^のゆ^ゆな^なに^にえ^えみ^みれ^れわ^わを^をと^と
 寸^寸即^即ち^ちつ^つり^りに^につ^つり^りん^んぢ^ぢう^うう^う
 う^うも^もや^やあ^あも^もれ^れ所^所ある^るん^んぢ^ぢう^う
 一^一は^はて^てこ^こり^りう^うう^うう^うま^まめ^め一^一は
 え^えや^やう^うに^にて^てや^やへ^へむ^むり^り校^校の^のま^まし^し

[illegible]

五才

愛をつねにの^難び^歟にあらぬふとなく
 のせしものちひされしをわたり
 一^ハの^マま^マしてゐる^{左端}に
 こふがそとあり^三種^種に^注分^注け^注ら^注る^注
 の^御本^本を^同一^一に^御殿^殿に^共の^共り
 あ^あら^ある^あを^あ先^先に^命に^命の^命り
 なる^{なる}の^のす^すま^まに^試み^試て^てさ^さし^し
 時の^{時の}う^うじ^じに^にさ^さし^して^てさ^さし^しる^る

と八百よりつゝのほとのひかりを
いふに足^はあらずにや一うらな
乃ちやあのけしむき木^木
ゆてあにさるものすくらを
いふにあはれもかきあへぬ
よの月^月はつのおまをばか
思ふことくはれおのしの
これにこころたづねわたり

六才

六
ウ

七才

セウ

八才

八ウ

九才

九ウ

十才

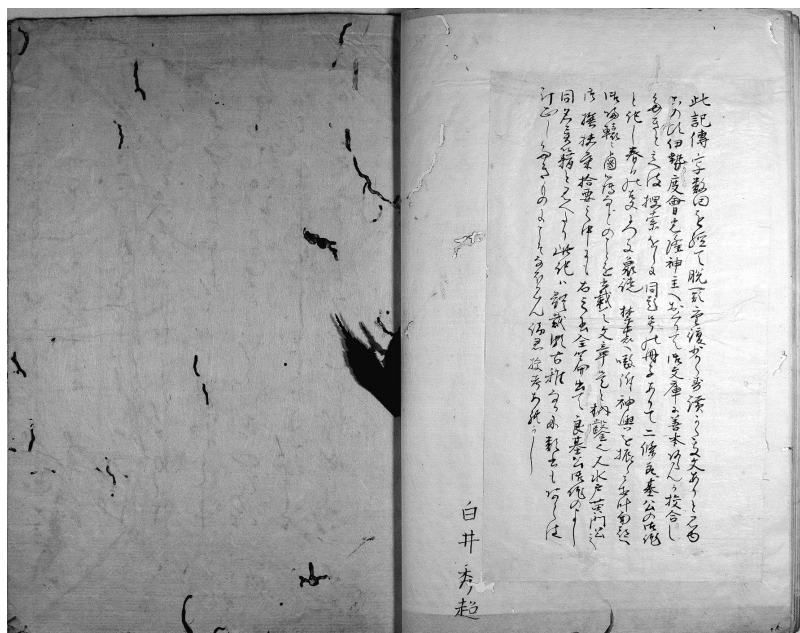
十ウ

十一才

十一
ウ

十二才

裏表紙見返し



白井秀起

十二ウ



裏表紙

此記傳字數同と經て脱氣字渡りて書溪うゝ文ありとる也
 乃以伊勢度會を陸神主へおろして此文庫の善本なりと校合し
 多きと之は撰索なり又同題なり母よりて二條良基公の此記
 と化し春のたよりと又象鏡 林表の歌所神興と振るゝ其旨愈々
 此記の縁由なるものゝとを去載し文章を乞と抄録し又水戸葉門公
 此撰抄要し中より右と云全篇命出て良基公此記の
 同名多き稿とくく此記の體裁以古雅なり其教古しなりは
 訂正し多きものより多しとん編纂校考り終り

白井秀起

大館市指定文化財「真崎文庫」における真澄自筆資料

松山 修

大館市立栗盛記念図書館（平成二十九年〈二〇一七〉四月一日に大館市立中央図書館から改称）に、秋田県指定文化財である「菅江真澄著作」（指定四十六点）があることは、よく知られているところである。これらは、真崎文庫に含まれている。

真崎文庫とは、明治から大正にかけての郷土史家・真崎勇助（一八四一〜一九一七）が収集した資料群で、真崎勇助の七回忌がおこなわれた大正十二年（一九二三）、大館の栗盛家が購入したものである。その後、学生の育成事業をおこなう栗盛教育団に寄贈されたが、昭和二十六年（一九五一）、栗盛教育団の解散を機に、教育団事務所の土地・建物と真崎文庫を含む蔵書類等が大館市に寄贈されたのである。大館市では、昭和二十八年から大館市立栗盛記念図書館の名称としていた。

大館市は図書館の新築を機に、昭和五十八年（一九八三）に大館市立中央図書館に名称を変えていたため、冒頭に述べた改称は、三十四年ぶりに旧称に戻ったことになる。

真崎勇助にとつて、郷土史研究の手始めが石器・土器の収集にあったことから、真崎文庫には、約六、五〇〇点の石器土器類（考古資料）、それに二、一二七点の文献資料がある。考古資料と文献資料を合わせたものが真崎文庫を構成している。

このうち、四十六点が昭和三十三年に「菅江真澄著作」として県指定文化財となった。真澄の著作内容を重んじる観点から、写本であることが明らかな随筆《筆のまにまに》もこれに含まれている。

なお、県指定文化財「菅江真澄著作」には、『真崎勇助翁コレクシヨン』（平成五年、大館市教育委員会）でM―5（請求記号）で整理される資料（冊子）の他に、M―一四五七―一の「梅の花湯の記（額）」（額装）がある。

一方、その他の文献資料については、秋田県に関する古文書類が多く、秋田県の郷土史研究にとつて貴重な資料群となっていることなどから、平成十七年に「真崎文庫」（指定二〇八一点）として大館市指定文化財となった。

そのため、広義の真崎文庫は、秋田県指定文化財「菅江真

澄著作」、大館市指定文化財「真崎文庫」（以上が文献資料）、それに文化財非指定の考古資料から構成されていることになる。本稿では、大館市指定文化財である二、〇八一点の資料を指す場合、「真崎文庫」とカギ括弧で括弧することにする。

これまで、菅江真澄資料センターでは、『真澄研究』第七号（平成十五年三月）で、「真崎文庫」にある『乙随筆』（M―一二八）を、真澄の自筆資料として翻刻紹介した。

また、かつて柴田次雄氏が、岡見知愛の著作とされてきた『六郡郡邑記』と近藤甫寛編著『久保田領郡邑記』の関係性を明らかにする中で、「六郡郡邑記」が真澄の命名であること、原本である『六郡郡邑記』（M―一九七）の中身が真澄の筆跡ではないものの、表紙や目次が真澄の自筆であることを論証している（無明舎出版『校訂解題久保田領郡邑記』、初出は『出羽路』第二二七号―第二二九号）。

右掲の資料二点（『乙随筆』と『六郡郡邑記』）については、当センターで何度か展示を通して紹介してきた。それに加え、それ以外の数点についても真澄の自筆が含まれていることを展示で紹介するなどしてきた。

平成二十八年度と平成二十九年度、それぞれ二日間の展示ではあったが、秋田県立博物館の出張展として、大館市立栗盛記念図書館二階閲覧室において、特に「真崎文庫」を扱う

展示をおこなった。

展示の準備段階で、「真崎文庫」の悉皆調査（パソコン画面上でのデータ閲覧）をおこなう機会を得た。その中で、新たに真澄の自筆資料を見出すことができた。

本稿は、大館市指定文化財「真崎文庫」の中から、真澄の自筆部分を紹介するものである。煩雑になるため、すでに翻刻となっているものについてはここでは翻刻をおこなわない。

一方で、最後に紹介する『黒甜瑣語稿（一部）』（M―一七二三）の内容については、表紙が真澄の自筆であるものの、中身の草稿は人見蕉雨（秋田の文人、一七六一―一八〇四）の自筆である。これまで翻刻されることがなかった資料であり、真澄が深い関心を寄せた寺内（秋田市）に関連する蕉雨の草稿を真澄自身が所持していたことになることから、ここに翻刻紹介することにしたい。

それぞれの詳細については、資料の解題部分に明示する。

本稿で紹介する資料は全部で九点（一―九）である。悉皆調査とは言え見過ごしている部分もあるだろうし、翻刻にしても十分とは言えないが、真澄の学習環境や読書環境を考える上では、自筆資料はもちろんのこと、真澄の手沢本（書き入れなど）があり、使用したことが認められる書物）を把握し

ておくことは大事なことを考える。

本稿が今後の真澄研究の一助となり、真澄の生きた姿に少しでも近づくことができれば幸いである。

以下、翻刻と解題にかかわり、共通する事柄を示す。

凡例

○【】内に真澄の自筆部分がある丁数や箇所を記した。

○「」内は割註を示す。

○判読不能の文字を□で示した。

○合字は、こと、コト、トモとして表した。

○文中あるいは歌において、解釈の上、適宜濁点を補った。

○資料の実際（写真）は、本稿末に一〇九の順で示す。ただし、頁の制約上、一部分となる資料もある。

○法量は、縦^{センチ}×横^{センチ}の算用数字で表す。

○丁数のうち、白紙がある場合は特記する。丁数は、算用数字で示す。

○一〇九の資料における個別の凡例は、解題部分に示す。

（秋田県立博物館主任学芸主事）

一、群書類従（M—二八）

「群書類従」は、盲目の学者として知られる塙保己一^{はなわほきいち}が、古代から江戸時代初期までになった史書や文学作品などを

編纂した一大叢書である。存命中に版行された正編は、一、二七三種六六六冊に上る。また、保己一が計画し、没後に弟子たちが引き継いだ「続群書類従」は、二、一〇三種一、一八五冊となった。本資料は正編巻第三百三十六の版本で、「玉造小町子壮衰書一首并序」「新猿楽記^{しんえんがき}」を内容とする。

第一丁右上に真澄所用印（生寶（宝）示吉「生寶久吉」「生寛久吉」などの読み方がある）が捺されていることに加え、表紙に書かれている文字が真澄の自筆であると判断できることから、真澄の手沢本であったことがわかる。

版本の内容は、『群書類従』第九輯（続群書類従完成会、昭和三年）で活字になっている。

法量／26・4×17・9

丁数／25丁（白紙1丁を含む）

【表紙】

羣書類従卷第百卅六

文筆部十五

玉造小町子壮衰書一首并序

新猿楽記

合冊

二、雄平仙河秋山補陀洛巡拝古跡記（M—一二二）

本資料は、一般に『秋田六郡三十三観音巡礼記』として知られる書冊である。同書には、秋田領三十三箇所^{ごえい}の霊場と御詠歌がある。本資料の内題に、「羽州」雄勝平鹿仙北 秋田川辺山本「六郡巡礼記 井名所古跡縁起トモニ」とあることから、『秋田六郡三十三観音巡礼記』の類書であることが知られる。

同書は『新秋田叢書』第三卷（以下、新秋田叢書本）で翻刻されているが、同解題では底本を明示していない。新秋田叢書本を本資料と照合すると、本資料の内容は「一本に」として翻刻されているものにほぼ該当する。よって、本資料は、新秋田叢書本の校合本として使われた資料となる。

表紙左上にある題簽、内題部分にある添書、中にある天註に真澄の文字が認められる。天註部分はほとんどが朱字で書かれている。内題を含めた本文は他筆であるが、右のように真澄の自筆部分があることから、本資料が真澄の手沢本であったことがわかる。

天註にある歌は、内題添書にあるように、『後太平記』六巻にある「備後国浄土寺」続観世音経偈三十三首之和歌」の写しである。繰り返しになるが、和歌を朱字で写したのが真澄である。

本資料には、秋田領の六つの郡にある三十三観音霊場が他

筆で書かれている。番号の上には○印、番号の下に郡名がある。その○印が郡ごとに色分けされている。具体的には、雄勝郡・秋田郡が黄色、平鹿郡・河辺郡・山本郡が藍色（三十番の山本郡のみ灰色に見える）、仙北郡が赤色で、隣り合った郡の○印が同色にならないように工夫されている。確証はないが、これは手沢本としていた真澄によるものではないかと考える。

天註にある文字が真澄によるものだと同述したが、本文中のかなりの部分に、誤字や脱字を正したり、カタカナに漢字を当てたり、●や▲などの記号や傍線を附したりしている。これらが朱字であるため、これも真澄によるものと考えられる。しかしながら、煩雑を極めるため、本稿では特に翻刻はおこなわない。

法量／23・1×16・4

丁数／46丁（白紙1丁を含む）

【表紙題簽】

雄平仙河秋山補陀洛巡拜古跡記

【内題添書（墨字）】

後太平記六巻に在る備後国浄土寺続観世音経偈三十三首之和歌あり。これをも此縁起に加ふ。見る人あやしみ給ひぞ。

【第八丁ウラ（以下、断りのない限りは朱字）】

蕨岡和尚本覺寺十五世也。安養淨心大徳は小西小西^{（マ）}匡之より七代以前の人也。春淨庵開基也。淨心は愛娘の春智童女をさき立しにより発心し剃髪す。

【一番天註（以下、丁数ではなく、三十三観音の順番）】

世尊妙相具 道謙法師

たぐひなく妙なるのりの姿こそうき世を照らすしるべなりけれ

【二番天註】

弘誓深如海 左兵衛督源尊氏

わたつ海ふかき誓のあまねさをたのみをかくるのりの船かな

【三番天註】

侍多千億仏 同

つかへこしそのゆゑにこそ今もかく信の道にさはらざりけり

【四番天註】

発大清淨観 同

心だにもによらずば蓮葉のにごりにかけぬ類^{（タ）}ひなるべし

【五番天註】

聞名及見身 藤原高範^{（ノ）}

名を聞も見るも御法の燈火を暗き闇路^{（シ）}の證にやせん

【六番天註】

心念不空過 道謙法師

迷ふべき後をおもへば此法を心に捨るときの間もなし

【七番天註】

能滅諸有苦 源頼貞

我とする心のなくば人の身に愁^{（ウ）}ひ歎きもあらじとぞ思ふ

【八番天註】

火坑變成池 源直義朝臣^{（タ）}

定れる姿の物になき故にやすくも火をや水となすらむ

【九番天註】

波浪不能没 同

障なき心に応ず誓にや浪に入りても溺れざるらん

【十番天註】

如日虚空住 源頼貞

中天^{（ナ）}に行とも見えず閑にて仰げば高き日の光かな

【十一番天註】

釈然得解脱 源尊氏卿

分わぶるあしの障も今はなし沖津舟をも風に任せて

【十二番天註】

還著於本人 同

よし思へ科^{（カ）}なき吾はなけれども恨は人の身にやかへらむ

【十三番天註】

時悉不敢害 桂芳法師

時雨つる雲をば風の吹すてて長閑に月の影ぞさやけき

【十四番天註】

観音妙智力 同

其際もあらじとぞ思ふ大悲者の人をはごくむふかき心は

【十五番天註】

能救世間苦 源直義

身を捨て人を救は世に主も仏の道にかはりやはせむ

【十六番天註】

無刹不現身真観清浄観 尊氏卿

いろ／＼の千草の花にしたがひてむすびかへぬる野辺の夕露

濁るべき流もさらになかりけり心の水の澄もまさらば

【十七番天註】

広大智恵観 道謙法師

月も日も出入る景はあるものを心の通ふ道は際なき

【十七番天註（貼紙、翻刻二行目から墨字）】

永慶軍記八卷ノ廿二卷

九戸左近将^{マツ}鑒政実起二一揆一事といふくだりに、南部の味方に参りけり。先岩手志和郡には惟子豊前守厨川兵部少輔同仁右工門尉云々と見えたり。

【十八番天註】

常願常瞻仰無垢清浄光 源直義

忘ると思ひ出すや阻^{ヘダテ}なき一度法に入りし後より

障なき心の月は長きよの闇^ミをもしらず独りすむ也

【十九番天註】

恵日破諸闇 道謙法師

雲晴るあまつ空より出る日の照しのこせる海山もなし

【二十番天註】

能伏災風火 源頼貞

燃る火も草やき捨しその後は春風吹て亦も跡なし

【二十一番天註】

普明照世間 藤原高範

おしなべて照らさぬ里やなかるらんひとりさやけき秋の夜の

月

【二十二番天註】

慈意妙大雲 同

おのづからいたらぬ空もなかりけり風にしたがふ夜半のむらくも

【二十三番天註】

澍甘露法雨 源頼貞

一度も淋^ツげば四方の草木までわか葉さしそふ春雨の色

【二十四番天註】

衆怨悉退散 同

元さらに生れずしなず身としらば命の果もをしまれぬ哉

【二十五番天註】

是故須常念 同

こゝろざし吾身に在りと知りぬれば忘るゝ事は一ときもなし

【二十六番天註】

念々勿生疑 尊氏卿

誓ひをや深くたのまむ疑はぬ心を法のまこととはして

【二十七番天註】

能為作依怙 源直義

何事も叶ふ誓ひを頼むより身には愁^{ウツラヒ}も煩^{ワザラヒ}もなし

【二十八番天註】

具一切功德 桂芳法師

様々の御法の姿多ければ筭^カへ尽さむことわりもなし

【二十九番天註】

慈眼視衆生 源直義

重^{オモシ}ずる身を忘るればもろ人を憐むのみや思ひなるらむ

【三十番天註】

福聚海無量 源頼貞

拾ひ置く数こそしらねいせの海の清き渚に玉を集て

【三十一番天註】

是故応頂礼 桂芳法師

余所に見る色香はあらぬあやにくに折てぞかざす花の一枝

建武三年五月五日

厳島大明神へ奉納の和歌なるよし

三、書画帳（M—1411）

秋田俳壇で四世虫二房を名乗った土肥^{どい}渭^い虹^{こう}（秋窓）が、芭

蕉翁の作風を継承すべく、句・歌・画を集めたものである。

表紙と裏表紙のそれぞれの見返しに、後人の筆で、作者の特

定がなされている。そのうち表紙裏の貼紙に、「真澄、臺

三河国菅井真澄^{マサ}」とある。

菅井真澄の歌と句であるが、「臺（台）」の署名と花押の組

み合わせが珍しい。

法量／22・0×15・1

丁数／39丁

【第二十三丁表】

竹間花といふことを 真澄

くれたけのしげみがくれに咲花も見えて葉分の風にほふ也

【第二十三丁ウラ】

梅が香や光輝に風の色 臺（花押）

四、六郡郡邑記（M—九七一）

本稿の初めにも述べたように、『六郡郡邑記』の成立については、柴田次雄氏によって詳細な考察がなされている（無明舎出版『校訂解題久保田領郡邑記』）。

その論では、現在『六郡郡邑記』と呼ばれている書冊は、境目奉行となった岡見知愛が職務上の必要から「御代官帳」を抜き書きしたもので、そこに「六郡郡邑記」と名付けて手沢本としたのが真澄であったとの見解が示されている。

本資料は、地誌編纂時、真澄が実際に持ち歩いていた手沢本で、「六郡郡邑記」の表題を付け、また目次を書いたのが真澄である。地誌編纂時の巡村調査で、調査済みの村々には朱字の●印が付けられている。

この資料については、筈川栄助が持っており、近々真崎勇助が譲ってもらうことになっていると、石井忠行著『伊頭園茶話』巻二十九（『新秋田叢書』第十一巻415頁）が伝えている。

本資料では、表紙に幾層にも紙が貼り重ねられ、また、いたるところに記号や書き込みの朱字が見られるなど、真澄が

いかに使い込んでいたかがわかる。特に朱字の書き込みや記号について、詳細に検討することによって地誌の成立過程が解き明かされる可能性を秘めた資料と言える。本稿は、表紙と目次のほか、貼紙のみの翻刻とする。

法量／24・7×18・0

丁数／119丁

【表紙】

六郡郡邑記 青龍堂撰

【第一丁表・ウラ（目次にあたる）】

秋田郡「率浦莊 檜山莊 大清水莊 南北比内莊」

山本郡

河辺郡

仙北郡「面日莊 土川莊 千谷莊 駒形莊 淀川莊 土出莊

北浦莊」

平鹿郡

△是ハ駅路ノシルシ

1 是は大村^{オヤム} 支郷 今亡所ノシルシ也

雄勝郡 小野莊

【各丁】

(※記号や書き込みに見える朱字は、すべて真澄による。)

【第四丁ウラ貼紙、雄勝郡シネ畑村】
新エ門畑也

【第四丁ウラ貼紙、雄勝郡岩野目村】
岩野目沢

【第八丁表貼紙、雄勝郡戸波村】
永慶軍記卅三慶長五年仙北吉田合戦のくだり
横手の旗本戸波平右エ門

【第四十一丁ウラ貼紙、仙北郡南檜岡村】
小豆沢村

元沢村

【第四十九丁表貼紙、仙北郡六郷高野村】
野尻町 下畑中 二坂村

町内 栗谷川橋

【第五十三丁ウラ貼紙、仙北郡安本村】
照井治部之介

平鹿郡山内土淵ノ
根子村照井六之丈

万治年中焼失せり
其後小筑前を改めて雅楽之丈といふ

□□□□

【第六十七丁表貼紙、仙北郡角館町】

成重此かぬち角館に住たり。相州綱広が末にて元禄年中秋田郡にうつり鉄包町に住り。享保の頃まで住たりしといへり。
俗名六兵衛と云。

【第八十二丁ウラ貼紙、秋田郡小竹花村】
街道海老沢 三百石地

【第八十三丁表、秋田郡保野子村】
中村 上北川

【第一〇八丁表貼紙、山本郡大口村】
宋困第ノ勢至菩薩祠

宗員やしき勢至菩薩祠ませり

【最終丁表】
平鹿郡八沢木村ノ枝郷 善知鳥蓋村

河辺郡平尾鳥村ノ枝郷 善知鳥村

五、芳園拾遺^{ほうえんしゆゐ}(一)(M—九—二)

『芳園拾遺』は、真崎勇助が近世秋田の文人の自筆資料を綴じ合わせたもので、全七冊からなる。その一冊目には、真澄自筆である「あきたのものがたり」「くずばなくずのうを」(いずれも随筆《筆のまにまに》第一巻所収)の草稿一丁、

「菅大臣ノ像」(《しののはぐさ》所収)の草稿半丁が綴じ合わされている。特に、《筆のまにまに》第一巻は自筆本が現存しないだけに貴重な資料である。また、現在伝わる浄書文との異同も興味深い。

分量／24・7×17・2

丁数／55丁

凡例

○墨字及び朱字による訂正は、旁註のへゝ内に示す。

【第九項…「秋田物語残編 菅江真澄」、表ウラ一丁】

○阿伊太物語

いにしへより鰐田鮑田秋田な^シど見えたり。倭訓栞あいだの件に出羽のくに秋田をあいだといふは韻通ずるなり。日本紀に鰐田に作る。和名鈔に鰐をあぎとよめり。美作の郡名英多は音也○秋田城介は出羽ノ介にて秋田城を守る也。姓の城も是より出といふ云々」と見えたり。秋田は人の名にも見えたり。氏にも多し。竹取物語に名をばさる紀ノ秋田を呼^シで付^ケさす。あきた、なよたけのかぐやひめとつけつ云々」と見えたり。著聞集九巻に、強盗人たりけるに、貞綱は酒に酔て白拍子玉寿と合宿したりけり。おもひもよらぬ処寝処にうち入たりければ、貞綱太刀をめきて打はらひ、玉寿を引立て後苑

へしりぞぎ、檜垣より隣へこして我身もともに逃にけり。其事世に聞へて、強盗に逃たるわろしな^シどさたしけるを、貞綱かへり聞て、今より後なりとも強盗にあひて命うしなうまじき。幾度も君の御大事にこそ命はをしむまじけれ、といひけるにあはせて、秋田左衛門尉義盛が合戦の時、昼は紅のほるをかけ黒き馬に

(柱…秋田物語 一)

のり夜は白きほるをかけて葦毛の馬に乗りて、軍のさきをかける。誠に一人当千とぞ見えける。日来の詞に合せてゆゝしくぞ侍りける。終に組合ものなかりければ、自害してけり。云々」と見えたり。此出羽ノ国秋田は本ト郡ノ名ながら六郡に亘るがごとくに、ことくにうどはもはらおもへり。秋田城ノ介ありしゆゑにや。秋田にてもはらつかふ詞にまた調度にまれなにくれと古き名どもの云ひ残れしど、したゞみ貝の訛伝はりてそれとは人もえしらざる事の多なれど、沢水のさは流れうせなむをしければひとつふたつと書もて行^ケば、とを、はた、みそ、よそ、いよのゆげたのたぐひして、人の見なむもつゝましけれど、都多蔓のつたなき筆のまにゝおのがこゝろのほかにまかせたり。

○くずはなくずのうを

大和ノ国芳野葛^{クサハナ}とて葛粉の名におふはむかし国栖^{ツク}人の制りて

貢^{タテマツ}りしより其草をくずの葉ともくずかつらとも云ふか、又、
吉野が皿^{サラタテ}尺とてそのころ鮎魚を

【第十項：「しのゝはぐさ残編 菅江真澄」、十一行野紙（双
辺、版心単線）の表半丁】

此城山にいたりて神無月の枯生の草をはらはせて、きよき筵
をしかせて、此千重に包みたる神像^{ミガタ}をときてなから斗りおし
ひらき給ふ^{へをりしも}ほどに、風さと吹て木ノ葉はらくと散りかゝる
をうち払はむとし給ひ^{へふほど}しかば、多賀谷の館^トに火かゝり、煙高
く棟にたちぬ。こはこはいかにと人々驚きさはげば、君もあ
はてふためき、ちり込し落葉のまた神影を巻をさめ馬をとば
せて飯館^{カヘリ}たまふに、館には露も火のけしきもなく、こゝにあ
る人はつねざまのわざしつゝ、人々のとくあはたゞしく販^へり
来^{へいそぐ}給ふ君をあやし^へみぬ。来る人々あきれてめをひきそばめ、
こは神のなしたまひしみわざにやあらむ。神像をおして見奉
らむとし給ひしかば、神のみいかりならんとおもへり。君も
神像にむかひぬかづき、あやまちくひかしこみてみがたに□
□に人もなくちりこみたる木ノ葉は今に巻こみておはしませ
りとなむ。正月ノ十一日ごとに連歌を奉る例あり。その連歌
は北野の能楽院より奉る也。その発句を某々^{まづ}宿の梅てふ事い
つもしか作りもて宿の梅といふは御願主の句と定たり。百

韻誦^{ヨミ}をはるまで

（柱：しのゝはぐさ一 二十）

六、乙随筆^{おひきふみ}（M—二二八）

本資料の内容は、書物からの引き写し、随筆の草稿などが
なる。鹿角・北秋田地域を旅した際の記録や、文政三年
（一八二〇）正月の詠歌もあることなどから、何度か大館周
辺に真澄が来訪していたことが知られる。本資料は、長い間、
真崎勇助による写文とみなされてきたが、筆致や書誌学的見
地から真澄の自筆であることがわかった。

翻刻と解題は、『真澄研究』第七号（平成十五年三月、当館）
でおこなった。

法量／11・3×16・2

丁数／65丁（表表紙から剥離した見返しを含まない。）

七、「雨中紅梅^{あめの中へ紅い梅}」『秋田先哲遺墨』（M—一四〇七）所収

『秋田先哲遺墨』は、人見蕉雨^{ひとみしょうう}、吉川五明^{よしかわごめい}、平田篤胤^{ひらたあつ胤}など、
近世秋田を代表する先哲五十四名の書状・漢詩・和歌・俳諧
の自筆資料を、画帳仕立て貼り交ぜたものである。この中に、
真澄自筆詠歌の料紙がある。各資料の右上には、著者の名を
書いた貼紙がある。貼紙は、旧蔵者の真崎勇助によるものと

考えられる。

『秋田先哲遺墨』法量／23・5×21・2×（厚）5・7

【表紙裏（右開き）】

雨中紅梅 真澄

ふりつたふ軒のいと水くれなぬにそめてぞかゝる梅の春雨

八、祝詞（M—九六）

鎌田正家が版刻した六月晦日の大祓詞である。この功績

によって、藩庁から藩内の神職に教えるようにとの仰せがあったと、正家の墓碑銘（真澄墓碑の近くにあり）には記されている。

夏越の祓として知られる大祓詞は、もともとは『延喜式』巻八にある。この版刻では、本居宣長が『大祓詞

後釈（オオバラエノコトバゴシャク）』（寛政八年（一七九六）刊）で示した解釈に基づく読みとなっている。

本資料を収集し、真澄の筆跡に詳しい真崎勇助は、版刻の下書きが真澄のものであるとして、次に示すように、二箇所

に貼紙をしている。

【表紙貼紙】「此祝詞は菅江真澄翁が筆なるを桜木にゑりたるなり 明治二十七年六月記之 真崎顕」

ゑりたるなり 明治二十七年六月 真崎顕誌之

法量／17・0×14・8（全体の展開時262センチ）

凡例

○本資料は助詞を小字で示した宣命体となっているが、翻刻では文字の大小を区別しない。

○ルビを漢字下の（ ）内にそのまま示す。

○読点は、本資料に準拠する。

六月晦大祓（ミナツキツゴモリノヒノオホバラヒ）十二月准之（シハスコレニナズラフ）

集侍（ウコナハレル）、親王（ミコタチ）、諸王（オホキミタチ）、諸臣（オミタチ）、百官人等（モ、ノツカサノヒトタチ）、諸聞食止宣（モロくキコシメセトノル）、天皇朝廷尔（スメラガミカドニ）、仕奉留（ツカヘマツル）、比礼挂伴男（ヒレカクルトモノヲ）、手櫛挂伴男（タスキカクルトモノヲ）、靱負伴男（ユギオフトモノヲ）、劔佩伴男（タチハクトモノヲ）、伴男能八十伴男乎始氏（トモノヲノヤソトモノヲヲハジメテ）、官タル仕奉留人等乃（ツカサくニツカヘマツルヒトドモノ）、過犯家牟（アヤマチオカシケム）、雑々罪乎（クサくノツミヲ）、今年六月晦之大祓尔（コトシノミナツキノツゴモリノヒノオホバラヒニ）、祓給比清給事乎（ハラヒ

タマヒキヨメタマフコトヲ、諸聞食止宣（モロ／＼キコシメセトノル）、高天原尔（タカマノハラニ）、神留坐（カムツマリマス）、皇（スメラガ）、親神漏岐神漏美乃命以氏（ムツカムロギカムロミノミコトモチテ）、八百萬神等乎（ヤホヨロツノカミタチヲ）、神集々賜比（カムツドヘツドヘタマヒ）、神議々賜氏（カムハカリハカリタマヒテ）、我皇御孫之命波（アガスメミマノミコトハ）、豐葦原乃（トヨアシハラノ）、水穗之国乎（ミヅホノクニヲ）、安国止平久（ヤスクニトタヒラケク）、所知食止事依奉岐（シロシメセトコトヨサシマツリキ）、如此依志奉志（カクヨサシマツリシ）、国中尔（クヌチニ）、荒振神等乎波（アラブルカミドモヲバ）、神問志尔問志賜（カムトハシニトハシタマヒ）、神掃尔掃賜比氏（カムハラヒニハラヒタマヒテ）、語問志磐根樹立（コトトヒシイハネキネタチ）、草之垣葉乎毛語止氏（クサノカキハヲモコトヤメテ）、天之磐座放（アメノイハクラハナレ）、天之八重雲乎（アメノヤヘクモヲ）、伊頭乃千別尔千別氏（イツノチワキニチワキテ）、天降依左志奉支（アマクダシヨサシマツリキ）、如此久依左志奉志（カクヨサシマツリシ）、四方之國中登（ヨモノクニナカト）、大倭日高見之国乎（オホヤマトヒタカミノクニヲ）、安国止定奉氏（ヤスクニトサダメマツリテ）、下津磐根尔（シタツイハネニ）、宮柱（ミヤバシラ）、大敷立（フ

トシキタテ）、高天原尔（タカマノハラニ）、千木高知氏（チギタカシリテ）、皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氏（スメミマノ脱ミコトノミヅノミアラカツカヘマヘツリ脱テ）、天之御蔭日之御蔭止（アメノミカゲヒノミカゲト）、隱坐氏（カクリマシテ）、安国止平氣久（ヤスクニトタヒラケク）、所知食武（シロシメサム）、国中尔（クヌチニ）、成出武（ナリイデム）、天之益人等我（アメノマスヒトラガ）、過犯家牟（アヤマチオカシケム）、雜々罪事波（クサ／＼ノツミコトハ）、天津罪止（アマツツミト）、畔放（アハナチ）、溝理（ミゾウメ）、樋放（ヒハナチ）、頻蒔（シキマキ）、串刺（クシサシ）、生剥逆剥（イキハギサカハギ）、屎戸（クソヘ）、許々太久乃罪乎（ココダクノツミヲ）、天津罪止（アマツツミト）、法別氣氏（ノリワケテ）、国津罪止八（クニツツミトハ）、生膚斷（イキハダタチ）、死膚斷（シニハダタチ）、白人胡久美（シロビトコクミ）、己母犯罪（オノガハ、オカセルツミ）、己子犯罪（オノガコオカセルツミ）、母與子犯罪（ハ、トコトオカセルツミ）、子與母犯罪（コトハ、トオカセルツミ）、畜犯罪（ケモノオカセルツミ）、昆虫乃災（ハフムシノワザハヒ）、高津神乃災（タカツカミノワザハヒ）、高津鳥乃災（タカツトリノワザハヒ）、畜仆志（ケモノタフシ）、蟲物為罪（マジモノセルツミ）、許々太久乃罪出武（ココダクノツミイデム）、如

此出波（カクイデバ）、天津宮事以氏（アマツミヤコトモテ）、大中臣（オホナカトミ）、天津金木乎（アマツカナキヲ）、本打切（モトウチキリ）、末打断氏（スエウチタチテ）、千座置座尔（チクラノオキクラニ）、置足波志氏（オキタラハシテ）、天津菅曾乎（アマツスガソヲ）、本茹断（モトカリタチ）、末茹切氏（スエカリキリテ）、八針尔取辟氏（ヤハリニトリサキテ）、天津祝詞乃（アマツノリトノ）、太祝詞事乎宣礼（フトノリトゴトヲノレ）、如此久乃良波（カクノラバ）、天津神波（アマツカミハ）、天磐門乎推披氏（アメノイハトヲオシヒラキテ）、天之八重雲乎（アメノヤヘクモヲ）、伊頭乃千别尔千别氏（イツノチワキニチワキテ）、所聞食武（キコシメサム）、国津神波（クニツカミハ）、高山之末（タカヤマノスエ）、短山之末尔上坐氏（ミジカヤマノスエニボリマシテ）、高山之伊穗理（タカヤマノイボリ）、短山之伊穗理乎（ミジカヤマノイボリヲ）、搔别氏（カキワケテ）、所聞食武（キコシメサム）、如此所聞食氏波（カクキコシメシテバ）、皇御孫之命乃朝廷乎始氏（スメミマノミコトノミカドヲハジメテ）、天下四方国尔波（アメノシタヨモクニニハ）、罪止云布罪波不在止科戸之風乃（ツミトイフツミハアラジトシナドノカゼノ）、天之八重雲乎（アメノヤヘクモヲ）、吹放事之如久（フキハナツコトノゴトク）、朝之御霧（アシタノミギリ）、夕之

御霧乎（ユフベノミギリヲ）、朝風夕風乃（アサカゼユフカゼノ）、吹掃事之如久（フキハラフコトノゴトク）、大津辺尔居（オホツベニル）、大船乎（オホフネヲ）、舳解放（ヘトキハナチ）、艫解放氏（トモトキハナチテ）、大海原尔（オホウミノハラニ）、押放事之如久（オシハナツコトノゴトク）、彼方之（ヲチカタノ）、繁木本乎（シゲキガモトヲ）、焼鎌乃（ヤキカマノ）、敏鎌以氏（トカマモテ）、打掃事之如久（ウチハラフコトノゴトク）、遺罪波不在止（ノコルツミハアラジト）、祓給比（ハラヒタマヒ）、清給事乎（キヨメタマフコトヲ）、高山末（タカヤマノスエ）、短山之末與理佐久那太理尔落多支都速川能瀬坐須瀬織津比咩止云神大海原尔持出奈武如此持出往波荒塩之塩乃八百道乃八塩道之（ミジカヤマノスエヨリサクナダリニオチタギツハヤカハノセニマスセオリツヒメトイフカミオホウミノハラニモチイデナムカクモチイデイナバアラシホノシホノヤホヂノヤシホヂノ）、塩乃八百会尔座須（シホノヤホアヒニマス）、速開都比咩止云神（ハヤアキヅヒメトイフカミ）、持可可吞氏牟（モチカカノミテム）、如此久可吞氏波（カクカカノミテバ）、氣吹戸坐須（イブキドニマス）、氣吹戸主止云神（イブキドヌシトイフカミ）、根国底之国尔（ネノクニソコノクニ）、氣吹放氏牟（イブキハナチテム）、如此久氣吹放氏波（カクイブキハナチテバ）、根国

底之国尔坐（ネノクニソコノクニニマス）、速佐須良比咩登云神（ハヤサスラヒメトイフカミ）、持佐須良比矢氏牟（モチサスラヒウシナヒテム）、如此久矢氏波（カクウシナヒテバ）、天皇我朝廷尔（スメラガミカドニ）、仕奉留官官人等乎始氏（ツカヘマツルツカサぐノヒトドモヲハジメテ）、天下四方尔波（アメノシタヨモニハ）、自今日始氏（ケフヨリハジメテ）、罪止云布罪波不在止（ツミトイフツミハアラジト）、高天原尔（タカマノハラニ）、耳振立聞物止（ミ、フリタテキクモノト）、馬牽立氏（ウマヒキタテテ）、今年六月（コトシミナヅキノ）、晦日（ツゴモリノヒノ）、夕日之降乃（ユフヒノクダチノ）、大祓尔（オホバラヒニ）、祓給比（ハラヒタマヒ）、清給事乎（キヨメタマフコトヲ）、諸聞食止宣（モロくキコシメセトノル）、

四国（ヨクニノ）、卜部等（ウラベドモ）、大川道尔（オホカハチニ）、持退出氏（モチマカリデテ）、祓却止宣（ハラヒヤレトノル）。

古文のあるが中にもいとも尊く妙なるは、これの祝詞^{ノリト}にも有けるを、後世に至りては言の清濁はさらにもいはず、よみひがめたる言のおほかりしを、吾鈴屋^{アト}ノ大人の考へ正されたる例のまに^{アト}く皆人のあさよひによみなれむたよりともな

してむと、みづから桜木にゑりて折巻とはなしぬ。
文化十三年丙子春

出羽国秋田

鎌田正家

九、黒甜瑣語稿（一部）（M—一七三三）

表紙に書かれた文字は真澄によるもので、『菅江真澄全集』第十卷（未来社）の口絵（16）に掲載された『水の面影』表紙写真（原資料は焼失）は、本資料に見る「水面景」と同じである。なお、表紙に書かれた「水面景」は緑色に見えるが、これは朱墨が色変化したものではないだろうか。

本資料には、包紙があり、そこには次の文言が真崎勇助によつて記されている。

【包紙】「人見氏反古中ヨリ出タリ 黒甜瑣語ノ艸蒿にや 寺裡郷ノ事見ゆ 但冊子ハ人見蕉雨様之直筆ニして表紙ニ認メタル三行ト水面景ハ菅江真澄先生也。明治四十四年九月鈴木市太郎氏より得」

本資料の内容となる草稿は、独特の筆遣いから見ても人見蕉雨の自筆である。草稿は、基本的には漢字力タカナ交じり文であるが、草稿のためであらう、ところどころにひらがなが交じっており、表記の統一が見られない。翻刻では、それ

らを力タカナに統一する。

最後の一丁半にあたる料紙には、細かな文字が書き連ねられている。本資料にも逆さまに綴じ合わせられているため、本稿では翻刻はおこなわない。

なお、人見蕉雨の『黒甜瑣語』は、秋田さきがけ叢書『人見蕉雨集』（全五冊）の第一冊と第二冊で、上下に分けて公刊されている。これは、明治二十九年に出版された活字本を底本にしたものである。

本稿で翻刻している「秋田昔物語」二十六項目と「由利物語」三項目については、秋田さきがけ叢書『人見蕉雨集』に同一の項目を見出すことができない。よって、これまで公になっていない内容となる。

法量／22・7×13・8

丁数／12丁（厚紙表紙の内側に表紙がある。厚紙表紙と

表紙は、丁数に含めない。）

凡例

○人見蕉雨の文章中、一字空きは闕字を表す。

○右付小文字も一部に見られるが、すべて全角文字にする。

【表紙】

人見氏反古中ヨリ出タリ

黒甜瑣語ノ艸蒿にや

寺裡郷ノ事見ゆ

水面景

【以下は、人見蕉雨の自筆である。丁数の明示はしない。】
叙

過にし方のなつかしきは清少に云こさるれば興尽てやみなん
もいと腹ふくるる我國の昔がたりはほのかにして、夢にきく
雲井のほとゝぎすがいづこのをよりしらべぞ出、松風の音な
らんに、かの端この枚にかいやりおきしをいとほの日取綴れ
ば、又冊子のよぶをぞなせり。実にやうつ蟬の世の中にも何
れぞととふ人もあらば消にしあとゝ答んはかの筆の露かも。

乙卯のとし雪ふかき睦月中の三日御嶺流人硯を埋火に炙り毫
を呵して
題

朝日山東園寺西日山西園寺トテニツノ梵刹アレリ。此辺ノ道
ヲ寺内ト云リ。紫波ノ渡ノ舟主ハ葛洲ト云テ今ノ船守五郎兵
衛ガ家ナルヨシ。山上ノ田村堂モ久シキシルシナルベシ。中
行口元トノイタリト云。三浦□甚右衛門トカヤ云シモ、其頃

ノ名ハイカミ云シヤ。葛洲ト同ジキ時代ノ船守ノヨシ。吉田中將卿紫ノ乙女ガ死セシ事ヲナゲキ玉ヘシ和歌摩滅シテ見ヘガタシ。此卿ノ面影ヲ送シ乙女ノ歌

ヲジカナク浦ノ苦ヤノ夕烟リ恋シキ人ノ影ヤ隔テン旅寝ノ空ニテ紫ノ前ヲ尋ネ玉ヘ(シ||脱)中將ノ御歌

マダナレヌ花ノ梢ニ旅寝シテ木立ユルシキ春ノ夜ヤヤミ

秋田昔物語

蕉雨散人編

○寺内古四王ノ社ハ田村將軍ノ草創ニシテ山ノ形ハ亀ニ似タリ。今ノ鎮坐ノ所ヲ亀ノ尾ト号ス「藩ニ亀頭山亀甲山亀尾山ノ三社アリ」湊ヘノ駅路ノ通ヒハ壬寅ノ遷封ニツケシ道ナリ。東南ノ隅ノ山ヲ昼寝山ト云。里諺ニ聖徳太子御仮寝ノ処ト云。柴ノ渡「後ニ紫波ノ渡ト云フ」ハ湊穀町ノ下流ヲ号セリ。

○西北ノ隅半里余ニ將軍浜ト云アリ。田村將軍ノ陣ヲ取玉フ所也。議定島モ此辺リ幣切山ハ昔樹木アリテ今ノ勝手山ノコト西北ニ砂平場アリ其所ヲ云。幕濯川太刀洗川モ此時ヨリノ名ナリ。

○当社ニ三ツノ華表^{トリキ}アリ。一ハ湊穀保町虚空藏堂ノ辺ニアリ。一ハ秋田ノ辺ニアリ「爰ヲ古ヨリ城ト云。後文ニ三葉ノ稲ノ生シ沼ノ所トアレバ繩代^{ナハシロ}ト云フイワレカ」。一ハ今ノ社前ノ

華表、竈木^{カウロキ}橋モ古ヨリノ名ニシテ社前ノ路ナリ。是ヨリ二町分リ麓ニ三十間ノ沼アリ。爰ニ古ヨリ人ノ種ザル稲三莖生ズ。秋ニナリテヨク実ノル。イカホドノ旱魃ニモ水涸レズ。秋田ノ号蓋シ是ヨリ肇^{ハジ}ムト云。

○社ノ西方ニ龍頭ト云フ山アリ。昔ハ八幡鎮坐ノ所也ト云。年々八月十五日祭儀流鏑馬ノ式アリシト云。旧跡今モ残レリ。西南ノ小森ハ十二林ト云。十二尊師鎮坐アリシ所傍ニ東門院ノ旧跡アリ。今空^{カラホリ}墮ノ形モ残レリト云。

○船ガ沢ハ將軍ノ召レシ船ヲ埋シ所。延暦ノ昔將軍東征シテ下玉フテ此社ヲ造営ノ時柴ノ渡ヲ船ニテ下リ玉フ。今新川ノ船長五郎兵衛御船ニ棹ヲサシ漂セケル。船中ニテ玄米ノ酔酒^{ヒトヨアケ}ヲ侑^{スベ}申ストテ肴ニ梅干ト蓼ノ粕漬ヲ一ト房參ラセシ其時ノ御例トテ御社祭儀ノ節ハ五郎兵衛爰ヘ呼レテ神酒ノ飲福^{ハク}ヲ試ルト云。久シキ物語リ凡千年ニモナルラン。船頭ノ業ヲナシテ連綿タルモフシギノ事也ト云。

○此辺ニ虎ノ井ト云清水アリテ四月八日ノ祭儀ノ節本尊ヲ濯^{アラ}ヒ奉ルヨリ外ニ用ヒザル水也。今ハ虎ノ井モ跡方ナシト云。

○地主ハ代々太子ノ御守トテ祭礼ノ時ハ水干直垂也。此地ニテ昔ヨリ婦人ニ生産ヲナサシメズ。臨月ニナレバ他村ヘ遣ス。産落シ穢明テ家ヘ歸ルト云。当社ノ氏子ハ五辛酒色殺生ヲ禁ズ。年々正月元日ヨリ八日マデ^{モイミ}潔齋也。其内穢アル者ハ門戸

ヲ閉テ人ニ交ラズ。一生鳥獸ヲ食セズ。仮令他國へ移リ住ムトモ是ヲ犯セバ必ず崇ヲ得ル。依テ犬鷄ノ郷役免許也。

○当社昔ハ三千石ノ所勢タリシヲ秋田氏ニ没収セラレテ社堂モ壞頽セリ。遷封ノ後人々再興アリテ六十石ノ油面ト云ヲ御寄付アリシ云。爰ニモ油殿トテ居址アリト云フハイブカシ。

○亀背阪ト云アルハ亀尾ノ号ヨリ儲ケシ名ナリ。朝日邸夕日邸長奢ガ塏^{ちう}面影ノ水曙御殿行逢ノ間ノ墟^{アト}鳥池旅寝ノ巖藤茶屋高清水勅使館剪綵ノ水緒環ノ路妻乞山ナドノ佳名ハ石井武遠ガ此所ノ司セシ頃ニテ文明年間トイヘバ三百余ノ□□ヲ送レリ。一タビ月花ノ叢トナリシハヤゴトナキ雲井ノ客ノ此地ヘ左遷アリシ時ノ名ニシテ紫波ノ渡ト呼シモ此時ナリト云ハ、大久保ノ□翁ノ日記ニハベリシヲ予親シク見タリ。

○王代一乱^亂ニ陽成天皇ノ元慶二年戊戌夷賊起テ秋田ノ城ヲ燒ク。其時ノ国司ハ藤原興世トゾ。防テ敗軍シ、同年藤原保則ヲ出羽ニサシ下サル。又小野春風ヲ鎮守府將軍トナシテ奥州ニ下サレ、同ジク加勢シテ夷賊ヲ討テ勝利ヲ得タリ。此時夷等大ニ蜂起セシト云。

○続日本紀ニ元慶三年己亥秋田ノ城ヲ高清水ガ岳ニ移ス。今ノ古四王ノ辺ノ墟ナリ。又奥羽軍記ニ永承ノ頃東夷ノ渠魁安倍賴良乱ヲナス時ハ太守藤原ノ登任數千ノ兵ヲ發シ出羽秋田城介平朝臣重成前鋒タリト云。

○東鑑九二賴朝ノ代奥州ノ泰衡ヲ征伐セントテ、文治五年己酉八月十三日比企藤四郎義員宇佐美平次実正出羽ノ国ニ入テ先ヅ田川太郎行元ト秋田三郎致文ヲ討トリテ橘次公成由利維平ヲ小鹿島ノ城ニ置クト云。同六年泰衡ノ家人大川次郎兼任謀反シ其勢七千余騎ニテ鎌倉ヘ発向ス。公成維平馳向テ敗走シ、維平ハ討レ公成ハ落逃ケリ。兼任夫ヨリ仙北山本秋田城ヲ經テ志賀ノ渡ヲ越ルトテ水上氷融テ五千余騎ヲ溺レ死セリト云。

○文治年中ニ三浦佐原十郎左衛門義連ニ出羽ヲ感賞ニ賜ハリケレドモ其身ハ相州ニ在テ下ラズ。其後二百年余ヲ經テ康暦年間ニ至リテ始テ一族ノ三浦氏^{ツカサトフ}声名遠江守直盛ヲ下シ奥州十七郡ヲ掌シム。

○応安年中足利ノ代斯波尾張守直持ヲ鎮守府ニナサレ舍弟修理太夫兼賴ヲ按察士ニナサレ出羽ノ官領トシテサシ下サル。因テ憶フ甲寅ノ秋武藤盛達子訪ハル物語ノ序デニ或僧ノ云ルハ、最上ノ山寺ニ兼賴將軍ノ四百年忌トテ□□□□クアリシ。何レノ將軍ゾト云彼山ニハイカニモ大家ノ城墟ト見ヘテ山中ニ六十間ノ長サノ石橋埋リテアリ。石式枚ニテ中ニテ続キテ渡セシモノ也。今ハ奥ノ院ニ万事番三郎ナルモノ在テ山中ノコトヲ司ドルト云リ。左スレバ兼賴ハ「康暦元己未ニイタリ公ニ死ス法名斯波覺就大禪定門安永七年マデニテ四百年」尾

州父子爰二居ラシコト著シ。

○東鑑三十八、頼経ノ代嘉禎五年十月五日薩摩与市公貞「公成ノ裔」ト伊豆前司頼定ト出羽国秋田郡湯川湊ノコトヲ爭論ノコトアリ。頼経ノ御前ニテ逐一吟味セラル、ヨシ。(天註：文治ノ次ナルベシ)

○続太平記二応安二年ノ春北畠中將顯信「故鎮守府將軍顯家卿ノ舍弟」奥州ニ起リ秋田城介顯任出羽ニ起レリト云コトアリ。奥羽此頃ハ多ク南朝ノ御由緒アリ。雄鹿本山ノ神職ハ吉野ノ御願所ヨリ移サレシコトアリト古老ノ話ナリ。顯任ト云シモ紳結家ヨリ出シ人ニテ左中將ニ昇進セラレ其家ノ子安達藤九郎景盛ニ出羽守ヲ玉ハリ城ノ介ニ任ゼラレタリトモ云「此出羽守ハ高時ノ代ニ亡ボサル」。

○兼頼死後二至リ応永年中湊氏愛季ノ領トナリシハ此時ヨリノコト也。此頃マデ秋田津輕ノ境ハ三倉鼻也。檜山モ霧山ト云テ津輕ニ属セシ地ナリ。

○此間ニ女川某ナル者モ暫ク爰ヲ領セルコトアリトモ云リ。サテ此頃マデハ梟勇衆士等爰カシコニ小畧ヲ構ヘ蝸牛角上ノ争ヲナセシ時ナレバ少シ権アルモノハ其近辺ヲ伐塵ケレトミヘタリ。併シ是ハ跡方モナクナリシヤ今其名モ聞ズ。雄鹿ノ南磯ノ女川村ハ其人ノ住セシ処ト云本山ニ王門ノ棟札ニ元龜三年石塚季満ト女川景季ト建立ト云コトアリト云リ。其頃マ

デモ其家残レド見ヘタリ。

○赤神山縁起ニハ建武二年安倍盛季本山ノ社ヲ造修ストアリト云リ。古キ書ニ檜山ノ城ニ下国舜季入道洞虎ト云人アリ。安藤太郎愛季ノ父也。安藤太郎ト号スルコトハ此家ノ官名ニテ通リシ名ト云リ。愛季弟アリ。湊氏ノ嗣トスベク定リタレドモ十六才ニテ夭折シ三男九郎重季此家ヲ嗣テ豊島ニ住ス。此時本家ト確執シテ闘戦ヲナシ敗走シテ終ニ南部信州信直ノ幕下ニナレリト云。

○南部信直ハ秋田ト内縁アリテ幕下ホドノ家也。鹿角^{カッノ}「世ニカヅノ曆トテ文字ニアラヌ曆ヲ出ス爰ノコト也」三百町ハ化粧免ニトテ贈ラレシ処也。信直才弁^{サイベン}アリ。九戸氏ト時ナラズ確執ス。將軍家ヘ申シテ九戸ヲ逆徒トトリナシ此コトニヨツテ終ニ利運ヲ得タリ。九戸モ終ニ將軍ニ弓ヒクヤウニナリテ生害ニ及ベリ。夫ヨリ今ノ大家トハナリシ也。昔鎮守府將軍トテ余勢重カリシ斯波氏モ世ノ末トテ此時斯波治部太夫詮森ト云テ小身トナリテ其頃南部ニ居タリシガ、九戸ト同ジク籠城ノ沙汰アリトテ信直ノ為ニ追立ラレ暫ク仙台ノ伊達家ヘ帰宿セシガ、夫モ叶ハズ都ヘ上リテ益々流落伶仃シテ民間ニ下リシトナン。

○此頃東国大ニ騷擾ノ時ニテ昔ヨリイロ／＼ノ人下リテ管領セシ国ナレドモ、代々霧山ノ城「檜山ノコト」ニ居リテ動カ

又ハ安藤氏実季ノ家ナリ。況ヤ庄園ノ守護ト定メラレレバ頼朝ノ代ヨリノコトナレバ久シキ家トテ応永年中始テ日下ノ姓ヲ將軍家ヨリ玉ハリテ夷狄ノ押トハナサレシ。津輕十三湊ニ住セ^城ヲ構ヘシ時モアリ。下国ノ称ハ其頃ノコトト云、其時ハ松前マデモ幕下ニ属セシ。

○実季ノ代ニハ津輕ハ他領トナリシトイヘドモ湊九郎亡ビテ後ハ豊島秋田マデ属セシユヘ、十萬石以上ノ地也。此頃太閤天下ヲ知シ召サレ諸國ヘ檢地ノ竿ヲ入ラレトテ木村長門守秋田ヘ下ル「大坂討死ノ父力」実季ハ其頃將軍ノ御前モ宜シク其上長門守トハ至ツテ懇ナリケレバ、内願ノ節ヲ申述ル也。軍役ノ費ヲ省カントテ、十萬石ノ場ヲ五萬石ニ竿ヲ願ハレケレバ長門守木村常陸介ト談合アリテ左ノ通ニハ結バレケリ。関ヶ原御陣以後最上義光ノ讒奏ニヨリテ実季流罰ニ□マリケルヲ実季身ノ覺ナキヲ本田佐田正信ヲ以テ嘆キ申サレケレバ漸々其疑ハハレタレドモ 神祖ハ先年竿入ノコトモ知シ召レ宍戸ノ五萬石位ノ処ヲ玉ハリ三春ヘ移リテモ左ノ如ク也。元和ノ家中騷動モ此時ヨリ起リシコトトゾ。

○世々ノ武名近國ヘ聞ヘシ家ユヘ、境ヲ侵スモノモ多クハ聞ヘザリシ中ニモ、愛季ト聞ヘシ人ハ強弓ノ精兵ニテ湊ニテ大蛇ヲ射殺セシコトアリト云伝フ。湊氏「金左衛門」ハ其家ノ支葉トシテ古キ書留モアリ。彼家ノ日記ニ愛季ノ矢五十節殘

リテ湊ノ城ニアリ。篋ハ笛竹ホドニテ根ハ大工ノ大鑿ヨリハ広アリシ。十五束ハ是レトモアリシ。教経ノ矢ト云トモ此上ハアラジ。人ニ語リテモ真トセヌ也。我幼少ノ頃直ニ見タリト云ヲ実季ノ物語ラレシヲ野村某聞リトテ其話ヲ書伝フ。

○比内ノ新田村ニ黄門屋敷ト云アリ「土俗コモヤシキト云」。是ハ織田黄門信雄ノ左遷ノ時居ラレシ所ト云。

○秋田氏国替之時ハ実季ハ勢州ニ隱居セラレ河内守俊季ノミ三春ニ下サレケリ。古キ物語ニ湊氏康季ノ位牌ハ若州小浜ノ羽賀寺ト云ニアリ。十三湊日下將軍高山玄□トアリ。愛季ノ木像モアリ。侍從ノ召服ヲ着ラレシト云。

○湊五郎ノ牌ハ一日市村ノ荅岳山石頭院「今ハ花岳山清源寺ト改ム」ニアリ。此時ハ松原補陀寺九代目草庵和尚此寺ヘ移ラル。寺号ヲ改メシハ吾 義宣君ノ命ナリト云。

○秋田郡種ノ城主ハ秋田左兵衛ナル人ニテ一人ノ放蕩息子アリ。壬寅ノ遷移ニ同道シテ宍戸ニ立退シガ放蕩益々甚シカリシ故勘当シテケルニ旧國ノヨシトテ荷鰯村ノ修驗者ノ家ニ来リテ帰宿セシガ村ノ若イ者等ト喧嘩口論時々ニ及ケリ。一村ノ者申合セ修驗ガ他ヘ行シヲ伺ヒ取掛テ打殺シケリ。半死ノ時一人ノ若モノ穿タル木履ニテ眉間ヲ打シニシタ、力痕付血ナガレテ死ケリ。夫ヨリ此靈怨崇ヲナスコト頻ニシテ立合シモノラ殘ラズ横死セシメケル。此修驗ノ家二人ノ老婆アリ。

息子ノ死セシ日ハ八月十二日トヤランニテアリシニ年々其日ニハ其老婆ニ死霊付テ修驗ニ怨言ヲ云。是ハ一村ヲ修驗ガ頼ミテ斯ヤセシトノコト也。老婆至ツテ長命シテ其節立合シモノハ一人モナク死失セシニ、其日ニナレバ□老婆□其ノ正面ニスハリテ主^{シユヅ}人ヲ罵ル。修驗言ワケヲナス時ハ老婆イカルニ、其時ハ眉間ノ木履ノ打レシ痕マデモアリくト見ヘシトゾ。老婆八十余ニシテ死セシガ、其後ハ此コトナカリシ。此修驗モ六十余ニテ死ガ直ノ物語ヲ聞シトテ武藤氏諸々書シ。修驗ノ宅ハ今モ荷鰯ニアリ。名モ写タレドモ忘レタリ。○今ノ南岳院ガコトカ。

由利物語

○山形仙北由利崩レノ事ハ関ガ原御陣以後ナリ。上杉家ハ米沢ニ遷サレ伊達家ハ百万石ノ内四十万石ヲトラル。仙北横手ノ城主小野崎^{ササキ}義道父子ハ石田ニ与シ秋田氏ノ出馬ヲ塞ントテ石見ニ流サレ我 義宣君ハ水府ヨリ遷ル也。秋田氏ハ常州ノ穴戸ニ移リ戸沢盛安「仙北北浦」モ常州ヘ遷サレ奥羽ノ大^{オホ}小名転変シテ大方ナラヌ騒ギ也。只最上義光ノミ將軍家ノ首尾ヨロシク最上置玉村山藤島白川櫛引飽海田川油利都合六十五万石ヲ感賞ニ附セラル。依テ油利仙北デ牢浪ノ者多クチリくニナリユキテ朽果ケリ。其人々ニハ先ヅ横手ノ城主

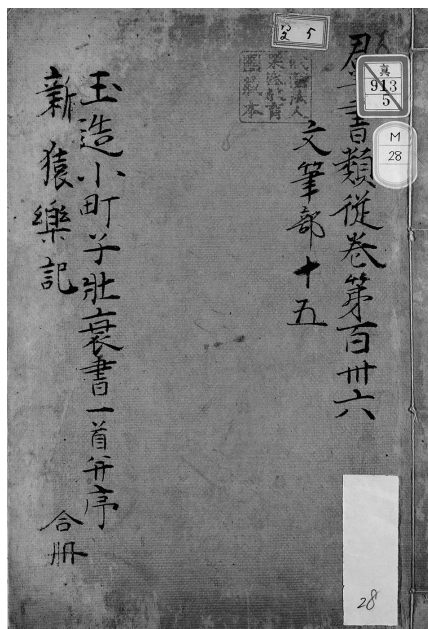
小野寺遠江守義道同子左京亮光道、三梨伝左衛門、西馬音内ノ小野寺茂道、藤原春道、増田ノ土肥二郎道近、櫛岡兵衛門尉、川連ノ小野寺藏人、浅舞下田ノ一門、荒川進藤長左衛門、袴形、長野、門屋白石、沼館大築地織部、堀田、大野関、戸島長十郎、山田十郎、高寺ノ大内内藏之助信道、山田民部少輔清道、至前下村彦三、大平左近太夫大江広治、八柳、大館浅利兵部少輔、片山駿河守、阿仁米内沢加成右馬頭、杉渕小阿仁神成播磨守、五十目藤原秀盛、常業、其外二岩屋ノ一党アリ。

○最上出羽少將義光ノ子修理大夫義安「山形在ス」ノ生害ノコトハ父子不和ニシテ双方讒佞ノ臣傍ニアリテ父義光年老テモ義安ニ家督ヲユヅラザルハ、二男駿河守家親當時江戸ニアリテ 將軍ノ御前モヨケレバ是ヲ家督タラシメン心ナリナド、アラヌ言ヲイヘモテナシテ、双方ノ心底ニフクミアルコトトハナレリ。或時義安光明寺ト云寺ニテ遊宴アリシニ醉犯ノアマリ、戯^{ケル}レ狂ヒテアヤマリテ脇ザシヲ鞘ハシラセ傷ケリ。是ヲ義光ノ近習ドモ例ノ佞言ヲカマヘ義安力ネく^{ツツミ}恚ニテ光明寺ニテ生害セシヲ家人等ヤウく取押ヘシナド、云バ、父義光安カラヌコトトテ此旨將軍家ヘ披露アリケレバ、何レニモ不孝ノ沙汰トアリテ、生害セシムベシ家督ハ家親ニ譲ルベシトノ命令下リケリ。夫ヨリ義光使者ヲ立ラレ早々高野山ニ

登ルベシト申越サレケルニ義安モカネテノ覚悟、其上父ノ命背キガタク家人十四五輩ヲ召連レ道ヲ急ガレシニ、義光ヨリカネテ井戸半左衛門ヲ路次ニ待ウケサセ、トアル林ノ影ヨリ種ヶ島ネラヘヲカタメニツ玉ニテ義安ノ胸板ヲ打抜ケリ。義安大音上ゲテ己等一人モ安穩ヲ置ベキヤトテ刀ヲ拔レケレドモ痛手ナレバ馬ヨリ落テ死ケリ。随ヒシ者ドモ、切死ニコソシタリケレ。井戸ハ後ニ大坂籠城ノ諸牢人ヲ手引セシ咎トテ葉門ノコラズ殺サレケリ。此時ノ怨ユヘトシラレシ。其後義光死シテ家督ハ家親タリ。子孫モ繁昌ナルベキニ冤業ノナス所力大坂落城ノ後家親ハ急死ナリ。此時シモ誰ガ毒殺モヤセシトテ家中騒動シ、其子源五郎家信幼少ナレバ後見ナドノ事ニテモ其国ノ□家士本城豊前守松根備前本根源右衛門尉延沢遠江守其外ニモ上遠兵部少輔大山内膳正増上紀伊守ナドイロ／＼確執ナシ、一向合戦ノヨウヲナシ、此ガ為近国ノ騒動トナリテ仙台北南部津輕会津米沢ナドモ事起ラバ馬ヲ出サントノ結構ナリト聞ヒシカバ、夫ニ付山辺左衛門尉松根備前守鮭登越前守江戸ヘ登リ一々言上ス。依テ評義ノ上源五郎家信ハ本領召上ラレ近江国ニ移サレ五千石ヲ玉ハル。一門家中ハ残ラズ浪人トナリテ奥羽ノ間ニ充満ケリ。最上山形ヘハ保科氏六万石ヲ玉ハリ遷サル。是ハ武田家ノ人ニテ二万石ヲ領サレシニ 二代將軍御前ヨロシク御子ヲ以テ養子ニナサレシ故

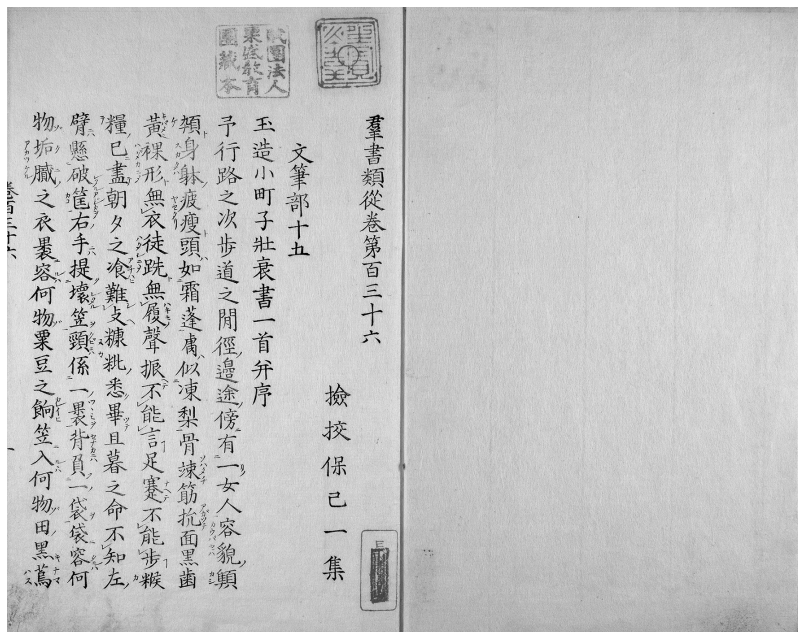
程ナク奥州ノ若松ヘ十万石ニテ遷サレ国民豊穰ナリケレバ、其頃ノ国ブリニメデタ／＼若松サマヨ枝モ榮ユル葉モ茂ルトウタヒ節デ萬郷ニモテハヤセシモ久シキ御代ノ調力モ。

○最上新庄ヘハ戸沢盛安六万八千石ニテ常陸ヨリ移サル。庄内ヘハ酒井撰津守源忠次十八万石ヲ玉ハル。將軍家ノ恩顧ノ人トゾ聞ヒシ。油利本庄ハ六郷兵庫頭政乗二万石ヲ玉ハル。油利ノ殘党先方赤宇津瀧沢芹田内越岩屋小介川鮎川仁賀保等江戸ヘ上リテ將軍家ヘ有ツキノコトヲ願フトイヘドモ叶ハズシテ永ク牢浪ノ身トハナリシ。其中ニ岩屋右衛門尉朝繁ハ中頃仕合セヨクシテ岩屋ノ本領ニ立歸シコトアリシガ、是モ亦旧惡ノタメ召上ラレケリ。後シバラク仙北ノ黒川ニ居タリシガ、一年ホド過テ又々岩ヤノ菩提所永伝寺ニ至リ三宅トヤラシ改名シテ死ケリ。其子孫ハ岩屋寿永軒頼貞トテ秋田ニアリ。今秋田ノ岩屋ハ多ク其党アリ。



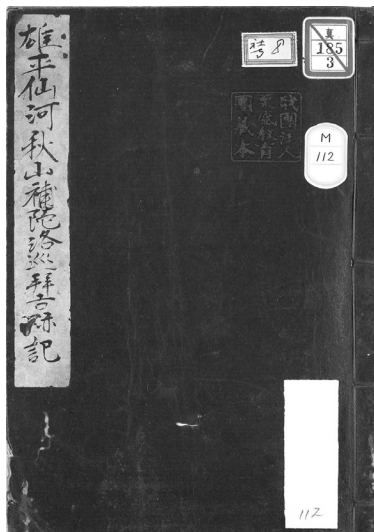
・表紙だけが真澄の自筆である。

表紙



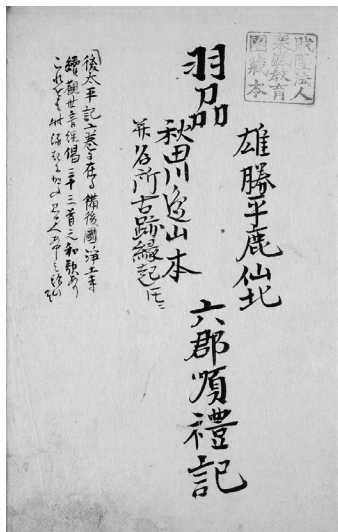
・右上に捺されたのが真澄所用印である。中に見える○印は印章とは異なる。

版本・第1丁表



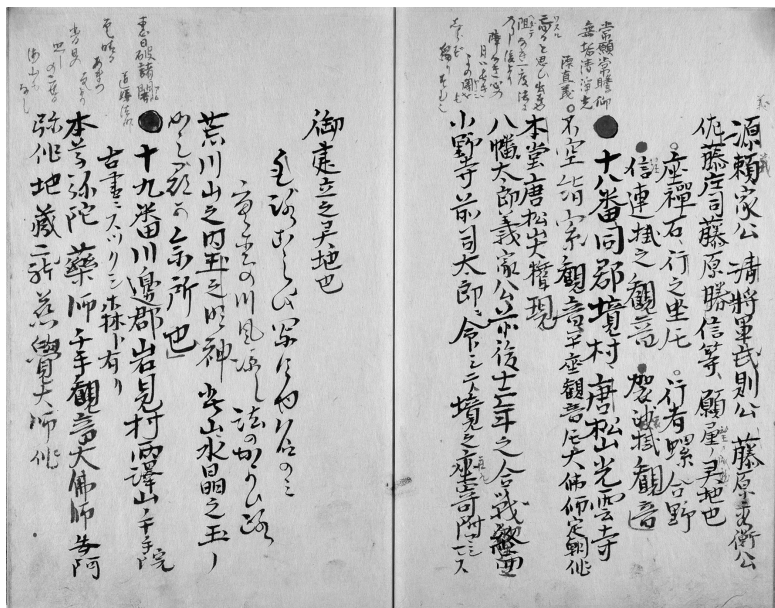
表紙

・題簽は真澄の自筆である。



内表紙

・左にある「後太平記六巻に…」が真澄の自筆である。



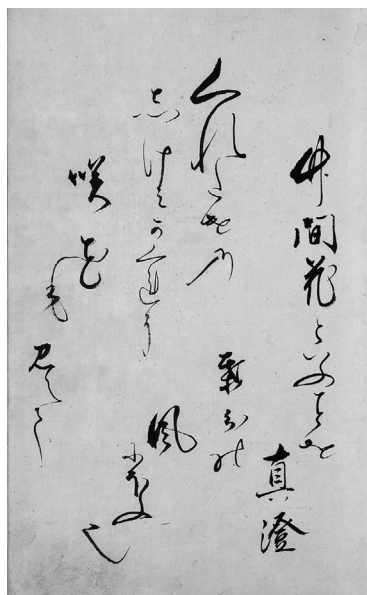
第27丁ウラ

第28丁表

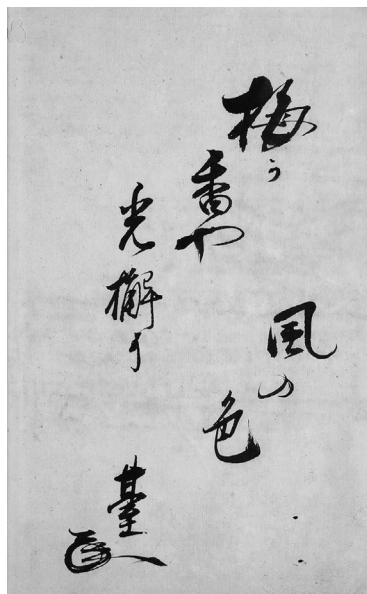
・天註部分は真澄の自筆である（朱字）。

・文字の訂正や追加は、真澄による（朱字）。

・「十八番」上の○印は赤色、「十九番」上の○印は藍色である。



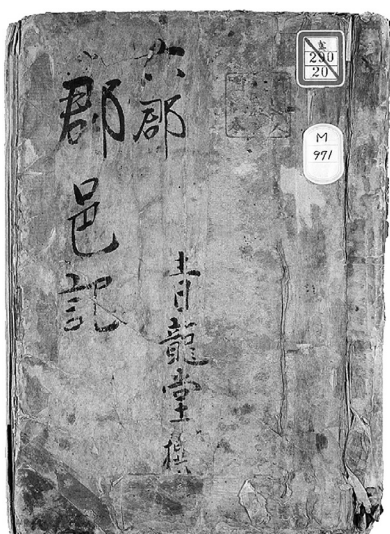
第23丁表



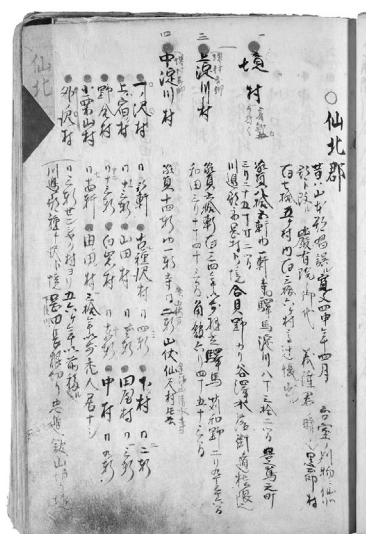
第23丁ウラ

・俳号「臺」の下に見えるのは真澄の花押で、掛軸などの遺墨資料に見られる。

四、六郡郡邑記（M一九七一）



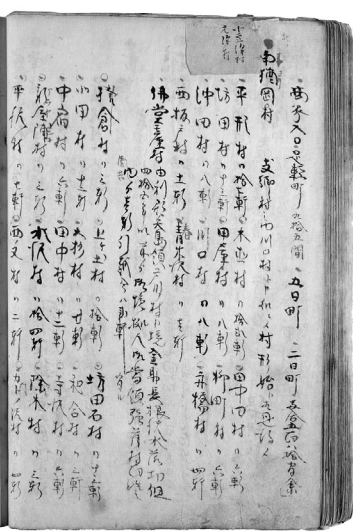
表紙



第39丁表

●印や傍註、傍線は真澄によるものである（朱字）。
左上の見出し（藍色の紙片）も真澄による。見出しは各郡に見られる。

●上部の附箋は、筆跡から真澄によると判断できる。

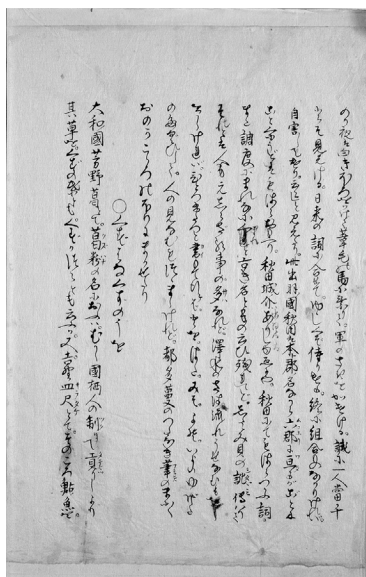


第41丁ウラ

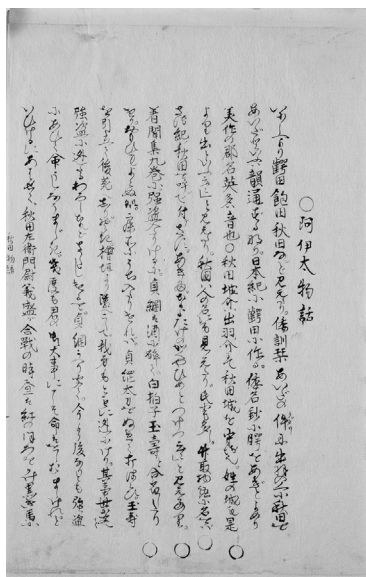


第42丁表

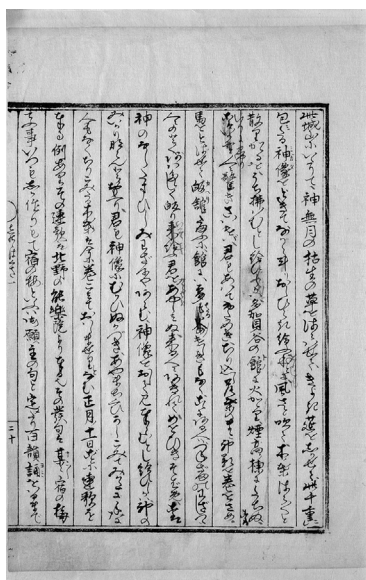
●印と○印、傍線は真澄によるものである（朱字）。



第九項ウラ



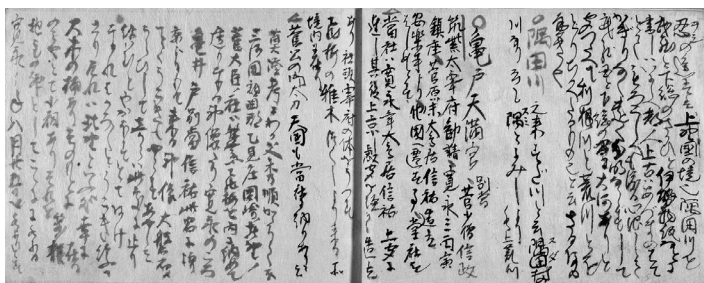
第九項表



第十項表（ウラなし）

六、乙随筆（M—二一八）

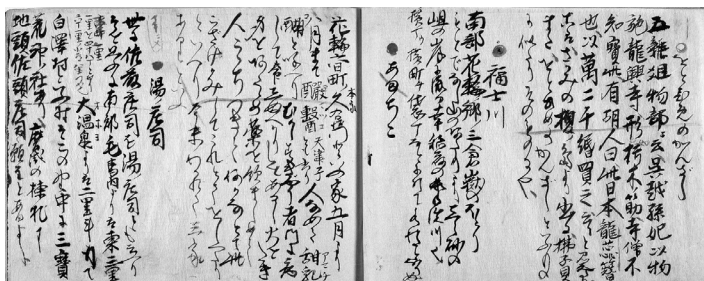
・色の薄い文字や記号は、実際は朱字である。



第24丁表

第23丁ウラ

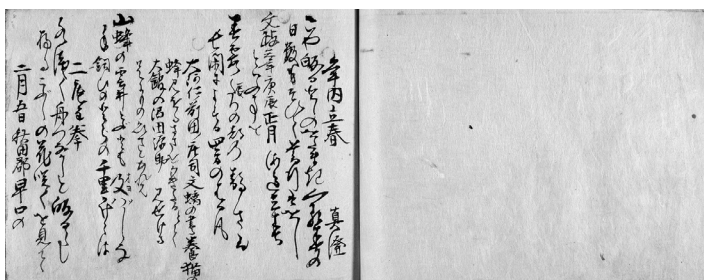
・五行目の「真澄考に」以下は朱字である。



第27丁表

第26丁ウラ

・「湯庄司」の上に「筆二八」とある。これは《筆のまにまに》への転写を示す。



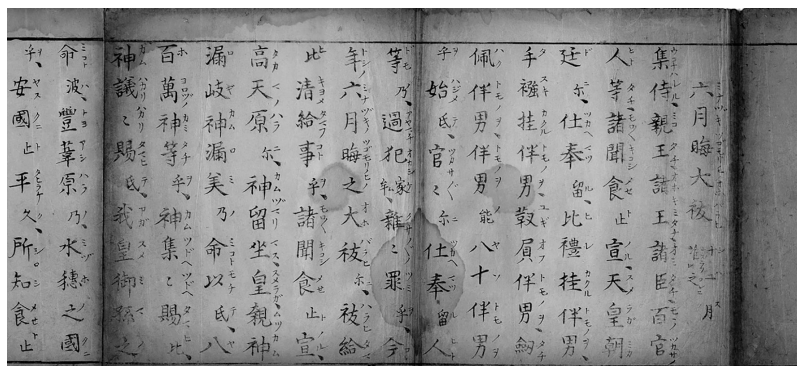
第30丁表

第29丁ウラ

・四行目にある「文政三年」から、《乙随筆》がまとめられた年代が推測できる。

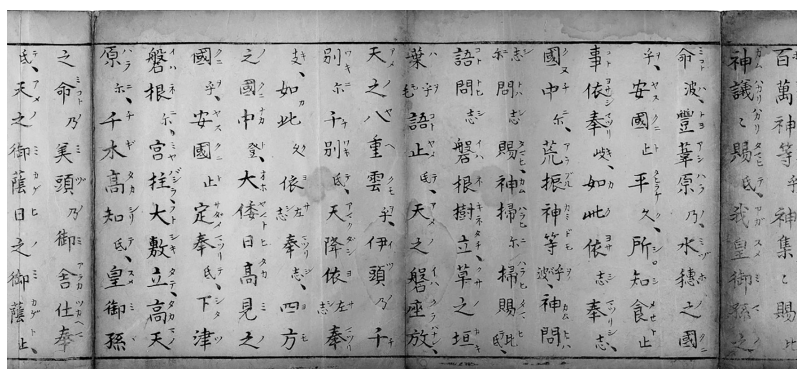
菅江真澄





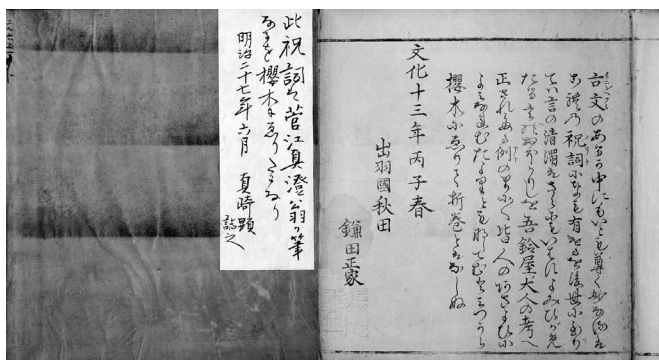
第2折（本文初め）

第3折



第4折

第5折

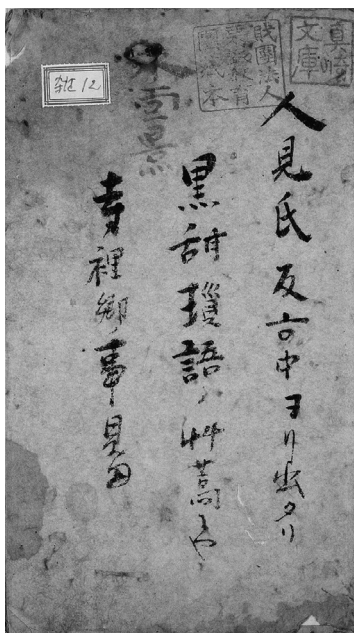


第16折（跋文）

裏表紙見返し
（貼紙は真崎勇助による識語）

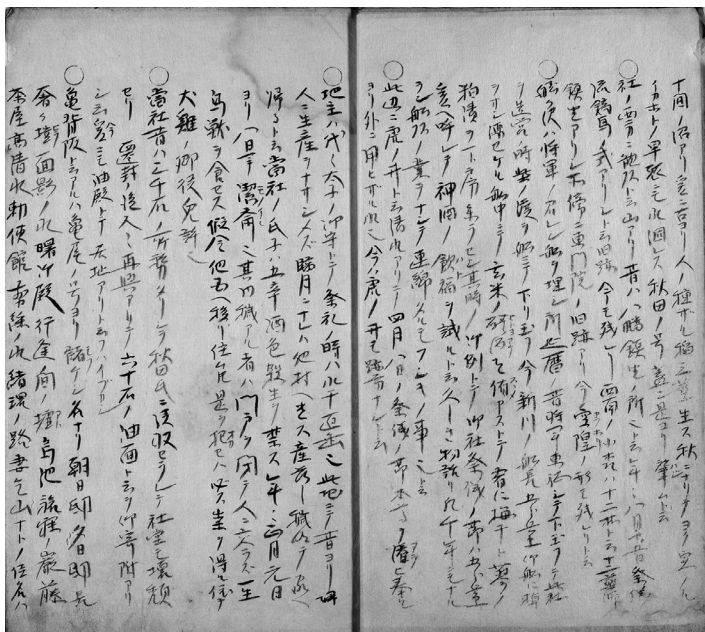


全体（右端の表紙見返しと左端の裏表紙見返しを除き、本稿では16折と数える）



内表紙

・表紙は真澄の自筆で、上部にある「水面景」は緑色に見える。



第4丁表

第3丁ウラ

・人見蕉雨の自筆である。

真澄研究 二十二号

平成三十年三月二十三日発行

編集・発行

秋田県立博物館

菅江真澄資料センター

〒〇一〇〇二二四

秋田市金足鳩崎字後山五二